

現代文訳

落穂集

原作 大道寺友山
享保十二年

第六卷 | 第十卷

六一一 豊臣政権の奥州一揆処理

天正十九年（1591）三月下旬に京都より江戸に帰った。六月初頃奥州の南部大膳大夫信直の親類家老である九戸修理が主人信直に対して謀叛を企て、九戸に同調する者が多く信直自身では鎮圧できないとの知らせがあった。早速奥州へ出陣準備を進める様に指示し、先発は結城秀康公に榊原康政を添える体制で決まった。

この南部の情報に京都へも届き秀吉卿も様子次第出陣するが、先ずは尾州中納言秀次が出発する事になった。蒲生氏郷は在京だったが同じ奥州であり先陣となるため、仕度の為急に会津へ帰る事になった。氏郷へ加勢として秀吉卿から浅野長政、秀次から堀尾吉晴が添えられた（p161）ので、家康公も井伊直政を氏郷の加勢に任命し直政は早速奥州へ向った。家康公は七月十九日江戸を出発し、氏郷は配下の二万を率いて七月十四日会津を出発した。浅野、井伊、堀尾の加勢三人は直接南部へ向った。

九月朔日氏郷の先陣蒲生源右衛門、同忠右衛門は九戸の籠もる穴太井の城を取囲むと、叛徒は城中より弓鉄砲を放し厳しく防ぐので、源左衛門と忠右衛門の配下は多数戦死した。その日関右兵衛が氏郷軍の後備だったが、城兵等が城より突出して右兵衛の陣を切崩そうとしたが、これを幸と引受けて一人残らず討取った。九戸の仲間である根曾利の城兵が穴太井の城を救うため三百騎程で駆けつけたが、氏郷の家来田丸中務を始めその他門崖、寺村衆、梅原、新国上総等と云う者達がそれぞれ攻立て、大半は討たれて残兵は穴太井城へ逃込む。

これを幸と氏郷軍は穴太井の城へ攻込もうとし、この日井伊直政も氏郷と力を競い軍功を尽した。浅野弾正、堀尾帯刀は搦手へ押寄せ猛烈に攻撃したので城兵全て戦い疲れ落城も見えたが、夜になり四方の寄手も部隊を引揚げ、翌日早天より城を攻める事になった。その日寄手の諸將の部隊が討取った首千以上になった。

その夜中、叛徒の將、九戸正実が浅野長政の陣へ来て、主人南部信直の本領が安堵されるなら降参して城を明渡すと云う。長政が是を受け入れたので叛徒側は城を長政に渡した。長政は賊將正実と櫛引の兩人を三の丸へ呼出して番兵を付けて置き、城兵数百（約600）人は矢倉へ上げて火を付けて全て焼き殺した。この時の中納言秀次が三の迫に着陣したので浅野長政は井伊直政と共に南部の反乱が鎮圧された事を述べ、九戸、櫛引等を引連れて穴太井城攻撃の次第を報告した。又降参の兩人は当分会津へ送り、氏郷に預けて秀吉卿の指示次第としたい旨長政は言ったが、秀次は、私が殿下の名代として来ている以上、京都へ伺う事は不要という事で九戸・櫛引兩人は三の迫で殺害された。秀次は家康公と相談して奥州方面の制法を定め、以後平泉を見物して帰陣した。又家康公は岩手沢より古河の城へ入り、十月廿九日江戸へ帰着した。

その頃秀吉卿は木村伊勢守が自分の領地内で起きた一揆を始末できなかった事は失策と云う事で領地を取上げた。又伊達政宗は一揆の者達と内通していたとの噂があるので、政宗の本領を減らして木村が所持していた葛西、大崎を与えた。政宗の本領であった出羽の長井郡、奥州の村塩松、伊達、信夫、新田全てが氏郷の奥州各地における軍功への褒美として与えられた。この時政宗は自分の旧領が全て氏郷へ恩賞として与えられたのを心外に思い、又自身が一揆と同類と云う事も氏郷の報告によつての事と憤り、且つ妬んだ。そこで旧領である伊達・信夫等の

所々で一揆を煽動して氏郷を襲つて討とうとした。ところが政宗の家来である山田八兵衛と手越内膳と云う二人が主人政宗に背き、氏郷に属したのでこの計画を通報した。氏郷は直に軍勢を向け一揆方の責任者達を捕え、その場で殺害したので間もなく氏郷領分は静かになった。(p163)

註1 穴太井の城 別名九戸城、福岡城、白鳥城 二戸氏福岡町

註2 木村伊勢守 第五卷葛西、大崎の乱の処理

六一二 秀吉朝鮮侵攻(文祿の役)

天正十九(1591)年三月廿八日秀吉卿は突然関白職を尾州中納言秀次に譲り、自身は大閣と呼ばれ専ら朝鮮征伐の事を言出し、又山城國小幡山に新城を建築し隠居所とするとの事である。

文祿元(1592)年の春、秀吉卿はいよいよ朝鮮を征伐すべきとして、家康公も二月二日江戸を出発し、京都へ向った。榊原康政が江戸に残り秀忠公の輔佐をする様にと指示あった。

5

同月十九日松平下野守忠吉公は武州忍の城へ移るので、前の城主松平主殿頭家忠には下総国上代の城が与えられたが、其後又同國小義川の城に替った。

註 松平忠吉(1580-1607) 家康四男、秀忠同母弟 忍城 現埼玉県行田市

同年三月十七日、家康公は京都を出発して肥前国名護屋へ向う。この時秀吉卿は、伊達政宗、上杉景勝、佐竹義宣、南部信濃等の関東大名は、家康公の指示で後から出船する様にとの事である。同廿六日、秀吉卿も京都を出発した。

同年四月十二日、朝鮮国へ先陣として加藤主計頭清正と小西撰津守行長が名護屋を出船して朝鮮へ渡海した。その年七月に肥後国で薩摩の住人梅北宮内左衛門と云う者が、清正と行長の兩人留守を狙つて一揆を起こした。この事が名護屋へ報告あり、浅野左京大夫幸長が父弾正の部隊を率いて一揆鎮圧の為肥後国へ派遣される事になったが、秀吉卿は家康公へ、左京大夫は未だ若いので御家の本多中務忠勝を添える様にと頼まれた。そこで忠勝も幸長と一緒に出発する支度をしていたが、一揆の指導者の梅北が既に誅罰され(p164) 残党は皆退散したとの報告があり、両人の加勢は中止となった。

その頃京都から大政所(秀吉母)の病気が切迫していると言う知らせがあり秀吉卿は家康公へ、今朝鮮征伐の最中ではあるが、実母の病気は特別ですから私は小船に乗って直ぐに帰京します。その間、朝鮮国征伐の事は貴殿の采配に任せるので宜しく願います。斯く言う以上はどんな重要な事でも海を隔てた私の方へ相談する事は不要です。まして他人の迷惑を気にする事もなく貴殿の考えで全て進めて下さい。浅野弾正を始め他の面々にも私が貴殿に言った事を心得る様に言います。と云つて五十挺立の関船に乗り京都へ帰った。秀吉卿が家康公へ采配を頼んだ事を聞き、皆家康公が秀吉卿に厚く信頼されていると思つた

6

同年四月廿五日京都で大政所逝去した事が江戸表へも連絡あり、秀忠公は八月十五日江戸を出発して上京した。秀吉卿はたいへん是を喜び、京都逗留の間九月九日に秀忠卿は従三位権中納言に任官となり江戸へ帰った。尚秀吉卿は十月二日京都を出発して再び名護屋へ向い、同地で越年した。

註 名護屋城 大陸進攻の基地とする為秀吉の命で城が作られた。佐賀県唐津市

文禄二（1593）年八月三日、秀頼（幼名捨）誕生の知らせが大坂より名護屋へあると、秀吉卿は大喜びで、今後朝鮮国の事は家康と利家両卿へ任せるので、然るべく指揮されよ、私の在陣はもう不要と言ひ、更に朝鮮も沈惟敬との和睦の（1593）交渉が間もなく成立するので、両卿もやがて帰る事ができるでしょうと言つて、又前回の様に小船に乗つて上京した。

その後家康公が名護屋から上洛した時秀吉卿は、永々の在陣でお疲れでしょうから、早々帰国されると良いとの事で京都を出発して江戸へ帰城した。

註 沈惟敬（? - 1597） 明人、欺瞞外交で日本の再出兵を招いたとして万曆帝に処刑された

六―三 名護屋在陣余話

この名護屋に在陣中の事を次に記す。

その一 浅野弾正の諫止

朝鮮在陣の人々から報告によれば、同国で皆頑張り所々で勝利はしているが朝鮮より明国へ援兵を求めたので、明国が大軍を準備して近く進軍してくる情報がある。もしそうなると現在の日本側の兵数では不足して思う様な成果は挙げられないとの事である。秀吉卿は腹を立て、名護屋に在陣している諸將を招き集めて言うには、朝鮮在陣の面々は明国の多勢に対し味方の人数不足では問題有りと言つて来た。これについては追加の兵を送るのではなく、再度の情報によつては私自身が渡海して、明国はおろか天竺迄も攻込み 朝鮮に味方する国はどこでも切り従えずには置かぬ覚悟である。私が渡海する以上、北陸はもちろん奥州の軍勢迄も出陣する事になるので、今度各々方も皆渡海する事になる。ところで私が朝鮮に在陣した時の留守役は江戸大納言殿へ任せるので、関白秀次と相談して然るべく処理する事を頼むとの事である。

前田利家を始め伊達、佐竹、南部等は何れも朝鮮へ渡海して外国の連中と一戦を交え、異国に武名を留（p166）める事は一生の幸と言ふ。その時家康公は、今度関東から出陣して以来、若し太閤が朝鮮へ渡海される様な事態になれば、先ずは私が先陣として渡海しようと覚悟して相応の人数を連れて来ています。この名護屋にも諸家の部隊に先立つて着陣した事もその積りだったからです。私の在国より遠い奥州の諸家迄も朝鮮へ渡海する事になれば私一人が残る理由もありません。まして貴殿が出陣される、私が先立つて出船するのが当然と御心得下さいとの口上である。太閤は、それは貴殿が私の指示に反すると言ふ事か、それは貴殿には似合ぬ事と不機嫌になる。家康公が同意しないので太閤はたいへん立腹し、一端私が言出した事は誰であらうと反対されては天下の政治を執行する私の立場がないと言ふ。

家康公はそれを聞くと、仰る通り、通常の国政に関する事では貴殿の言われる事に反する事は致しませんが、朝鮮渡海の事は武士道に拘るものです。たとえ勅許や院宣であらうと私が納得できぬ事には承服できません。まして貴殿の指図とは言え、末代迄武名の恥ともなる事故この家康は従えませんと顔色を変えて言い放つた。太閤は益々不機嫌となり一触即発となつたところで浅野弾正が家康公と太閤の座の真中へ進み出た。家康公へ向つて、今度太閤が朝鮮渡海の後に残れないと言われるのは良い考えで当然と（p167）感心しました。昔から人を取らうとする龜は人に取られると言いますが、今九州、四国、中国内で体の健康な侍は大方朝鮮に行き国内の武士は少なくなっています。此の上又今度太閤御自身だけでなく北陸や奥州方面の軍勢迄も引連れて朝鮮渡海となれば、日本国中益々人が少なくなります。そうなるとこの機会を狙い外国が日本を取りに来るか、又は日本の中でも所々で大きな一揆等が起るかも知れません。

そうなれば大納言殿一人では難儀になる事は確実ですから、その苦勞よりはいつそ朝鮮へ渡海

した方が楽と考えられるのは究めて自然です。この弾正めは始めからその覚悟です。全般に最近の太閤には狐でも取付いたのでしようか、そのため今の様な事を言われるのでしようから余り気にかけてない方がよいでしょうと言うのを太閤は聞いて、やあ弾正、己れは私に狐が付いたと言うが何の根拠があつて言うのかと咎めれば弾正は、あなた様へ狐が取付いたかと私が言うのは特別の事でもありません。数年続いた戦乱で天下の人民は困窮しております。北条家を退治し、出羽奥州迄も手に入れられ、日本国中が統一されました。もはや諸人が戦場で苦勞する事もなく安心できるような政治こそが肝要です。それなのに是に氣付かれず、日本へ対し何の罪もない朝鮮を征伐するなど又々諸人が苦勞する様な事は、あなた様の本心とはこの弾正は思いません。それ故にこれは狐に取付かれたと言うのです、よくよくお考え下さいと苦々しく言う。

太閤は非常に立腹して、己れ慮外者めと言い (p168) 脇差の柄に手を掛けて立上るところを織田常真と前田利家の兩人が押しとどめ、弾正そこから立去れと言った。しかし弾正は聞き入れず、この年寄り命は惜しくもないので、お好きな様に成されるが良いと云い秀吉卿の側へにじり寄る。これを見て家康公が、弾正を勝手へと云ったので、徳永寿昌と有馬法印が座を立て、弾正を引立て無理やり勝手へ同道した。この結果家康公と太閤の口論は脇へ行き、秀吉卿と長政の喧嘩となつて終り太閤渡海の件も無くなつた。

其後長政は病氣と称して出勤をせず、全く隠居の形となつていたところ、肥後国で梅北一揆の報告があり、嫡子浅野左京大夫幸長が若輩ではあるが、その器量があると云う事で一揆退治の主将に選ばれたので、父弾正長政も止むを得ず出勤した。

これらの話は徳永如雲齋の覚書の紙面からである。如雲齋の若い時の名は太郎作と云い、弾正が名護屋在陣の時もお供していた者である。

註1 織田常真 織田信雄隠居名

註2 浅野弾正 (長政 1547 - 1611) 秀吉政権の奉行、この時四五歳

註3 徳永寿昌 (1549 - 1612) 高須藩主

その2 陣中水争い

名護屋在陣中、家康公陣所の前に清水が涌いて流れる場所があつた。その清水の側に小屋を造り番人を置き、外の諸陣から水汲に来た者は番人に断つて水を汲む事になつていた。或時日照が続き、水の湧出が少くなつたので、番人が他陣からの水汲みをさせなかつたが、加賀大納言利家の陣所から水汲が十人程来て水を汲むので、番人がそれを制止したが却つて雑言を投げかけた。番人達は我慢ならず口論になつたところ、番人仲間の中間が汲んだ水桶をひっくり返し、一滴たりとも汲ませるものかと双方の中間達が掴み合となつた所へ (p169) 加賀の家中の下侍が駆けつけ、今迄汲んでいた水だから、汲んで当然と云つて喧嘩となり、加賀側から上下大勢が加勢に来た事が家康公陣中へも知れ、何事とも分らず我も我もと駆け出し、加賀勢も更に増え、双方の人数は三千程になつた。鎗や長刀の鞘を払い刀や脇差を抜きかけ、将に勝負をする雰囲気になつた。

そこへ家康公陣所から本多中務、榊原式部、松平和泉の三人と御使番、御目付衆が走り出て、双方の中へ割つて入り喧嘩の制止をした。中でも本多忠勝は洪手拭の鉢巻、榊原康政は諸肌脱いで走り回つた。その時物頭の服部半蔵と渡辺忠右衛門の兩人は預っている鉄砲同心と与力を率いて喧嘩の場所ではなく、加賀利家の陣所近くに待機して組の与力同心を立並べた。その外の物頭達も我も我もと駆け付け名護屋中の騒動となり、利家方からも上級幹部と見える面々が早馬で馳付けてきた。しかし徳川家家老衆が喧嘩を制止しているのも見て間もなく騒ぎ

は鎮まり双方共に引いて無事に収まった。

その時家康公は陣所の屋敷から喧嘩の始終を見ていたが特に意見は無かった。収束後、榊原康政が御前へ出ると、其方が秀忠から陣中見舞いに遙々派遣されたので、接待のため珍しい喧嘩をさせて見せたが、たいへん骨を折ったなど笑った。この水争の事が太閤の耳に入ったのか、その後加賀利家の陣所が替った。

その3 秀吉の大言

名護屋在陣中 (p170)、家康公、前田利家、その外在陣の諸大名方が太閤の陣營で参会の時、秀吉卿は、家康公、利家の兩人を初め其外の衆中も良く聞いて貰いたい。一般に人間の命は定めが無いもの故、今進める明国征伐の間にもし私が重病に掛って死んだとしても、関白秀次を主将として日本勢が一丸となり明国と戦うべきである。その場合私は鬼神となり黒雲に乗って天に昇り、身は鉄の楯となって味方の諸軍勢の矢面表に立塞り、明国四百余州の奴らを片っ端から蹂躪して本意を遂げる積りである。これに付いて柘榴を口に含み火炎を吹出した男の名を何とか言ったが、と言うので施薬院秀成が側から、それは管丞相と言う公家で今の北野天神の事ですと答える。太閤はそれ聞いて、そうだ管丞相の事だ、管丞相程度の男さへ自分の一念を通して雷神となった。その管丞相は秀吉の壘玉の垢程も無い男であると言うので、一座の大小名はすっかり興ざめとなった。

註 管丞相 菅原道真 (845 - 903) 平安貴族政治家、政敵藤原氏の為左遷されると都に崇りが起こったので、天神として祭って崇りを払ったと言う

六一四 関白秀次の謀叛容疑

文禄三 (1594) 年正月、秀吉卿は伏見小幡山に新城を造り隠居所にするとの事で、諸国から人夫を三月中に伏見に集める様に号令をかけた。このため徳川家では江戸城普請を予定していたがこれを中止して榊原康政の下へ諸役人を呼集めて伏見城普請に登った。国役等は壹万貫に付人夫二百人とし、準備の都合上二月中に伏見へ到着する様に言渡した。

同年二月廿七日秀吉卿は吉野の桜見のため大坂を出発、(p171) 家康公も同道した。秀吉卿が吉野より直に高野山へ登ると言うので、家康公にも登山して後帰京して伏見城普請の見分をした。松平主殿介家忠を始め其外の奉行の面々へ、関東より上った人夫達に油断させぬ様指示した。

同年九月秀吉卿は妹として、家康公の息女で北条氏直未亡人である西の郡様を池田三左衛門輝政方へ再嫁させた。

文禄四 (1595) 年三月十八日、秀吉卿は車に乗って家康公の聚楽の館へ来臨した。その時の饗応として家康公より白銀三百枚、小袖百、綿千把、八丈島八百反、褶三百幅、長差の太刀、馬一疋、秀忠公より白銀三千両、小袖五十、越後布百幅、馬一疋、結城秀康公より小袖三十が秀吉卿へ贈られた。

同年七月初頃、関白秀次卿に叛逆の企があると云う情報が秀吉卿に届いた。そこで増田右衛門、石田治部、富田等を聚楽へ派遣してその事実を調査した。秀次は色々釈明したが秀吉卿の疑心が晴なかったので、秀次自身も伏見へ参上して、誤りが無い事を説明したが秀吉卿の許諾はなかった。仕方なく帰館したところ秀次の家来達が相談して、幸いに今江戸中納言殿

(秀忠)が在京していませんから、何となくお招きして人質として取り当座の急を遁れましょう。その内に関東へ聞こえれば江戸大納言殿(家康)が上京され、仲裁されるでしょうから、ご身命は無事となる筈です、と各々が勧めるので秀次も同意した。

それでは明日早朝に秀忠公の方へ使者を向けようと言う事になった。その夜中に伏見から緊急事態との知らせがあったので、急に予定を変えて夜半時に秀次使者は秀忠公宅を訪れ、夜中ではありますが、急いで相談したい事がありますので (p12) お出で願いたいとの事である。この時大久保治部太輔忠隣と土井甚三郎利勝の兩人は相談して、是は只事では有るまいと察しての返答は、中納言は夜前に来客があり、その接待のため大酒で深酔いしておりますので、今の状態では言っても参上はできませんので、暫く様子を見てから言聞かせますと言い使者を帰した。

兩人は秀忠公の前で、この頃良くない噂のある関白殿から夜中急に頼みがあるとは全く納得出来ないのので参上は止めて下さい。今は静かな場所に居られた方が良いと思いますので伏見藤森の下屋敷へ移りましょう。その内に様子も明らかになるでしょうと申上げた。秀忠公も各々が言う通りと支度をして内々のお供で出発した。その時道筋をとうするかとなったが、忠隣を始め数人は竹田通りが良いでしょうとの事だったが土井利勝は、いやいや閑道へ入るのは良くない、単純に稲荷海道を何時もの様に行きましょうと云い、本道を通り直接藤森の屋敷へ入った。

その留守に再び秀次卿より使者があり、今お出で下さいとの事である。取次の役人は、中納言は今朝伏見のさる人と朝茶の湯の約束が有ったのを忘れており、急に思い出しその方の所へ行きました。帰宅の際には直ぐに御屋形へ伺うと言って居りましたと答えて使者を帰した。それ以後は二度と使者も来なかつたが、夜が明けると秀次卿の屋形は四方の門を閉められ人の出入りを留

め、蟄居の指図があつたという。

この時の事を後日家康公が報告を受け、忠隣と利勝兩人の才覚をたいへん誉められたと言う。

同年七月八日、秀次卿は聚楽の屋形を出て、十日の晩方高野へ登 (p13) 山し、青岩寺へ入って閑居していた。昔から高野山は殺生が禁制なので、命に關しては大丈夫と皆が思っていたが、同十五日に秀吉卿の命令として羽柴左衛門大夫、福永右馬介、池田伊予守三人が登山して奥山上人に面会し、その趣旨を述べると秀次卿は終に自殺した。(この時廿八歳) 雀部淡路守が介錯しその刀で直ぐに殉死した。山本主殿(十八歳)、不破万作(十八歳)、山田三重郎(十八歳)も夫々殉死を遂げた。又東福寺の僧際西堂も殉死したと云う。これ以後高野山は科人が遁れる事が出来ると言う風習は無くなった。

この頃家康公も秀次謀叛の件で上京するため、江戸を出発し七月廿四日伏見へ到着し秀吉卿へ面会したところ、秀吉卿は、遠路の所早速上京頂きたいへん満足である旨述べた上で、秀次が常々不行跡を重ねていた事、並に今度の謀叛の行為等を語った。

七月晦日、秀次の子供(男子一人、女子一人)、抱えていた妾廿余人を荷車に乗せて洛中を引廻した上三條川原で下々の役人に全て殺害させ、秀次及び二子の首と妾二十四人の死骸を一ヶ所に埋め、その上に石を立て畜生塚としたが、今でもこれは残っている。其時秀次へ悪事を勧めた者達は殺害され、或は自殺し、又は諸大名方へ預けられた。家康公の方へも一柳右近将監が預けられた。

同年九月七日秀吉卿は浅井備前守長政の娘を養女としていたが、秀忠公へ嫁がせた。

註 秀吉側室淀の妹、江又は小督 (1573 - 1626) 秀忠正室 (八歳年上)、家光、千姫の生母

慶長元(1596)年五月八日 家康公は内大臣に任ぜられて、同十一日(p174)参内する。同月十三日秀吉卿の息男捨丸(その時四歳)を権中納言に任ぜられ秀頼と号する。秀吉卿父子は車に乗り参内した。

同年閏七月十三日の夜中0時頃、大地震が起こり大地が裂けて水が湧出す。京都や伏見の大居宅をゆり崩し死去する者無数で、洛陽大仏の像等も崩壊した。中でも伏見城中の地震は強く、大殿が崩れて上臈や女房七拾二人、中居の下女達五百余人が死亡した。この時家康公の屋形も所々崩れた家が多く、家臣の加々爪隼人正が押つぶされ死亡した。

註 加賀爪政尚(隼人正 1562 - 1596) 家康近習

六一五 再び朝鮮に渡海 慶長の役

慶長元(1596)年九月、朝鮮国と和平に関し明国より使者が来たが、その書簡の内容は秀吉卿の意に沿わず、又朝鮮国王の太子も来朝がなかったので立腹して使者を帰し、再び朝鮮国へ渡海の準備を命じた。京都や伏見では将に浅野長政が言った様に、太閤には狐か狸が取付いたと思えると貴賤共に囁きあった。

同十二月五日 家康公の家臣久野民部少輔宗秀と三宅弥次兵衛は遺恨から決闘して双方共にその場で死んだ。その時宗秀の老父久野三郎左衛門は出家して宗安と名乗っていたが、倅の民部に頼っており老後の悲歎が大きい事を家康公が聞いて不憫に思い、下総国に千石の地を宗安に与えた。諸人は是を聞き伝えて家康公の情け深さに感心した。

慶長二年(1597)正月廿五日加藤主計頭清正と小西撰津守行長は船の纜を解いて再び朝鮮へ渡る。その外の諸軍勢は二月になってから出船する様に秀吉卿は申渡した。(p176)

同年七月秀吉卿は前田玄意法印を呼んで、去年七月の大地震の時、大仏殿の本尊が崩れたのは即ち土仏だからである、今迄あった本尊が無いのもどうかと思うので今度は奈良の大仏の様な金仏にしたいが今迄の堂では鑄物は難しいだろうから、木仏で建造する様にせよと言う。そこで玄意法印は京都中の仏師を呼集めて検討させた処、仏師達が言うには、精確に測定して作ればどんな大仏でも出来る筈ですが、今迄その様な大仏を造った事がないので確実出来る保証はありませんと言う。この趣旨を玄意が伝えたところ秀吉卿は、仏師達の言う事も分るが、今の堂を毀して金仏を鑄立てるのどうかと思うので思案するとの事である。その後再度玄意を呼出し、今の大仏殿に相応の本尊を思い付いた、信濃国善光寺の如来を持って来て大仏殿の本尊とするとの事で、崩れた仏像を全て取り払い、その後善光寺の如来を移し洛中洛外の諸宗門の出家を呼び集めて供養をする様にと言う指示となり、玄意法印はそれを実行した。

註 前田玄意、豊臣政権下の京都所司代、五奉行の一人、徳善院、法印、丹波亀山城主

同年三月十二日、秀忠公は武蔵国稲毛へ鷹狩りに出掛けたが急に病氣となり、江戸から医師や老中、近習達が早馬や駕籠で駆けつけ、江戸中が混乱した。しかし疱瘡だと言う事で段々快癒したが、この事が宿継の飛脚で京都へも報告されたので、家康公も大変心配した。そこで見舞いとして永井弥右衛門を江戸へ下らせたが、四日で稲毛の屋敷に参上した。家康公の口上を伝えるため(p176)秀忠公の御前へ出ると、容態も快いと言う事を宜しく伝えて欲しいと小袖等拝領した。早速弥右衛門は稲毛を出発して、同月二十五日には伏見へ帰り、容態についての医者

言上など含めて報告した。家康公はたいへん御機嫌で、弥右衛門が短時日で往復した事の労をねぎらった。

慶長三(1598)年正月二日、家康公は急に石清水八幡宮へ社参するので、お供の侍や付添い迄忌服に改める様に指示があり、家中の上下の人々は不審に思った。将来についての夢相により参詣されたのだ人々は言うが、その詳細は誰も知らない。

此夜江戸で米津清右衛門の妻女が夢を見て一首の歌を詠んだ事が後日分った。

盛りなる 宮古(みやこ)の花ハ散果(ちりはて)て

吾妻の松ぞ代をハ継ぎける

註1 夢相 手相と同じように夢で吉凶を判断する

註2 歌の意味は京都の豊臣家の滅亡と関東の徳川家の代を継ぐ繁栄を暗示するか。

六一六 蒲生家の所替および原因余話

慶長三(1598)年二月九日、蒲生藤三郎秀行は親父氏郷が秀吉卿より拝領した百万石の領知を全て放され、替りに下野国宇都宮に十八万石を拝領して所替となった。この為会津の大家中は上下共に肝を潰し大変な混乱となった。

この秀行の所替に付いて一説があり、私聞き伝えた事をここに書記す。但し真偽は不明。

氏郷の家来に蒲生四郎兵衛と言う物が居た。彼は元赤座隼人と言い、氏郷とは昔からの由緒もあり、人物も利発で戦場での活躍も少なくなかった。そのため氏郷に気に入られて次第に出世

し、氏郷が大身になると四郎兵衛にも高知行を与えて松崎と言う所の城主に任命(任命)した。今では旅家老等と言う役割で、氏郷が在京の時は毎回お供して上方で瀬田掃部を始め、公儀の役人とも親しく付き合い、蒲生家にこの四郎兵衛が無くては為らぬと、諸人は持てはやした。しかし氏郷は良将だったので見抜いていたか、領内の大切な刑罰には四郎兵衛を関与させない様にしていた。

ところが氏郷が不慮の死を遂げ、子息秀行の代になると氏郷以来の手づるとあり、全てついて石田三成の内意を伺うのが常となった。そのため四郎兵衛が上方の公儀周辺との付き合いに馴れており、外の家老達は余り関与しないので、四郎兵衛の威勢は次第に増長して我侭な振舞も出てきた。しかし誰も四郎兵衛を押さえなかつたが、唯一亘八右衛門と言う氏郷時代からの会津惣奉行の重職にある者が、四郎兵衛のやり方が良くないと蒲生源左衛門始め其外家老へ内々で報告した。四郎兵衛のやり方では秀行が成長して自身で判断できる様になる迄の間が不安であると言ふ事が語られているのを四郎兵衛が聞くと、須賀太左衛門と大塚七右衛門の兩人に命じ八右衛門を殺害させた。

それ以後全家老達の争いとなり内々では解決できなくなつたので、源右衛門を始め筆頭の家老三人が伏見へ参上して公儀の捌きとなった。伏見城で太閤が直々に裁許する事になり、在京の諸大名、諸役人各々が列座する中へ双方を呼出して対決となった。源右衛門は、氏郷が存命の時以来(以前)、上下に限らず一人の人を殺せば大変な重罪であり、どんな身分の低い者でも死罪の場合は全家老の評議を経なければならぬと家法で決まっております。特に八右衛門は太閤様も御存知の者であり、其上領内の刑罰を任せてある重職の者であるのに、家老達に相談もせず、四郎兵衛の一存で殺害する事はできません。私共が今度当城へ参上するにあたり、

家中大小の諸役人達を集めて細かく検討致しましたが、八右衛門に非があると云う者は一人も居りません。それは秀行のため、家のためと言う事ではなく、自分の意趣で殺害させた以外の何者でもありませんと陳述した。

その時石田三成は蒲生家の担当、浅野長政は月番なので両人は中央に座っていたが、三成は四郎兵衛に向つて、其方の言い分はないのか、何でもあれば言いなさいと助言したが、四郎兵衛は一言も言わず謹んで口を閉じていた。従つて弁論は負けになる所だが、四郎兵衛は懐中より一枚の書付を取り出し、それを目付役人が取次ぎ長政へ渡した。三成、長政両人が一覽し、双方共に立つ様にと三成が申渡し各々退出した。この時太閤は病氣の為出座できず、上段の簾をかけた中で弁論を聞いていた。三成一人がこの書付を簾中へ持参したが、その後秀吉卿は、四郎兵衛は重大な落度なので重い罰を受けるべきであるが、助命して加藤主計頭清正へ預けすると言渡した。この頃清正は朝鮮国に在陣しており、四郎兵衛も朝鮮国に向つた。

その後藤三郎秀行は(216)未だ若年と云つても家中の騒動を解決できず、公儀の裁許を請けた事は、奥州の押へである重要な地に置く訳に行かぬとあり、知行を減らして宇都宮へ所替となる。その後には上杉景勝が入り大身に取立てられたが、これは全て石田三成の計略だった。その理由は三成が智恵を働かせて考えた事は、太閤の病氣は治らないだろう、もし大綱が死去すれば自分が天下の権力を握る事も可能ではないか。その時に邪魔になるのは家康公だけである。特に家康公には蒲生氏郷が付いているので中々難しい相手である。それならば枝葉を枯して後その根を断つと言う諺の様に、何としても先ず氏郷を亡き者にしたいと悪意を持った。

そこで氏郷方へ家来同様に気安く出入りしている瀬田掃部という茶人を三成は手懐けて細かく

打ち合せ、氏郷を朝茶の湯に呼んで毒茶を与えたので氏郷はその毒に中り、間もなく病氣となり死去した。息男の藤三郎(25歳)への家督相続の時、例の四郎兵衛は伏見へ登り、家の用の為三成方へ気安く出入りしていた。三成は四郎兵衛の人となりを観察し、利発者ではあるが芯の無いお調子者と見届けて目をかけていた。

或時四郎兵衛は瀬田掃部を通じて三成へ、蒲生家は外の家と違い家老級の者が数名おり、どんな事でも集つて相談します。多数の家老の中には賢慮ぶり我意を通す者あり、又(p180)全くの分らず屋も居るので、ややもすると結論がでない事が多々あります。

主人秀行が成長する迄の間は行政(刑罰)の家老を二名程公儀より御指名なさらねば、奥州の押への家柄とは云え、万一の場合秀行は若輩ですから、相談の結論が出ないのでと心配しておりまずと申入れた。三成はそれ聞くとその通りだと同意し、秀吉卿へどの様に説明したのか、外々の家老達へ相談は不要である、其方一人の判断に任せて一切の刑罰など行う様にと書面に秀吉卿の朱印を押したものを四郎兵衛に与えた。前述伏見城での討論の時、最後にこの書状を提出したので、四郎兵衛は死罪の者だが助命して流罪となった。

三成には前述の有望があるので、良い相談相手を捜したが、上杉景勝の家臣の直江山城守兼続に目をつけた。彼は右四郎兵衛と違つて本當の智恵も才覚も人に勝れ、武道にも達して大器の生れ付きである。元来知り合いではあるので先ず親しくなり、それから無礼講と言う事を初めて近習の者達も除いて二人だけで閑所で会った。行儀に拘らぬ出会いから次第に入魂になり、三成が日頃考えている事などを打ち明け、其方の助力がなければ事は成らないなどと頼みこめば直江は、私を見込んで貴殿がお頼みとあれば命にかけて働く事は毛頭厭いませんが、主人景勝は今の様な少身では何の役にも立たないでしょう。せめて百万石以上の身上でなければ、今時

の徳川家などへ (p181) 手向かう事はできませんと言う。そこで三成は当然と思い、何とかして景勝を大身にしたいと考えた事が始まりで、この謀計により秀行を所替にして旧地を全て景勝へ与えた。

この話は関ヶ原の戦いの頃より世間で語られていたと、徳永如雲齋が書留めている。

瀬田掃部が氏郷へ毒を盛ったと言う事に関連するが、或時家康公が茶室の管理者を呼んで、瀬田掃部が細工した茶杓を取集めて持って来る様にと言われたので、持参すると六七本程筒に入ったものを自ら節の所より折って、これを捨てる様にとの事だった。それは氏郷へ毒を盛ったという世間の噂は事実で、そのために掃部は不届者との考えからかと近習達は噂した。氏郷は掃部方で毒を盛られたとは思っていないが、その前日伏見の城へ上った時、太閤が饅頭を出したのを一ツ二ツ食べたので、もしや毒の入った饅頭かと思ったか、病中の歌に以下がある。

限りあれば 吹かでも花は 散ものを
心せわしき 春の山風

註1. 蒲生秀行 (1583 - 1612) 氏郷嫡子

註2. 直江兼続 (1560 - 1619) 上杉家家臣

六一七 太閤秀吉の死去、大陸から撤兵

慶長三 (1598) 年四月、羽柴筑前守利家は従三位に叙せられ、権大納言に任せられる。

同六月二日、太閤の病気が重いと知らせがあり、家康公、秀忠公其外在京の諸大名が城に登り病状を伺う。医師達より快気は難しいとの説明があった。

同六月十六日の夜に入り、伏見中が何故か騒々しいので、藤森辺に在宅の家臣上下共に伏見の家康公宅付近に集った。家老達が御前へ出ると家康公は井伊直政へ、この騒動は当 (p182) 所の騒ぎでも無い様だ。京都の方を見ても夫ほど大事の様にも見えないが、空が明るい様に思えるので早々見せに行かせよとの事で、直政自身が馬に乗って駆け出して稲荷辺行ったが、京都近くなる程一段と物静かになる。そこで早々帰ってその旨を報告している中に伏見中の騒ぎも止んだ。

この事は後日判明したが、その頃洛陽大仏殿の本尊が必要となり、太閤の指示で信濃より善光寺の如来を運び本尊に据えた。元来善光寺の如来ハ華やかさ嫌うのに無理に移設するのは仏意に叶うものではなく罰が中ると下々で噂していた。これが上にも聞こえ北の政所を始め、淀殿等から早々送り返す様にと催促があり、急にその夜返す事になった。その夜京都を去る仏像に洛中の人々は名残を惜しみ、至る所で灯りを一ツ二ツ宛燈した。これが空に映り少し明るくなり、人声などもあった事によると言う。これは米村権右衛門の話である。

22

七月八月の両月の内、二度に渡り秀吉郷は家康公を呼び、私の今度の病気は快復しないだろう、もし私が死んだら天下の政事は貴殿に任せると、皆に伝えて置くのでその積りに願いたいと特別に頼みがあったが、家康公が堅く辞退した。そこで幼年の秀頼卿へ天下の政務を譲るには、今の俣では不安があるので家康公を始め、前田利家、毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝を五大老職と号して天下の大政を司る様にとあった。そして浅野長政、前田 (p183) 徳善院、増田長盛、石田三成、長束正家を五奉行として天下の大事は五大老が執政し、其外の難事については全て五奉行の相談で進める事、又中村一氏、堀尾吉晴、生駒親正の三人は中老と名付けて、五大老と五奉行の間で確執等あった時にこれを仲介して収めるものとした。

八月九日になると秀吉郷の病気は更に重くなり家康公と前田利家を寢所に招いて、私の病気は日々悪化しており快復の見込はない、死去した場合は暫くこれを隠して私の命令として、浅野弾正と石田治部の兩人を朝鮮に派遣して、彼地に在陣している軍勢を残らず帰帆させたい。しかし最新の朝鮮情勢が不明なので、若し撤退できない旨の報告が兩人からあれば、両卿の中どちらか一人渡海して、朝鮮国内各所に在陣する諸軍勢を一所に集め大軍を編成して、明国軍を切崩し一手並み見せて頃合を見て撤退する様命令されたい。又利家には相談しなかつたが、今度私の病気の事もあり、二度に渡り内府(家康)へ相談したが引受けない為、止む無く幼年の秀頼へ天下を譲る事にした。秀頼は未だ幼年で成長にも不安があり、その上無事成長してその能力がどれ程かも心配であるので、秀頼が相応の人に育つ様に利家に任せる。又秀頼が幼年の内は天下の政治は内府郷へ任せるので、如何様にも取計らう様にと遺言があつた。

家康公と利家郷は共に(518) 挨拶してその場を立つた。家康郷は利家郷へ向つて、太閤は秀頼の事を心配している様に見えるので、貴殿と私が一筆を認めて披見に入れてはどうでしょうかと云えば利家郷も、なるほどそれは良いお考えだと云い、両卿から神誓文を出したところ秀吉郷は大へん喜んだ。家康公と利家郷の神誓文は、今日云われた事は全て承知しましたとあり、残る三老からの神誓文は翌十日の日付で今日という文言は無い。宛名は五大老共に秀吉郷宛である。五奉行、三中老は同役連名で家康公と利家郷宛である。これらの事から同じ五大老と云つても家康公については、太閤の信頼は特別だった事は間違いない。

同月十日京都東山にある將軍塚が烈しく鳴動して、丹波亀山淀の城内迄もその鳴動が聞こえたとの事で、京都や伏見では貴賤共に不安を感じた。

同月十八日前関白豊臣秀吉郷は山城国伏見城で薨去した(行年六十三)。しかし遺言で当分喪は伏せ京都東南の阿弥陀か峰に葬つたが、奉行から前田徳善院および高野山奥山上人が密葬を執り行つた。

註1 將軍塚 円山公園の華頂山頂大日堂境内にある円墳、坂上田村麻呂伝説

註2 阿弥陀が峰 京都市東山区、豊国廟、豊国神社、方広寺もある

同月十九日の早朝、石田三成は浅野長政へ、太閤からの指示で家康公へ宇治の白茶と言う銘茶一袋と淀鯉二本を貴殿の手紙を添えて送る様に言われた旨相談した。長政はそれを聞き、いくら当分発表はしないと云つても太閤は昨昼他界されたのだから、これは後日の為にも宜しくないと返答した。(p.186) 三成は再度、その事はもつともであるが、当分内密と言う事の確認でもあるからと言うので長政は三成の主張に任せた。ところが十九日の十時頃このお札と容態見舞として家康公は秀忠公も同道して登城すべく途中迄来たところ、石田の家来八十島道与斉と云う者が道脇で下座している。

家康公の顔見知りの者なので言葉をかけた時、道与は刀を外して家来に持たせて駕籠脇で何か用ありげにしているの御側衆が尋ねると、私は石田治部少方より使に参りました、直接申し上げたい事がありますと言うのでその旨伝えると、駕籠を据え、御供も遠ざけ、道与と呼ばば道与は脇指も外して駕籠近く這いより、太閤は昨日昼前に薨去されましたが、当分堅く内密にという御遺言通りしております。あなた様も御存知ない事にして風気などと仰られて御登城には及びません。この事を直接申上げる様に石田から申付かりましたと口上した。

家康公は全て心得た旨返答し、そこから父子共に帰館した。その頃秀忠公は関東へ下向の

予定だったが、太閤の病気が重態という事で逗留していたが、今日の昼立で早々江戸へ向う様にと指図があり急ぎ支度を調え出発したと云う。

其後太閤薨去の発表があり、在京の諸大名が各々伏見の城へ上り秀頼郷へ悔を述べた。

其時 家康公は利家郷と相談の上、太閤の遺言の趣旨を浅野長政と石田三成へ伝えたので、
両人は朝鮮への出陣用意を準備した。(p186)

九月十六日浅野と石田は大坂を出船して名護屋へ向った。その時家康公は利家郷へ向って、此度長政と三成が行き、朝鮮在陣の軍勢が間違ひなく撤兵できれば喜ばしい事です。もし撤兵が難しい旨報告あれば、我々が渡海する必要があるますが、前もって在国の家中の者達に準備をさせて置かねばなりません。利家郷は、その時貴殿は上方の事を放置して朝鮮へ渡海する訳に行かないでしょう。太閤の御遺言も両人の内一人と言われたのですから私が行きますと。家康公は、おっしゃる事は御尤ですが、朝鮮の様子がどうなるか分りません。もし直ぐに解決しない時は朝鮮国の寒気は強いと云いますから、御老躰で特に病身の貴殿ですから大変です。私は貴殿に比べて歳も若く当座病気もありませんので、先ずは私が渡海する予定で準備なども指示する覚悟です。何れにせよ朝鮮に渡海した両人からの報告次第ですから、その時に又貴殿が行くか、私が行くかは相談しようと言う事になった。

家康公は井伊直政へ指示して総勢三万程で渡海を計画させた後、籐堂佐度守高虎を呼び、先日浅野弾正と石田治部の両人が下向したが、其方も朝鮮へ行って、彼国に在陣する人々が早々帰国出来る様に工夫する様にと指示した。その日夕方高虎方へ使者を派遣して、近日中に出船すると思うが、今朝相談した事で追加が(p187)あるので今夕か明朝来て欲しいと伝えたと、留守居の者が、高虎は御館より帰ると其の促支度をして先刻出船しましたと言う。

使者が帰ってその旨報告すると、家康公は手を打って伺候の人々へ、あの佐渡守は私が知った時は与右衛門と言う小身者だったが、太閤に見出され段々と立身出世しただけの事はある。万事素早い様子は只者ではない、若者達は後学の為にも彼を見習うが良いぞと言われた。

著者註 この話は今では籐堂家でも誰も知る人が無いが、松平右衛門大夫が話していたと永井日向守殿が語った事が浅野因幡殿覚書の中にあるので書留めた。

さて高虎が名護屋へ到着したところ浅野、石田両人も彼地に逗留しており、両人は高虎へ、我々は朝鮮へ渡海する積もりでいたが、その時彼国に在陣する人々からの連絡では、島津兵庫頭義弘が薩摩の大軍を率いて渡海して、明軍と手合わせの一戦で勝利して猛威を揮った。そのため明軍は其威勢に恐れて全て撤退した。そこでこれ幸の頃合と皆相談して近日帰帆すると言う。我々両人はそれを聞いて安心したのでこれから上京する相談をしていたとの事である。高虎も、では私も渡海する必要はありませんと云い三人共に伏見へ帰り報告した。

家康公は大へん喜び、その後又(p188)徳永法印寿昌と宮城長次郎豊盛を呼び、両人が朝鮮へ行き、在陣の諸軍勢を早々帰朝させる様にと指示した。両人が渡海して諸大名方へ指示を伝えたので、指示に随い十一月になって残らず博多の港へ帰帆し、伏見へ参内して秀吉郷世界の悔みを述べ、早々朝鮮にて明軍との戦いの様子など報告した。その時家康公は、島津義弘一人の働により日本の諸軍勢が全て無事帰朝できた事を感じ入り、前田利家郷と相談の上、恩賞の地を与えてはどうかと五奉行列座の中で諮った。

それに対し石田治部少は、秀頼様の代に至って初めての賞罰ゆえ、三人の大老方へも御相談されたいと言うので家康公は、別に私から相談するものでもなく、奉行方より話してはどうかという。

そこで奉行より趣旨を説明したが、浮田秀家は全く同意せぬ口縁で、毛利輝元、上杉景勝兩人からは返事がない。その旨五奉行の面々が報告したところ家康公は、秀頼卿は幼年であるから、十四五年も経なければ自身の判断で賞罰は無理だろう。賞罰は国家政道の根元であり秀頼が幼年だからと言って功ある者を褒賞しないのは、犯罪の者を罰せずに置く事になる。それで政道が立つと各々思われるかと言えば、前田徳善院は、仰る通りと私めは思いますと言う、(p.189) 増田長盛は、太閤様が御在世なら今度の加増は十万石以下ではないでしょうに、島津忠恒は不運でしたと云う。その時石田治部少輔はたいへん赤面している様に見えたと浅野長政雑談が徳永如雲齋覚書にある。その後島津忠恒へ四万石恩賞の地が与えられた。

同年十二月初め頃から秀頼卿を大坂の城へ移すと言ひ、大坂城中の修理や掃除等の指示があり、諸大名の居屋敷もその支度で多忙である。十二月になって五奉行の面々が家康公へ、故太閤様は常々のお考えもあり、当月中に秀頼様を大坂の御城へ入れたいと北の丸並び淀殿のお願いですと言う。家康公は前から聞いてはいたが、知らない立場で五奉行衆へ向って、夫は余りにも急な事ではないか、故太閤の薨去から日も経ず諸国への聞へも良くない。仮令大坂へ移られるにせよ来年八月迄は延期するのが自然ではないかと私が言っていたと言う様にとの事でこの件は中止となった。

註 秀吉遺言時の政権幹部の年齢

五大老 徳川家康	四五歳	前田利家	五十歳	浮田秀家	二五歳	毛利輝元	三五歳
上杉景勝	四二歳						
五奉行 浅野長政	四二歳	前田玄以	四九歳	石田三成	三八歳	増田長盛	四三歳
長束正家	三六歳						
三中老 中村一氏	不明	堀尾吉晴	四六歳	生駒親正	七二歳		

七——家康対四大老、五奉行の確執 (p193)

慶長四年 (1599) 正月元旦は秀頼卿が家督相続して初めての儀式であり、在京 (京都) の諸大名や小身の面々も共にそれぞれ伏見城に登り秀頼卿へ新年の挨拶を述べた。その時前田利家卿は上段へ上り、秀頼卿を自分の前に座らせ、時々は膝の上へも抱上げ、その威勢は格別に見えた。家康公が着座に続き毛利、浮田、上杉の三大老も順に着座し、その末座の方には前田玄以法印、浅野弾正、増田右衛門尉の三人が列座し、石田三成、長束大蔵の両人は儀式全体を取仕切っていた。

その時同じ五大老の人々の中でも内府公 (家康) は秀頼卿の名代で且つ後見である事から誰が指示した訳でもないが、本丸 (p194) で新年出仕の儀式が終わると直ぐに家康公の屋形へ皆が参上して年始の祝賀を述べた。利家卿を始外の大老、奉行衆へ正月二日か三日に自由に挨拶するのが常であり、家康公の威勢を外の大老の面々は妬ましく思っていた。

同月六日、五奉行の面々より家康公へ申し入れがあり、秀頼卿の大坂城への引越しは貴殿からの御指示で旧年中は取りやめました。この伏見城は秀頼卿の成長のために良いとも云えず、前の大地震の時には大勢の女中が押しつぶされました。又太閤が薨去した場所でもあり、不吉が重なっています。この事を北の政所 (秀吉正妻) や淀殿 (秀頼生母) が気にして居られ、一時も早く大坂の城中へ引越したい意向を伝えた。家康公は、昨年にも各位に云った通り、故太閤の一周忌後にしたいのだが、女性方より熱心に言われるのであれば、駄目とも

云えないと云う答えであり、来る十日引越しと日取りも決まった。秀頼卿移動に伴い前田利家を始め諸大名は皆従い大坂に引越した。

家康公も見送りとして大坂へ下り、片桐市正の屋敷へ泊まり十二日に舟で伏見へ帰館した。その時迄は北の政所、松の丸殿なども伏見の城中に住居があつたが、北の政所は京都へ出て上立売に居住した。又松の丸殿ハ当分大津の城中へ移り、その後は彼女も上立売辺に居住した。

註1 松の丸 京極龍子 (? - 1634)、秀吉側室で淀に次ぐ地位、大津は実家

註2 片桐市正 (且元 1556 - 1615) 元は浅井長政家臣、豊臣家臣

同月十九日 家康公は有馬法印方を訪問、饗応として能興行が催された。其日の晩方になり井伊直政も参加して暫く閑談した。直政が帰宅した後家康公も、何時もなら夜中迄も (p195) も付合うのだが、用がありお暇すると云い立上り帰館した。そこへ籐堂高虎の訪問があり暫く閑談して帰っていった。その夜中より伏見中が何となく物さわかしくなった。

註 有馬則頼 (1533 - 1602) 播磨出身、20代で剃髪、秀吉の武将、江戸初期撰津三田藩主

同廿一日四大老、五奉行中からの使として安国寺瓊長老、生駒雅楽頭、中村式部、堀尾帯刀の四人が家康公の館へ参上して、内府公は先君の御遺言の趣旨に違反された。私に婚儀を結んではならないの第一条にあるにも拘らず、伊達、蜂須賀、福島などに内々で縁組を許す事はとんでもない事である。この様な事がこのまま見過ごされると思われるべきでない。云う。家康公は、私は先公 (秀吉) の遺言の趣旨に違反したとは思わない。その様に云う各位こそ秀頼卿の後見に先公が遺言した私に対する違背と見え、最近にあり得ない事と私には思える。

縦令私の政務の執り方が悪く、秀頼卿の為には良くないと云う事であれば、先公の遺言もあり、余り目立たぬ方法で内談の方法をとる事も幾らでもできる筈なのに、何故各位をいとして表立って意見を述べるなどは秀頼卿の事を大切を思う大老や奉行達のやる事とは思えない。

どうしても受け入れないと云うのであれば、私は隠居して関東へ帰り、代わりに武蔵守（秀忠）を当地で勤めさせる考えである。その時私の隠居願は誰に出すのか、幸い各位は今度の使いをする位であるから御存知と思うので、どのようにでも指示して欲しい。それから家康公は安国寺へ向かい、貴殿はいつから三人と（2186）同職（中老）になられたか、この私は全く知らない事である。一般に老中とか奉行達から私へ用事があるのは政治向きの事である。その職にもなく出家の者が三人の中老同様に行動する事はとんでも無い事である。今日の所は目こぼしをするが、二度とこの様な事で私の前に出たら、それなりに処罰するので覚悟する様にと厳しく言渡した。

著者注 これらの事はその時代の事を書いた書物にも概略は載っているが、家康公が安国寺を叱ったという事は見当たらない。この咄は堀尾吉晴が当日家康公の館へ参上した時、様子を心配した吉晴の家来達が屋敷に詰めて待っていた。帯刀は戻ると外の話はせず安国寺長老が我々と共に内府へ面会したが、用が終わった後内府が機嫌を損ない安国寺を厳しく叱り付けられた。長老はどうした事か真っ青になってわなわな震えるという体たらくで本当に長老かと少しあわれにもなった。又おかしく思ったが、我々が同時に座を立てて門外へ出ると、安国寺が我々三人の側へ寄り、皆さん御覧の通り内府はあれですと囁いた。それを中村式部が聞いて、我々是我々の立場があるので嫌でもやらねばならぬ事もある。貴殿は僧体なのだから縦令誰に頼まれようとも断れば良いのに、無用の事に出しやばるからこんな事になる。私などは初めから余計な

事と思っていたと云われ赤面して帰った。彼は大変な知識人と聞いていたが道義は少しも無く見えたと言った。

この話は速水咄斎が若い頃、出雲の松江で堀尾吉晴時代の老人達の雑談で聞いた由である。註 安国寺長老（恵瓊？ - 1600） 毛利家の外交僧、此の時は輝元の指示か、関が原役で斬罪

その頃榊原式部太輔は井伊直政と交代で伏見在番のため江戸を出発し、交代の侍達も連れて伏見に向かっていた。近江国瀬田辺りで上方の騒動の事を聞き、それからは早馬に乗かへて昼夜の別なく走り通して直に参上し乱髪の俣で御前に出たところ、家康公はその様子を見てたいへん喜び手ずから熨斗目（小袖）を康政に与えて、前述の大老、奉行からの申入れの概略を話し、早々帰宅して休息する様にと云った。その時本多佐渡守正信にも内意があり、伊那熊蔵忠正、大久保十兵衛、長谷川七左衛門等と同道して伏見へ登る事になっていたが、伏見の変を聞て各々が一騎かけに馳上った。夫までの在番の面々も其俣居残る事になり、上下の屋敷内だけでは居場所がなく近辺の町屋や近在の民家を借りて宿泊した。そのため巷では何と大勢の人数だと噂になった。

家康公に三老中が申入れた時、伊達正宗、福島政則、蜂須賀主鎮の三人の方へも縁組の咎めがあった。正宗は、内府公の息男上総介忠輝へ私の娘を欲しいと云うのは、堺の町人今井宗薫と云う者が私の家老達に相談が有った事で私ははっきりは知らないと言った。蜂須賀は小笠原兵部太輔秀政の娘と縁組決めたとそのまま答えた。

福島政則は、牧野右馬丞康成の娘と縁組するのは、私は秀頼卿の縁故の者と関係もあるので内府公が親になるのは秀頼卿の為にもなるかと思うので縁組を進めたと答えた。（2188）著者註 秀頼卿の縁故の者との関係とは、福島政則の父は尾張国二寺と云う所の住人であり

新左衛門と云つたが、是は秀吉卿の父、木下弥右衛門と腹違いの兄弟との説がある

この様な状況で大坂と伏見の間で様々の情報が乱れ飛び、四大老、五奉行それに西国大名等も加わり、近い内に内府の館を攻撃するという噂迄あり世間は騒然となった。そこで日頃家康公に親しく出入りしている織田有楽、京極高次、福島政則、池田輝政、黒田如水、同甲斐守、藤堂高虎、羽柴右近太夫、有馬訪印、金森法印、新庄駿河守、浅野左京太夫、細川越中、大谷刑部、その外の小身の面々は内府公の館へ集り、昼夜の別なく詰めていた。

著者注 この時新庄駿河守屋敷は家康公の館の隣だったので、前述見舞に来た人々の供の者達を夫々の主人から頼まれ、屋敷内に収容したので長屋から座敷、書院、勝手迄も活用して屋敷内は隙間がない程であつたと駿河守代の家来が越前守に語り、越前守が中西与助へ度々雑談していた由を与助が作者(友山)に語つたが、この時の騒動に間違いはない。

註1 新庄駿河守(直頼 1528 - 1613) 常陸麻生藩初代、越前守(直定 1562 - 1618)

註2 羽柴右近大夫(森忠政 1570 - 1634) 江戸時代信濃川中島藩主

註3 織田有楽斎(長益 1547 - 1622) 信長弟、茶人

その頃堀尾、中村、生駒三人の中老は集つて、我々も故太閤の遺言を預かつた身として今度の騒動に無関係とするのは本意ではないし、外から批判される事にも成りかねず、調整できずとも一応やる事はやろうと相談した。中でも堀尾帯刀は特に尽力して、井伊直政を招いて、三人が相談して(p199) 解決の為に努力する心積もりだが、内府卿のお考えが分からないので御内意を伺いたいと云えば直政は、皆さんがその様な相談をされていると内府が聞けばさぞ喜ぶでしょう、私共としても有りがたい事です、お考えの様に内々で解決する様にお取計らい下されたくと云うので吉晴は、貴殿がその様に思われるなら猶更内府卿にお伝え下さいと云うと

直政は、その件を内府へ伝える必要はありません、先日皆さんがお出での時以来、内府が思うのは太閤様が薨去して間も無い上に御幼君の時代であり気の毒とは思いますが、向うは四大老と五奉行が同盟して、こちらは内府一人ですから、公義の為に大切とは思つても降参した様な口上を内府が云う訳はありません。この上は止むを得ないと覚悟を決めております。皆さんのご尽力で無事解決すれば内府は喜ぶ事は間違いなく、それはこの直政が請負いますと答えた。

それではと三人の中老は相談して大坂へ下り、四大老と五奉行列座の中で三人は以下述べた。先日大名衆の縁組の件につき、皆さんが相談の上で私共が内府卿へお使いとして上がつて以来、ここ大坂は勿論、京伏見共に大変な騒動となっており又諸国の噂になっていきます。これに付いて私共は故太閤の遺言を承っている立場であり、双方の間に入り解決に尽力したいとの気持ちから失礼を省みず一通りを述べます。

太閤様薨去後間も無く、その上秀頼様は御幼君ですから、天下が静謐に治つて物静である様な政治こそが肝要と云われるべき時に(200)、縁組程度の軽い事を咎められ、御幼君の後見と先公が定められた内府卿と今後皆さんが話し合いもされなくなれば、どんな不都合が起るか三人共に気づきました。しかし既に皆さんが一決した事であり、我々がとやかく言う事もできず、取り合えずお使いとして行き、内府卿からの御返答も報告致しました。

前にも述べました様に、時節柄の事ですから、これ以上は何事もなく和睦なされ、世の中が物静にあつて欲しいと私共は考えます。この事に皆さんがご同意頂けるなら、私共は太閤様の遺言の通り仲介に力を尽したく存じます。

この時前田利家は病気の為出席しなかつたが、その外の三大老と五奉行は三人の中老の意見に

同意するので、その通りに解決する様にとこの評議は終わった。

尚五奉行列座の中で石田光成が申出たのは、三人の方が円満に解決したいと云われるのは結構であり我々もその意見に任せたい。しかし問題が是ほど迄大きく成り、更に先日内府の答えにも自分の誤りという口上は全くなく、これを其の俣にするのは我々の本意ではないと云う。すると

同役の増田右衛門尉は、その所だが、先日大谷刑部少輔が私の所へ来て云った意見は、一般に婚姻を行う時は身分が高くて低くても先ず事前に十分話し合いを行って後に公儀へ届けるものです。又内々で打合せを行うにしても今度の三家の縁組は内府卿の承諾が無ければ進まぬ事ですから指示は必要なものです。その上内府卿は秀頼卿の御名代で有る以上、外の大老

や奉行に相談しなければなりません。縦令内府卿に誤りがあったとしても三中老（p201）を使いとして表向に責める様な事とは思われず、私（長盛）が止めなかった事は油断だと大谷は云っている。貴殿と大谷は親しい様だが彼の意見も聞いてはどうかと増田長盛は答えた。

著者註

この時の事を記した書物等では石田一人が同意せず、是非伏見へ上り家康公の館を

攻めようと云ったが、増田右衛門が強く反対して押さえたなどあるのは恐らく前述の事を
書記したものと思う。私の考えでは若しや浅野長政が云ったのではないかと、徳永如雲覚書
から読取れる

さて堀尾、中村、生駒は大老、奉行の和睦の趣旨を纏めて、三人同道して伏見へ上り井伊直政及び榊原康政の兩人へ伝え内府卿に報告したところ、前に直政が請負った様に三人衆の尽力を感じて家康公は四大老及び五奉行宛てに三ヶ条の誓文を渡した。そこで早速三人は大坂へ帰り、四大老五奉行から連判の誓文を受取り、堀尾吉晴が伏見へ持参した。双方の誓文は三中老の手に預り問題は解決し、以後世上も物静かになった。

内府卿の誓文の書出しは、今度の縁組の事については御断の通り承りました、以後は遺恨はないとあり、九人衆からの誓文は、今度縁組に伴い御断申入たところ、早速御同意戴き、以後遺恨はありませんと認め、四大老の名は二字上って五奉行と共に九人連判との事である。これ以後五奉行の面々は以前の様に一人宛交代で伏見へ詰める事になった。

この時本多佐渡守正信が家康公との閑談の序に、浅野長政（p202）とは今でも替わらず親しくして居られますかと尋ねた。家康公は、私の気持は何も替わっていないが、長政の気持は何か前と違って見えるぞと云われるので佐渡守は、他の人は兎も角、長政に限りその様な事はないと思います。なにか理由があると思いますので私が尋ねて見ますと云い、その晩正信は長政方を訪問した。長政は、貴殿よく聞いてくれ。私の気持は神に誓って前と少しも替わっていないが、この頃内府公は何となく私を避けている様子なので私も遠慮していると返答した。

佐渡守は、その様な状況を引延ばすのは良くない。貴殿は月番でこちらに来ており、一方私が上京した事も幸いである、早速今晚私と一緒に同行こうと連立って家康公に面会した。

家康公は対顔して雑談の中で長政に、以前貴殿の家人五十貝の諫書の事で秀吉卿の機嫌を損ない危難が迫ったとき、私が夜中に貴殿を訪ねて対策を立て無事に済んだ事を忘れられたかと尋ねると長政は、縦令幾年過ぎててもその時のご恩は忘れるものではありませんと答えた。

その時家康公は、貴殿は口ではそう云っても心の中はそうでもなさそうである。その理由は去年秋に先公が薨去した時、日頃は夫ほど親しくない石田から八十島道与と云う家来を遣して密かに薨去の事を知らせて来た。一方貴殿からのその知らせもなく、太閤の指示と云い手紙を添えて生鯉などを持たせて（p203）来た事は全く納得できないと云われた。長政は大いに困惑して御腹立は当然です。それについては色々理由があるのですが、今それを申し上げると申訳

の様にもなりますので申し上げますが全くの不幸際でした。太閤が他界されて間もないのにこんな世の中になってしまいましたと云い頻りに落涙した。

家康公は長政の落涙を見て話題を替大谷刑部少輔について、貴殿は奉行職を長く一緒に勤めていたが、彼の人となりは如何かと尋ねると長政は、大谷は元大友宗麟の家来でしたが、大友家が亡びて浪人となり姫路へきた時、石田光成の世話で秀吉卿の奉行に採用され知行は百五十石で大谷平馬と名乗っていました。非常に能力があり秀吉卿の意に叶い、次第に出世して敦賀の城主を任され、秀吉卿から吉の字を戴き吉継と名乗り私共と一緒に勤めました。しかし近年悪い病気に罹り役職も辞退しましたが、その人柄は正直な性質で智恵才覚も備わり、私共同役の中でも随一でしたが病気のため退職した事はいへん残念な事です。石田とは一身同体と云う程ではありませんが、親しくせざるを得ない事情もあるようだと周囲は言っていました。近く手が空いた時訪問し目をかける様に云われましたので詳しく申し上げましたと答えた。著者註 この話は世間に流布する書物には見当たらないが、徳永如雲齋覚書に有るので書留めた。

37

七二 前田利家との関係修復

縁談騒動が円満解決し、四大老の中病気の前田利家を除いて(204)三大老と五奉行は伏見の家康公館を訪問し対談した。これで完全に物静かになったと思えたが、又色々風聞が流れた。この対談に前田利家は夫ほどの病気でもないのに大病の様に言いふらして伏見へ行かなかったとの事である。そのため内府卿(家康)も疑心を持ち大坂を訪問しなかった。残った大老達は、利家は利家、我々は我々なのに内府らしくないやり方だと非常に不満を持ち、折角三中老の斡旋で双方が取交した誓文も反古と成りかねず、又大騒動になるのではと風説

専らだった。

その時細川越中守忠興は前田利勝を訪問し閑談の上で、先般の騒動の時は三中老の面々が早く気付き仲介に尽力し騒動も静まったのに又色々風説があります。但し今度は当家(前田家)と内府卿の間で問題が起こっている様に聞きます。理由は先般和談の時三大老は早速伏見へ行ったが、利家卿は病気で行かなかった為内府卿も返礼として大坂へ下る様子が無く、三老の面々や奉行衆が不快になっているとの事です。この事を私なりに考えてみると今度内府卿と九人の人々が和睦して双方が契約を交わし、御幼君の為に宜き様にと云う事は天下の大事でもあります。それなら大納言殿(利家)が病気で出られないなら、名代として貴殿が伏見へ行き、内府卿と対談を持てば今度の風説は無くなりましょう。つまりこれは御家の不幸際から起こっている私でさえ思うので他人は更にそう思うでしょう。大納言殿は御高齡(205)の上、最近はお病身でもあります。御役目等も辞退され貴殿に家督を譲り、後々迄も内府公と親しくされれば御家の為にもなるのではと私などは縁者としてこれを願っています。十分お考えの上大納言殿へお伝え下さいと忠興は言葉を尽して説得した。

註1 細川忠興の長男忠隆(1580 - 1646)の正室千世は前田利家の娘

註2 前田利勝(利長 1562 - 1614)前田利家長男、初代加賀藩主

38

利勝は大いに忠興に同意してこの趣旨を父利家へ話したところ利家卿も、忠興の誠実な意見はありがたい事だ、幸い今病気も少しは小康を保っているのです、この際伏見へ出かけるので宜しく調整されよとの事だった。忠興は喜んでその趣旨を伏見へ報告し、加藤清正、浅野幸長とも相談して日取りを決め、二月廿九日利家卿は川船で上った。清正、幸長、忠興も同じく船をならへて登る。伏見近くなると家康公は川御座の小船に乗って下り利家へ対顔の上、病中に遠方より

来られ満足の旨延べ、先ずは貴殿の屋敷へ落着かれた後お出で下さいと云ったが、直ぐに伺うとの事なので、家康公はそれではお待ちしますとの事で帰館した。

利家卿は船から揚り家康公屋敷へ向かう乗物の両脇に三人衆が付添って雑談した。門前には結城秀康公が出迎え、利家卿は御病中ですから門内まで乗物で行かれる様と挨拶があったが、利家は歩いて行くと家康公も出迎え座敷へ通し自身が相伴で饗応が行われた。三人の衆は別席で井伊、榊原が相伴した。酒席で家康公は利家の家老神谷信濃守を呼び盃と刀を与えた(p206)。御膳が済んで後利家は、今度各々が打合せて申入れた事は少しも私恨はなく、偏に秀頼公の為と思いやった事であり気にされない様に、但しこの館は端に近く貴殿の居城される場所ではない。向島の屋敷が上(秀吉)の用が無くなり明いているので、早速引移られるのが良いでしょう。私から云った事を他の衆中に伝えておきますので相談はいりませんと云うと、利家は自分の屋敷にも立寄らず直に乗船して大坂へ帰った。

三月九日伏見で島津忠垣の家臣、伊集院右衛門大夫入道幸侃と云う者に不届があつたとの事で忠垣が彼を殺害したので幸侃の家人等が騒いでいた。家康公は伊那熊蔵を派遣して忠垣方に伝えた事は、伊集院の家来達が貴殿に対して若しも反抗するようであれば、その誅罰を行う時に人数が不足するなら徳川家から加勢をするので、早々通知するようにと口上を伝えた。伊集院は島津家来とは云え故太閤も知己の者であり、公儀を憚らず殺害した事は軽率だったと忠恒は自分でも高尾寺に入て閑居していた。家康公の指示もあり伏見に帰宅して間もなく伊集院の家来達は話合つて大坂へ下り日向国へ帰った。そこで大坂在勤の四大老、奉行へも通知し、忠垣は御暇を給り薩摩へ帰参する様にと指示した。

その後家康公は細川忠興を呼んで、老体の利家が病中にも拘わらず遠来頂いた事でもあり、返礼として私も大坂へ下るので、貴殿より連絡して欲しいとあり、忠興が早速伝えると利家はたいへん喜び、(p207)接待の準備を進めた。

三月十一日 家康公が船で大坂へ下る時、屋形船の次の間に細川幽斎が居るのを見つけ、貴殿は何故ここにと尋ねれば幽斎は、今日大坂へ下向なさるので息子越中守(忠興)がお供する予定でしたが、先に行かざるを得ない用事があり昨夜出発しました。その時船中でお相手のため私がお供する様にと言残しましたので先程からお待ちしておりましたと。家康公は、船中退屈と思っていたが良く出て来られたと喜んだ。

大坂に午後二時前に着岸すると揚り場などの掃除も利家方より手配されていた。そこに古乗物が一挺据えられ側には人もなく、供と思われる侍が七八人通りの道脇に下座しており、御供の人々は皆不審に思ったが、家康公が船から揚ると古い乗物の中から藤堂佐渡守が這出して、今日は日和も良く着岸なされ喜ばしい事です、是より加賀屋敷迄の道筋の御用心のため家来達に御案内を指示しておきました。今晚は私宅でごゆっくりお休み下さいと云えば家康公も満足の様子だった。

利家の屋敷へ着くと利勝と利政兄弟が共に門外で出迎えた。利家は痔病が発病したので、事前に断り、式台の上に虎の皮を敷いて座り浅野長政と共に待っていた。家康公の到着が見えると式台の下へ下りて、遠来の所お出で頂き忝いとお礼を述べ、屋内では浅野長政が先導して書院の脇にある小座敷で暫く対談した。それが済み料理の時は、病気のためと断りを云って利勝と長政が相伴した。饗応の次第も利家が伏見を訪問した時は目通りする小姓衆(p208)だけが長上下だったが、今回は給仕の小姓は勿論、目通りする面々は全て長上下を着用しており、

格式ある接待だった。

それから饗応も終わる頃、石田三成が訪問して来たので御供の人々は勿論、玄関に詰めていた利家の家来も驚いた様子だったが三成は式台で、今日は珍客を迎えられ御取込と察します。ここで失礼しますと口上を述べて帰った。

著者註 この事に付いて今世間で流布する記録では、三成は黒衣を着て座中へ出たなどしているがその様な事はない。理由はその頃浅野長政に供した若侍の中に関蔵人、徳永太郎作と云う二人がいるが、この日二人を連れていたので石田が訪問した時の様子を見ており、その時の太郎作が老後如雲齋と称したが、その覚書に記されている。

その日の夕方家康公は利家の屋敷を後にして藤堂高虎方へ入ったが、日頃親しくして出入りする人々が先に到着して待っていた。これらは織田有楽、池田輝政、福島政則、細川忠興、浅野幸長、黒田長政、加藤清正、その外堀尾信濃守、有馬法印、金森法印、山岡道阿弥、岡江雪、新庄法印等である。但し新庄は伏見の屋敷から幽齋と同じ船で乗り下り、直接高虎宅に詰めていた。

夜に入り利家からの使者として徳山五兵衛に浅野長政が付添ってきた。徳山の口上は、今日はお出で頂き忝い次第です。参上してお礼を申し上げますが、(P209) 御覧の通りの病気で思うに任せ先ずは使者を通じて申し上げますとの事である。その後徳山は、今日も直にお話した通り、いよいよ利勝の事を宜しくお頼みします。それ付いて願わくは利勝を疎略にしない旨の御一筆を下されると有りがたいのですがと云う。

家康公は、先ほど榊原式部太輔を遣わし述べた様に、ご丁寧な接待に預り有り難く存じます。

そこで私が利勝を疎略にしない旨の一筆を進上する事は、縦令貴殿から言われずとも

その積もりで居りました。しかし明朝は早朝に伏見へ出立するので彼地から一筆認め進上するのでよくよくお伝えに願いたいと答えた。そこで浅野長政が、利家は御覧の通の病中ですから、一時も早く頂きたいと云うのも事実でしょうというと、徳山はそれを捉えて再度願うので家康公の顔色が替わった。有馬法印は中座して徳山に向って、貴殿は余計な事を言う、今まで内府卿が一度申された事を違える事は前より決して無かった。伏見から遣わすと云われる以上はそのお考え通りにして置くのが良いと苦々しく云ったので、徳山もそれ以上言わずに長政と共に帰った。

その後伏見より誓文を遣わし、利勝が私に対して別心が無い以上は云々と云う文言だった。

翌三月十二日早朝、高虎の屋敷を出立して伏見へ帰館する時、先には榊原康政、後には井伊直政の供の人数があるので全体の数が非常に多く、行列を見物した人々は何時の間にあんな大勢が大坂に入っていたのかと驚いた。

著者註 家康公が藤堂宅に一宿の時、石田三成は利家宅へ行き口上を述べたが、其後直ぐ

小西撰津守行長方へ向かった。(P210) 事前の廻状により、毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝三人の大老及び、五奉行の中浅野長政は当日利家方へ内府卿を迎える御相伴を

頼まれて不在だが、その外の四奉行が集った。そこで石田三成は、前田利家は長煩いで公儀の勤めもせずに最近伏見へ登り内府卿の饗応に預かったが、その時向島の屋敷へ住居を移される様と指示し、内府もその返礼ととして今日利家方を訪問した。これは内府と利家は完全に癒着している様に見えます。その上我々同役の中にも内府と親しいものもあるようですから、この座の三大老及び我々奉行役はいずれ立場を失うのは明らかです。

今宵藤堂宅へ内府が宿泊している事を幸い皆さんと相談したいと、三成が言終わらぬ内に小西が進み出て、大体において皆さんの先般の評議の趣旨を聞いて居りますが、全体に手遅れを感じます。三成が云う通り、内府が高虎宅に宿泊しているのは天が与えた機会ですから、一気に押寄せて内府は勿論、亭主の高虎も全て討ち果たすのが良いでしょう。その場合私が先手を受持ちますと云う。しかし輝元始め三大老は無言であり、増田長盛と前田玄意法印は三大老の方へ向かって、今兩人の意見に我々は全く同意していません。その訳は今宵藤堂の屋敷へ押寄せて一戦に及び、縦令勝利を得たとしても、もし内府を打漏した場合、公儀の指示でもないのに御幼君の御膝元で私に争い、(p211) 上を恐れぬ狼藉者となるのは明らかです。皆さんはどう思われますかと云えば三老の面々も無言で、長束大蔵等も増田、前田と同意見の様なので、石田と小西の企ては中止となった由以上を書記した書物等もあるが人々の伝聞には全く無い。その上この時代に三大老、五奉行に廻状を回覧し、外様大名の小西の家に呼び集めるといふのも考えられない。従ってこれは虚説と思われる。

その後向島の屋敷の修復等が完了したので三月六日に引越の時、伏見在勤の奉行も豊後橋へ出向き挨拶し、その外伏見の屋敷に居合せた大名方もお祝いとして向島の屋敷へ参上した。日頃親しく出入りする人々が訪問し連立って帰るが、何故か有馬法印只一人が内証へ通り御相伴をした。夜更け迄お相手をして帰る時、どの様な配慮か近習衆の中でも指名して法印を宿迄送り届けさせ、その時も提燈を点さぬ様にと直接指示があった。

慶長四年(1599) 閏三月二日加賀大納言前田利家が卒去、行年六十二歳だった。著者註 ある説では前田利家は尾張国荒子の住人前田讚岐と云う地侍の六男に生まれ、

織田信長卿の児小姓となり食禄三十石を給り勤めていた。しかし信長卿の同朋十阿弥を手打にした為勘気を蒙ったが、二度に渡り信長卿の先手に加わり手柄を立てたので前の罪を許されて初めは知行百五十石を給わった。以後段々と出世し、越前府中の城主となり、秀吉卿と柴田勝家の戦いの(p212) 頃から秀吉卿に随った。

七―三 石田三成と七人の外様大名との喧嘩

その頃大坂在住諸大名中で加藤清正、同嘉明、浅野幸長、福島政則、池田輝政、細川忠興、黒田長政の面々が申合せて石田三成方へ使を立て申入れた、我々は故太閤の命令で朝鮮国へ渡って戦い、所々で軍功を上げ本朝の武威を振るったが先公御在世時と云った褒賞も無かった。中でも一昨年の冬明軍は七十万の大軍で浅野幸長が守る蔚山の城を取囲んだ。その頃加藤清正は機弘と云う所に在陣していたが、蔚山の危難を聞き、兵船二十艘程に乗組み蔚山へ漕渡り、明勢数百艘の軍船の中へ乗入れ、全て追散らして即時に蔚山の城に入り、浅野と一手になり明勢を追崩した。その時黒田長政も梁山に在陣していたが蔚山の後詰として急行して大敵を追払った。

この三人の働きは人々が知っている事だたいへんな誉れであるが、福原右馬助、垣見和泉、熊谷内蔵、大田飛驒、早川主馬の五人の目付達は口裏を合わせて疎略な報告をしたので、我々は御褒美にも預からず心外千万である。この儘で済まず訳には行かぬ故、厳しく審判してこの五人全員に切腹を申付けられたいと。

その時三成の返答は、申入れの趣旨は全く同意できません。何故なら各位に限らず朝鮮において戦功の有った人々へは先公御在世の時に夫々御感状を下され、その働き次第を書加えて

夫々褒賞されて済んだ事です。主計殿（清正）、甲斐守殿（黒田長政）、左京殿（浅野幸長）等は特別に厚く御褒美もある筈ですが、それが無かったのは先公のお考えであり、私などが知る場所ではない。朝鮮征伐に限らず、御用がある時は五奉行の仲間が集り相談の上決定（p213）するので、私一人へ申入れられる事も理解できませんと返答して使者を帰した。

これに対して再び七人衆は使者を立て、戦いをして来た我々が一致して申述べた事を聴き捨てにするとは無礼である。全体朝鮮征伐については五奉行が各々立会い評議するのに、貴殿一人の失策の様に我々が考えるのは理解できぬとあるは一応もつとも聞こえるが、先公が病気になられた後は、朝鮮関連に限らず全てに渡り貴殿一人が仕切る様になり、外の奉行方は殆ど知らされていなかった事が我々の帰朝後詳しく知った事である。其上前述五人の中で福原は貴殿の近い縁者であり、残る四人も常々貴殿と親しいとの事であるから貴殿一人に報告したと思われる、この五人の輩を踏殺すのは実に簡単であるが、先公薨去の後間もない事と御幼君を軽く見るような事にもなるので、審判の上処罰される様に申入れる。これらの趣旨を十分に思案され必ず返答されたいとの事である

45

この喧嘩の情報が佐和山（三成本拠）へも聞こえたので、大山伯耆、高野越中等の頭分の者を初め侍足輕共に至る迄続々馳上つてくると云う情報もあり、その様に人数を呼集めると一触即発になるので何れも伏見の屋敷に留まる様に指示した。三成方では大坂在勤の人数計で何事も無い様子で対応していたが、七人衆の夫々の屋敷では皆人数を呼集め、乗馬等にも鞍を置、今にも三成の返答次第で馳出す支度をして不穏の様子であり大坂中が大騒動となった。

折しも秀頼卿の近習の侍に葉島（p214）治右衛門と云う者がいたが、彼は元来三成の部下の縁者

で日頃親しく三成方に出入りしていたが急に駆け込み、七人の面々が今日の夜中頃当屋敷へ押寄せて必ず三成を打果す相談が一決したと確かに聞きました。それなのにこの様に油断はなりませんぞと云うので三成も当惑して、自筆に書状を認めて宇喜田秀家と上杉景勝方へ持せたが、承ったと返答はあったが緊急の事で当座の策もなく何も返事が来ない。三成は家来を呼集めて評議したが夫々色々な事を云い結論が出ない。そこへ佐竹修理大夫義宣が、伏見で今度の騒動を聞き、日頃三成と親しくしているので見舞いの為大坂へ下向してきた。義宣は召連れた人数は森口辺に留めて置、手廻りだけで三成の所へ見舞った。

三成は今度の喧嘩の一分始終及び葉島の情報を述べて義宣の意見を求めた。義宣は、葉島の云う事は必ずしも真実とは思われません。理由は七人の面々が今宵夜中に攻める事が本当なら深く秘匿する筈で、この様に噂が出るとは考え難い事です。だからと言って貴殿がこの屋敷にその僣住むのは、どちらにしても好ましくありません。病氣と云う事にして在宅の様に見せかけ、当分の間外に住居するのがよいと思えますと云う。三成は兎も角宜しくと云い義宣と同道して宇喜田中納言の中島の屋敷へ行くと、秀家、景勝両人も参加して義宣と三人で相談となった。

46

景勝が言うには、私が七人の立場で考えれば、最初から申出なければ其の僣だが、一旦世間の話が広がってしまった以上この僣では済まされない事です、これ以上は内府卿が納得され七人の面々を（p215）説得する以外なく、他が仲裁して済むものではないと思えます。この時義宣も、私も貴殿と同じ考えです、そこで今度私が帰宅する時三成も伏見へ行くのどうかと云えば、秀家、景勝両人もそれに賛同した。しかし三成を同道するとすると貴殿の部隊だけでは不安もあるので我々の方から見送り人数を加えようと思ったが義宣は、皆さんの云われるのも当然ですが、それは三成のために良くありません。私に案がありますのでこの義宣にお任せ下さいとの事で

秀家、景勝両家の見送りは取り止めとなった。

さて義宣の計略として三成は女乗物に乗り義宣の家来に混じって大坂を出、道中は何の問題もなくその日の夕方伏見の屋敷に着いた。

義宣は直に向島の屋敷へ参上して家康公と対面し大坂騒動の次第及び帰宅の際に三成を同行して来た事を詳しく報告した。家康公は、この喧嘩の事は私も聞いており、時節柄軽率な行動があつてはならぬと内々で和解する様に池田輝政に再三云ったが、決着が未だ付かないと云うので心配していた。都合よく貴殿が下向され三成を当地へ同行した事は喜ばしい。三成が当地に居る以上、そのほうが良いでしょうとの事だった。

石田三成が伏見へ到着した日の夜、本多佐渡守が向島の屋敷を訪問すると小姓衆が菓を煎じているので、殿様はと尋ねれば、少々お風邪の様で今寢室に入られました、この菓(p216)がで其次第召上るとの事で未だお目覚めですと云う。それでは佐渡守が来た事を申し上げてくれと云えば直ちに呼ばれた。家康公はふとんの上に座り、其方は夜中に何事で来たのかと云われ佐渡守は、別の事ではありませんが石田三成をどうするお積もりですかと問うと、されば、その事色々々思案していると云わたので佐渡守は、御思案中との事であれば私が申上げる事はありますと云って帰った。

著者註 この件はある時土居大炊頭殿が寺田与左衛門、大野仁兵衛などへ雑談したとの事で大野知石が私へ話した事を書留めた。今その時代の事を書記した書物の中には、その夜佐渡守が家康公に申上げた事は、若し天下を御望みであるならば、三成を助け置かれます様にと云ったと記し、又ある本では今度三成を彼らに思うように殺させますと、この七人の大名に奢り心が出て扱い難いものになると諫めたとする本と許容した

とする本もある。 何れが正しいか分からない。そこで大炊頭殿が云った事を書留めた。

その頃大坂の七人衆は佐竹義宣の世話で三成が大坂を忍び出て伏見へ立退いた事を聞き、事態を引延ばして討漏した事は残念として夫々が伏見へ馳上った。大坂から人数を呼寄せ各居屋敷へ取籠り、是非にも三成を討果そうと云う雰囲気で伏見中の騒ぎとなった。

この時池田輝政も一緒に伏見へ移動したが、(p217) 向島の屋敷へ使者を遣わし、私は用があり御当地へ来ましたが道中より気分が悪くなり、当分お見舞いは出来ませんと云う口上だった。家康公は詳しく聞いていたが、知らない立場で通り一遍の返答をした。その後伊那図書を呼び口上を含めて輝政方へ遣わした。輝政は図書へ、この事に関しては大坂でも二度に渡り、ご意見を頂いているが、同列中に対して遠慮もあるので、幾ら内府公の指示でも私の立場上応じられない。幸い明日夜七人衆が私の屋敷に集るので、その時に来られ皆が聞く前で口上を述べられるのが良い、と輝政は云うので図書はその日は帰った

翌日夜中になると図書は輝政方へ来て、口上の件を伝えると皆が列座する中へ出る様にとの輝政の指示で、図書はその中に出て輝政に向かい、内府があなた様へ言われるのは、前にも大坂で申入れた通り、今は御幼君の代でもあり、世の中が物静かな事が私や人々の願いです。中でも各位については先公の厚恩を蒙った方々ですから、特に天下が静謐である様に願うべきにも拘わらず、今度の騒動を起こすとは私の思いとは違う様に思われます。その上三成は各位に敵対する事を避けて大坂を退去して当地へ来た以上は、もうそれ迄にすべきと各各位共に追ってきて、是非とも三成を打果すとの事で当地の騒動と成りました。但し各位も一度口外へ出された以上、そのままにしては置けないのは分かります。

しかし私も故太閤の御遺言により秀頼卿の後見を勤める以上、公儀の為と思ひ二度に渡り考えを (p218) 各位に伝えましたが許容がなく、かと云って三成を各位の思う様にさせては私の立場がありません。この上においても許せないと云う事であれば各位の返答次第で結城秀康を迎えに遣して三成を私の手元へ引取る外はありません。その途中でも又私が引取った後でも、人数を向けて三成を打果すのは各位の勝手次第と、図書は言葉を尽して口上の趣旨を伝えた。

一座の人々は一言もなく当惑の様子だったが、輝政は図書に向って、必ず皆が相談の上で御返答するので、其方は先ずは勝手へと云うので図書が立上った後で皆が相談した。

その後で図書を呼び加藤清正と福島政則の兩人が中心に座り返答したのは、今度私共の喧嘩の件で大坂へも二度に渡り御内意を下さり、又今度お考えをお聞かせ頂き承知しました。

私共は三成に対しての恨みは決して浅くはありません、その上世間に流れた事をそのままにして置くのは心外です。しかし今公儀の御名代である内府卿の仰に違背する事も出来ず曲げて御指示にお任せするのが皆の意見であるので宜しく申上げられたいとの返答で静かになった。

著者註 その時代の事を記した書物の中にも大筋はあるが、詳しいものは無いので徳永如雲斎 覚書の通りを書留めた。

七―四 石田三成の佐和山蟄居

この時 中村式部と生駒雅楽の兩人同道して向島へ参上して、今度の喧嘩について大坂で宇喜田秀家 (p219)、上杉景勝が同役の堀尾帯刀へ云われた事は、今度の事は双方の為にも中老三人が相談して何か良い解決が出来るよう仲裁する様にとありましたが帯刀は、我々共三人は五大老と五奉行の皆さんの間で何か異変があれば仲介する様にと先公からの遺言です。

今度の事は七人の外様大名と石田三成との私怨に基づくものですから、私共が介入する筋では無いと答えたので私共兩人もその積もりで居る様にと帯刀が言っておりました。ところが石田が大坂を立去り御当地へ上ったので相手の面々も後を追いつけたと聞きました。それでは今度御当地の騒動となるので、若し私共の方へ御指示もあるかも知れぬから三人で参上しようかと相談しましたが、帯刀は病氣になり快復次第参上するとの事で私共兩人が先に何う事になりました。

本件は中々簡単には解決しそうも無いと思つて居りましたが以外に鎮静したのは、石田を内府卿が引受けるとの御口上の趣旨に沿い、七人衆は大いに感じ入り早速御指図次第との返答で事が鎮まったと聞きました。それはたいへん良い事だと私共兩人は話しておりました。

家康公は、今度の喧嘩は縦令石田にどんな誤りがあったとしても、先公の代から五奉行の重職に任じられた者であり、七人の面々が私怨により討果そうとするのをその俣見過ごしては公儀の立場が成り立たず、これは石田は勿論、七人衆の為でもあり、私の考えを伝えたものですが、皆が納得して事が鎮まり、私も喜んでいきます (p220)

ところでご兩人は今後もこの俣で済むと思われましかと尋ねれば兩人は、七人の面々もあなた様からの口上の趣旨に違背はし難いので止む無く我慢した様子ですが、本心は中々和らく様子はありませんので今後の事は予想できません。その上石田は大坂を退去する時、七人の面々へ敵対出来ないの、あなた様の御膝にすがる事を考えて大坂から忍んで御当地に逃登った事などから考えると今迄の様な重職を続ける事は無理ではないでしょうかと答えた。

家康公はそれを聞き、皆さんもその様に考えられるか。それではご兩人同道して三成方へ行き。今度の喧嘩騒ぎは鎮まったが、貴殿がこの際世間に出ると又どんな事になるか予想できず、

御幼君の時代と云い世上が物静でなければ公儀の為にも宜しくないでしょう。ここは理を非に曲げて今は佐和山へ行かれるのが良いでしょう。この以後直に隠居などの願いがあれば全て首尾よく相談します。御子息の隼人正に付いては内府に任せて置けば良いと、よくよく言い聞かせる様にと云えば兩人も委細承知した。併し出来れば御家来中の内一人私共へ添えて欲しいとの事で酒井河内守を副使とした。

三人同道して三成方へ行き、内府卿の意見や又七人衆へ伊那図書を遣わしての口上の次第等を詳しく兩人が伝えた。三成もたいへん喜び、この上は内府卿の御差図次第にしますが返答は一兩日過ぎてから皆さんに連絡しますとの事で(221)三人共に帰宅した。

著者註 この三成の返答引延ばしは中老兩人と酒井を添えての家康公からの口上の趣旨を宇喜田秀家、上杉景勝、小西行長の三人と相談する考えで即答しなかったと思われる。

それから一兩日過ぎて三成は中村、生駒兩人を招いて、この間内府卿より各位を通じての御意見に任せて近く佐和山へ行きます。この件内府卿へお伝え下さいとの事だった。

兩人は向島へ参上して報告したが、家康公は、七人衆はこの間私の方への返答では大坂に帰る事になっていくが、私の縁者の輝政を始め皆未だこの地に逗留しているとの事です。

多分問題は起きないと思うが、佐和山へ帰る時の見送りとして結城三河守秀康を派遣するとの事を兩人も承り、それは良いお考えです。その際私共兩人も、三河守殿の道中相手に同道しますと云えば、それは各位ご自由にとの事だった。

閏三月十三日の早朝に三成は伏見を出発し、秀康公及び両中老も伏見を出発したところ、醍醐山科の辺に來ると三成の家来高野越中、大山伯耆、笥兵庫などと云う者が騎馬の士を大勢連れてあちらこちらから出てきて三成の手廻りの者に混じった。三成は関寺の辺に來ると高野越中を

通して秀康公へ、御覽の通り私家来共も迎として佐和山より來て人数も多くなりましたので、ここから御帰宅下さいと断ったが、秀康公は承引せず瀬田迄來たところ佐和山に残っていた三成の家来(222)大場土佐、柏原彦右衛門など云う頭分の者が侍、足輕を連れて迎えに來た。

三成は瀬田の大榎木の下で秀康公が來るのを待ち、是迄御見送り頂き忝い次第です。御覽の通り私の家来共も段々人数も多くなりましたので是で御帰り下さいと云えば秀康公は、私は佐和山の切通し迄貴殿を見送る様にと内府から命じられていますので、そうは行きませんと答えた。そこへ両中老も來たので三成は、私の家来も多くなったので御見送りは不要と再三御願いしたが少将殿(秀康)は了承ありません。私の家來達も來ているのに猶も御見送りとあつては私の男が立ちません。それでも帰れないと云われては私はこの場所に幾日も逗留する事になりますと云う両中老も、三成の強い御断りの上は是で御帰りになるのが良いでしょう、我々も是で帰宅しますと云う。そこで秀康公は歸る時、土屋佐馬助と云う者を佐和山の城迄見送る様にと指示した。

三成もそれを見ていたので佐和山近くになると、侍二名に命じて必ず城内に誘う様にと指示した。左馬助は切通しの少し手前で帰ろうとするのを兩人の接待役の者が、城内へ御同道する様に主人三成から堅く命じられて居りますので、是より帰路に就かれては私共の落ちになりますと強く言うので左馬助は仕方なく城内へ入った。三成は式台迄出て左馬助を書院へ通し叮嚀に接待した。その上自身で刀を持出して左馬助へ向って、この刀は故太閤より拝領した私の秘蔵だが貴殿へ送ります。若しも三河守殿が御覽になり指料等にも(223)なれば私の大慶ですと手づから渡した。この刀は今でも石田村正として松平越前家の重宝との事である。

著者註 三河守へ三成が刀を贈った事は世上に流布する記録では瀬田での事の様に書記しているが、その説は間違いで私が書記したのが事実である。その訳は三河守は天正十八年

以後は結城の名乗りだが、それ以前は秀吉卿の養子であり、近江中納言秀次の舎弟である。故に三成等も深く世話した人であるので、軽々しく瀬田の海道で刀など進上する筈はない。

さて中村、生駒両人は瀬田より帰り、翌朝に向島の屋敷へ参上して三成が伏見を出発し、瀬田迄同道した報告をした。その上で、結城殿は召連れた足軽共が所持する鉄砲五挺の内一挺宛に火縄に火を付けさせて、家来衆も胴丸腹巻等を着る様に指示した様子でした。三成が瀬田で強く断り、私共の考えも申上げて御帰りの節、家来の土屋左馬助に佐和山迄の見送りに遣わされた事など、未だ年若なのに良く気の付く事と兩人話して居りましたと云ったところ、家康公は皆さんにその様に思われとは少将にとつても光栄だと云った。

七―五 内府卿、向島屋敷から伏見城本丸へ

その頃四奉行の面々が相談して三大老方へ伝えた事は、内府卿は今向島御屋敷に居住されて政務の執行をされているので、全ての公事、訴訟人は向島へ集まるので京伏見に滞在する諸役人も裁許の日には夜中より出張し日暮になり (p.224) 帰宅するので皆疲労しています。私共も伏見へ交代で御城番を勤めています。決済日には夜中より向島へ出勤し、決済が済んでも内府卿への報告、相談等があり、夜になり御城へ帰る状態が毎回です。これでは城内の取締りも宜しくありませんので、内府卿が伏見の御城に居住される様にしたいのですがと奉行衆全員で申述べた。

三老中もそれが良いと云う中で上杉景勝は、伏見の御城では同じ事だから此大坂城内西の丸へ内府卿に移って頂いてはどうだろうか云う。四奉行の中から浅野長政は、前に秀頼様が

御当地(大坂)へ御引移りの時、加賀大納言殿が私に云われた事は、内府卿は今迄大坂に屋敷も無いのでどこか屋敷地を申請して、御幼君の御膝元で後見するの良いと事で私がその事を申し上げましたが内府卿は、私の居屋敷を作る事はどの様にでもなるが、家老の居屋敷を始め藤の森の下屋敷に置く家中の者の居所も建築するのは簡単ではない。その上今京都に決まった所司代も無い状態では禁中守護のためにも私は当地に残って政務を行うので、五奉行の内から一人宛交代で御城代を兼ねて詰めれば良いのではと言われ利家卿もそれが良いと決しました。

今度も内府卿だけは西の丸に居住されても、家中の者の居所が無いので、心得ましたと云う返答は無いとおもいます。その時秀家は、内府卿が納得しない事を言っても仕方ないので、伏見の (p.225) 御城に居住されるのが良いと皆が思っていると伝えようと三中老を招いて、内府卿が向島の御屋敷に居られ、諸役人を始め公事訴訟人等に至る迄困窮していますので、伏見の御城本丸に御移りになられてはどうかと私共及び奉行衆が考えている旨伝える様にとあつた。

三中老伏見へ上り向島の屋敷へ参上して伝えたところ、家康公は、私が当所へ移ったのも各位が御存知の通り利家の指図によるものです。今又三大老、奉行衆が云われるなら兎も角そう致しましょうと云う事で、閏三月十三日伏見の城へ移られた。

著者註 この咄は徳永如雲齋覚書による。浅野長政はその時の奉行職でもあるので実説と思われる。

この時代の事を記した書に黒田長政が家康公に伏見の城へ移ってもらいたいとの思いから堀尾吉晴と示合せて三中老が相談して四奉行の面々に合意させて三大老へ伝えたと書記したものもあるが、それも一理ある。伏見の城へ入る事が関東へ聞こえ、秀忠公から黒田長政への書状が黒田家に伝わるとの事である。しかし奉行の面々が三大老へ伝えた事は如雲齋覚書の通りではないだろうか。又御城入りの事は堀尾吉晴の密通により。徳善院

玄意法印の当番日に伏見の城へ移ったと書いた本もある。この文書を考えて見ると何か、才覚か手段を使って移った様に聞こえるが、(p226) 三大老、四奉行が相談の上で伝えた事は間違いない。

早水独斎と云う老人の咄を以前聞いた事がある。この通り三大老より三中老へ伝えた時宇喜田秀家が堀尾帯刀へ向って、内府卿が伏見の御城へ移られても本丸と大手の門番は御当地(大坂)より物頭の面々が交代で勤める様にと云うので堀尾が伏見でその事を徳善院へ伝えれば、それは大老職の差図とは思えません、その訳は以前内府卿が向島の御屋敷へ移られる時、向島御屋敷付の諸役人は一人残らず退去し、諸門の管理は内府卿の家来が勤めました。そこで当御城の本丸、大手の番人だけこちらからと言う事はどうかと思います。私の考えもありますが、内府卿が御城へ移られる日には決まっていたのに、私の方への通達を引延ばして二三日も前に連絡があり、来る十三日に御移りになるとの事です。その当日には諸門の鍵を残らず徳善院方より井伊直政へ渡したので、本丸、大手の番等は徳川家の物頭衆に替わった。この事の次第を聞誤って堀尾吉晴と徳善院が密通と書記した物と思う。

落穂集第七巻終

落穂集第八巻

八一 一 内府家康の政務始動(p227)

家康公が伏見城に入ってから向島に滞在した時と比べ格別に威光も増した様である。其頃細川忠興へ豊後杵築五万石、堀尾吉晴へ越前の府中五万石、羽柴右近大夫忠政(森忠政)へ信州に二万五千石の恩賞を与えたが、外の大老、四奉行の面々から特に異議もなかった。又各種の申請、訴訟事、争い等で放置されていた件も次第に処理が進んだ。中でも宇治の茶師仲間の茶値段の協定などは数年にわたり未解決だったが、家康公の裁許により申請通りに認められた。九鬼大隅守と稲葉藏人の揉め事の裁判も決着が付き九鬼の負けとなった。九鬼は不満だったがその時は抗議しなかったが、この事を遺恨に持ち、翌年の(p228)の関ヶ原一戦の時は石田方へ付いた。

其頃加藤清正、黒田長政、浅野幸長を始め、七人共同で訴訟を起こした内容は、我々は朝鮮国において異国人と戦い軍忠を励みましたが、現地へ派遣された目付七人の内、福原、垣見、熊谷、大田、早川五人の連中が談合して粗略な報告書を上げました。先公(秀吉)から何の褒賞も無いので不審に思い帰朝以後色々調べたところ、先公が病氣以後は朝鮮征伐の事については外の奉行は聞らず石田三成一人により処理されていました。そこで我々の考えを三成へ、裁判により五人の目付達にそれなりの刑罰を加える様に再三に渡り申入れました。しかし承諾はなく、寧ろ無礼な回答をしてきました。そこでこの俣にして置けぬと我々が相談している事を三成が聞き、大坂を逃出し当地(伏見)へ来て内府卿の御世話で佐和山に蟄居した由です。もう三成では相手にならないので、やむを得ず直訴致しますとの事である。

上記により家康公が取上げる事になったが、たいへん慎重に四奉行の面々へも内談した。この争いの原因は、朝鮮国蔚山の城を明国が大軍で攻撃した時、その城主浅野幸長は勿論、加勢の加藤清正、黒田長政両人の著しい働きがあった。この事を報告するのに福原を始め五人の目付が談合して疎略な報告書を作ったので、同役毛利民部、竹中伊豆両人は同意せず、こんな文書に我々は捺印出来ないのので別途報告書を差出すと云った事から垣見、熊谷、大田、早川四人と両人と口論となり、刃傷沙汰になりかけた(p229)ので福原は色々宥め、報告書の文言を所々書改めた。それでも両人は納得しなかったが、原則として報告書は七人の合議で多数決で決める事が誓文の前書にも書かれているので連判すべきと福原が云うので、仕方なく両人も捺印したという風説を家康公も聞いていた。

そこで七人の目付衆に付添って渡海した旗本の侍達呼び、寄合所の下役人等に至る迄四奉行列座の中へ呼出して聞取りを行った。聞取りの際は控え所から一人づつ出たが何れもが世間で噂されている事と相違なかったのので、奉行は其旨を内府へ報告した。

其頃家康公は藤堂佐渡守高虎を呼んで、貴殿は毛利民部少輔と親しいと聞くがどの様な理由からかと尋ねると高虎は、私が若い頃秀吉卿が播州姫路の城に入り同国三木の城を攻めた時、民部が重傷を負ったので私が疵の手当てをしました。それを非常に感謝して今でも私を大事にして呉れますと語った。それならば貴殿が民部を訪問して、朝鮮の戦いで諸大名の働きの甲乙を雑談で民部から聞いて私に教えて欲しいとの事である。

高虎が毛利の宅を訪れて閑談してこの問題を投げかけたが毛利は、この間七人の大名衆と我々仲間五人の者との争いが公となり、近く内府卿の裁判があり私も評議の席へ呼ばれるので、その

積もりでと知らせがあり覚悟はしています。そこで私も訴訟人の立場ですから、いくら日頃親しくしている貴殿と云えども、事前に口上を言う事はできません。それは内府卿のご判断(p230)にどうかと思うからです。しかし不束者の私ですが先公に選ばれ大切な役に任ぜられたので、朝鮮へ着岸の日より帰帆迄の間の事を全て書留めた日記があります。貴殿に進上しますのこの内容を内府へ伝えて結構ですが、口上は一言も申しませんと云って日記を高虎に渡した。高虎が日記を持参すると家康公はたいへん喜び毛利の事を褒めた。

その後いよいよ双方対決の裁判の日が決まった。故太閤時代に御前公事として度々行われた形式をとる事になった。奉行、諸役人列座の前へ七人の目付達は左右に分れる。一方には両人の内竹中が病気で欠席故毛利民部一人が出座、一方は福原を始め五人が出座した。その時前田玄意は五人の面々に向って、朝鮮の戦いの時蔚山において浅野幸長、加藤清正、黒田長政の戦功について、各位からの報告書が杜撰であり先公からの御褒賞が無かったのは心外であると三人を含めて七人の大名衆から直訴があった。本日この件を糺すものである。この報告書で毛利、竹中は内容に納得できぬとして捺印を拒否し、仲間同士で口論になったと世間で云われているが、どんな事情があったかと尋ねたが、五人の面々は返答がなかった。その時毛利民部が玄意に向って、報告書の件で私達両人が五人に対して争論したことは世間で云われている通りですが、福原右馬助が仲裁して少々文言を書改めたので私共も捺印しました。この上は何も申上げる事ありませんので、七人一同に同罪でご処理願いますと述べた。

又時浅野長政が五人の方へ向って、朝鮮国渡海の前に先公より各位に命ぜられた誓文の前書にも七人が相談(p231)して検討を加え議論して決定の上報告する様にとあるのは重要な規則である。報告書の内容に二人が納得できぬと捺印を拒んで争論となった事を内府卿も不審に

思われ、我々も又同様であるので、この点を聞かして欲しいと云ったが福原を始め五人の面々から一言の答もなく口を閉ざしていた。家康公は座を立ち評議は終了した。

その後浅野長政宅へ奉行衆及び大坂目付役の面々が立合う席へ五人の面々を呼出し奉行からの申渡しがあつた。朝鮮の事は海路遙かに離れた場所であり、渡海した諸大名の軍忠や戦功の多寡を詳しく知りたいという先公のお考えで各位をその役に任ぜられた。其上は正確且つ公平な報告がなされるべきを依怙輩員が行われた事は不届きであり、その罪は軽くない。先公の時代であれば厳しく処断されたであろうが、今は御幼君の代でもあるので罪一等軽く云う内府卿の気持を入れて、各々の領知を取上げ改易を申し付けるとの事で決着した。この裁判以後、家康公の威光は旧に倍し、人々は益々尊敬したと言う。

著者註 この争いについて書記した書も多数あるが異説も多い

裁判の結果、福原一人が豊後府内の城地を取上げられて改易となり、残る四人は領知はそのままで蟄居となつたと云う説もある。私が聞いたのは五人一同に改易となり、福原、垣見、熊谷三人は佐和山へ行き、中でも福原は石田三成に近い縁者故佐和山の城中に住み、垣見と熊谷は三成の世話で佐和山の近辺に隠れた。翌年の秋家康公が会津へ発向して留守になつたので、三成は大坂へ出て奉行衆に頼み四人共に秀頼卿へ帰参させ、福原は美濃国(p.232)大垣の城代に任じ、垣見と熊谷には同城の備中曲輪を預けた。又大田飛騨は筑紫へ下つたが、秀頼卿より帰参する様にと奉行からの通知があつたので、旧領豊後臼杵の城に立て籠もつたが、中川修理大夫秀成が東軍に付いたので同国岡の城より軍勢を出して大田一吉(政信)を攻囲んだ。この時垣見家純の居城である富木城、熊谷直陳の安岐城に兩人が夫々の家来と共に立て籠もつたが、東軍の黒田如水軒が

中津の城より攻め込み両城共に攻落した。

この事から垣見、太田、熊谷等は当分の蟄居であり所領はそのままだ事に気づき、福原一人だけが領知を召上げられたと書記したものと推量する。五人の者達は蟄居を申付けられたのであるから、大坂の近辺等に閑居するべきで、三人は佐和山、太田は九州へ行くのもおかしい。あと一人早川主馬は改易になつた時、奥州方面へ行ったと云う説もあるが、どうした事か翌年七月四人の面々秀頼卿へ属している。

私が若い時、水野如心と云う老人がおり、この人は加藤清正に仕え、関ヶ原一戦の時は肥後国にいた。如心の物語では関ヶ原一戦について、初めは東軍の勝利は十に一つと西国では噂があつた。そこで清正も専ら籠城の支度をしていたが、味方の諸勢が美濃国岐府の城を攻落した事が黒田如水より知らされ、清正初め家中の侍達は安心した。以後は籠城の用意を止めて他国へ進発する体制になつたと云う。そうであれば垣見や熊谷の家来達も主人の帰参する情報もあり、その上石田方の西軍有利と聞き、(p.233)喜び勇んで夫々の破綻した城に籠り西軍の色を明確にしたものと思われる。

註1. 垣見家純(一直? - 1600) 富来城(大分県東国東町富来浦)主、家臣が城代を勤める

註2. 熊谷直盛(直陳? - 1600) 豊後安岐(国東市安岐町)城主、家臣が城代を勤める

註3. 臼杵城 元は大友家の城、福原が入り、其後太田一吉が入り西軍に属す

註4. 福原直高(? - 1600) 石田三成妹婿、豊後府内(現大分市)城主、改易、

註5. 中川修理大夫(秀成 1570 - 1612) 東軍に属す、岡城主(大分県竹田市)

註6. 黒田如水軒(孝高 1546 - 1604) 勘兵衛、東軍、嫡子長政(1568 - 1623) 東軍

註7. 岐阜城 織田秀信(信長孫) 西軍に属す。関ヶ原前哨戦で東軍に攻落される

家康公が伏見城へ移った時、毛利輝元を始め三大老の面々がお祝いとして大坂から訪問した。しかし家康公からの返礼の訪問が無く、それだけでなくとも秀頼卿と淀殿等に対面のために時々は大坂の訪問があるべきだが、一向にその様子が無いので諸人が不審に思っていた。浅野長政がこれを聞いて、何とか家康公に大坂下向をして頂きたいと、伏見当番の時に本多佐渡守に伝えた。しかし下向の様子が無いので長政が大坂へ帰った後、片桐市正も大坂より訪問して雑談の中で、このところ久しく秀頼卿や淀殿への御対面も無いので、皆色々心配しています。皆の安心の為に近い内にご下向なされた方が良いと思います。その時は昨年と同様に私の宅にお泊り下さいと申上げた。

家康公は、貴殿の言う通り私も大坂へ下向する積もりで数度にわたり供の人数の検討迄したが、今年春から持病の寸白（サナダ虫）を発し、気分が勝れないので引延ばしてきた。今は暑い少し先に涼しくなったら下向するので、その時は前と替わらず貴殿宅へ泊まりたいとの事だが具体的な日程の明示が無いまま片桐も大坂へ帰った。

慶長四年（1599）四月十八日、故太閤秀吉卿の廟社へ豊国大明神と云う社号が勅許となり、翌十九日遷宮の儀式があった。秀頼卿からは福島左衛門大夫、北の政所からは青木紀伊守が名代として社参した。此日（p234）家康公も豊国神社へ参詣し、明神への奉納は勿論、末々の神官、僧侶等に至る迄全てに施物をした。その後直ぐ照高院へ寄って天台宗の論議を聞いた後伏見へ帰城した。

著者註 この豊国の社号に関して、秀吉卿が在世の時から新八幡宮と云う社号を熱心に願ったが、何か支障があるのか新八幡宮の勅許はなかったという説もある。

其頃家康公は伏見当番奉行の外に一名用があると云う事で増田右衛門尉が大坂より登城した。奉行二名を呼んで、朝鮮の戦いで彼国へ渡り戦功有った人々に対して、太閤が存命なら夫々表彰もあつたらうが、今は幼年の秀頼卿の時代なのでそれも出来ない。せめて休息のために夫々の国へ帰城してはどうかと思う。私の考えを外の大老方へ説明し、各々に休暇を通達するのが良い。中でも二度の朝鮮の役で働いた人々は来秋中迄休暇を取る様にすれば良い。毛利輝元、浮田秀家両卿も、朝鮮の役では久しく名護屋に滞在し、その後今迄大坂に詰めており、たいへんご苦労と察するが外の大名と違い私からの指示では遠慮もあるだろうから、奉行衆で相談して私の考えを語るが良い。また五人の奉行衆も一人宛帰城して休息する様にとの事である。

増田は大坂へ帰り大老達に報告したところ輝元と秀家が云うには、現在は御幼君故成長される迄はこの大坂に詰めていなければならぬと思っていたが、内府卿より奉行衆へその様な内意があるなら我々も休暇を頂きたいとの事である。この事を伏見へ報告した（p235）ところ、それでは故太閤時代の旧例の通り、大老を始め国々の郡主である面々へ秀頼卿より休暇を給わるるので拝領物等も準備して渡せる様にと大坂の奉行衆へ指示があつた。

時に上杉景勝が奉行へ申入れたのは、私は故太閤の代に会津を拝領した時入部のため休暇を下さったが、在国する間もなく大坂へ来たので領地の見回りもしていない。その上内府卿もご存知の通り一揆の多い所なので、出来れば帰城して領分の政務なども指示したいとの事である。同じく加賀の前田利長も、亡父大納言利家の家督を拝領したが未だ入部もしていないので、弟能登守利政と共に休暇を下されたいとの願いである。

奉行衆は相談してこれら両卿の願いを内府卿へ伝えれば御不興は間違いないと思つたが、放置もできず伏見へ報告したところ、家康公は全く咎めなく両人も願いの通り都合の良い時出發して来年三月になり雪も消えた頃參勤する様にと、秀頼卿名による休暇の許可を与える様に奉行に指示があった。大老三人も帰城して奉行衆では長束大蔵が帰城の筈だったが、内府卿が大坂へ下向する予定もあるので待機のため逗留したという。

八十二 家康暗殺計画の風聞

慶長四年（1599）八月の初め頃、家康公は徳善院玄意を呼んで、久しく朝廷に參内していないので、貴殿と伝奏衆と相談して調整する様にと指示した。玄意法印が上京して武家伝奉に連絡したところ、天皇に伝わり来る十四日に參内される様にと勅宣があった。

家康公は參内し、禁中より直に高台院が住居する上立売の館を訪れ、その日の夕方伏見へ帰城した。翌十五日八幡へ神拝のため行く予定だったが（p236）、その日は祭礼日のため諸人參詣の妨げにもなるのではとの考えから、一日遅らせ十六日に參詣を済ませた。

註1 伝奉衆 武家伝奉 朝廷の武家に対する担当窓口、

註2 高台院 秀吉の正妻おねの出家名 伏見城を出た後京都御所の近くの上立売に住居

その後家康公は大坂の奉行衆の一人を呼んで、私は早く大坂に下り秀頼卿成長の程を見て、淀殿にもお目に掛かりたいと思つていたが、病気のため思う様にならなかつた。最近気分も快くなつてきたので来る九月初め頃、重陽の祝義を兼て下向するので各位予定願う。

いつもは片桐市正宅に泊まり今回も彼は承諾しているが、亭主の心遣いも大へんと思うので今回は石田治部少輔の屋敷が今は空家になつており、大坂逗留中は彼宅を宿とするので、その積もり

でいて欲しいとの事である。奉行は大坂に帰り石田屋敷の修理や掃除等を急遽指示した。

こうして家康公は九月七日に船で淀川を下り、其日の夕方四時頃着岸し直ぐに旅宿へ入つた。その時在大坂の大名小名達が皆挨拶に来たので、門前は馬や駕籠の置場も無いほどだった。夜に入ると増田長盛、長束正家の奉行両人の訪問があり、やや暫く密談が行われた。

両人が帰宅した後、家康公は井伊直政、榊原康政、本多忠勝三人に本多佐渡守を加え近くに呼び両人が知らせた事を語るに、加賀の前田利長から浅野長政に内談があり、明後日九日に私が本丸へ行った時、土方勘兵衛と大野修理の兩人に殺害させる由であるが皆どう思うかとの事である。佐渡守は、両人の奉行衆が事実無根の事を言う訳はありませんから、病氣と云う事にして重陽の訪問を取りやめ、伏見から人数を呼寄せるのが良いでしょうかと云う。直政、康政、忠勝の三人は、仮病で訪問中止と言うのもどうかと思ひますので、その心がけを（p237）持つてさえ居られれば別状ないでしょうと申上げた。それはとも角佐渡守の言う通り伏見の人数は呼ぼうと言う事になり、伊那図書（昭綱）を呼び、結城秀康公への詳しい口上を伝えた。図書は早速支度を調べて其夜中に大坂を馳出し、翌朝六時に伏見へ到着して秀康公の屋形へ参上して口上を伝えた。

秀康公も驚いて早速伏見城本丸へ出勤し、留守を預かつていた諸番頭、諸物頭全員を呼んで、今度大坂にて急な御用がある旨伊那図書を通して連絡があった、各自早速支度を調べて大坂へ行く様に、当城の留守番は全体私の部下が勤めるので各番所は明けて置き一刻も早く出發する様にと指示した。

一方大坂では家康公は八日の夜増田右衛門方を訪問し、長東大蔵も後から参加して暫く閑談して後帰宿した。

翌九日の朝八時に本丸へ出かける時本多正信は留守を守り、井伊、本多、榊原の三人の外に譜代大名四人、御使番衆五人の合計十二人がお供した。桜の門の番人が御供衆が多すぎるので残られる様にと云ったが無視して、家康公が式台上に上がるとお供衆も皆袴の括りを解いて上がった。その時増田、長束の兩人迎えて挨拶すると先に立って案内をした。浅野弾正はどうしたのかと尋ねると、夜中より急に病気が出て今朝あなた様が来られるが、迎えられる状態になく申訳ないと私共へ連絡ありましたと言う。

それから千畳敷の廊下へ差掛る時、井伊直政は後を振り返り御使番衆へ向って、皆はここであつたので五人の面々は残り、七人の人々は更にお供を続けた。秀頼卿の目付衆が、ここで残って下さいと云った時、酒井備後守(p238)はその目付に向かつて、今日内府卿は用心せぬ訳には行かないので我々が付き添うのですと苦々しく云うと、その後は何も言葉が無かった。井伊、本多、榊原三人の衆は秀頼卿と家康公が対面している座敷とは障子一枚の隣に控えていた。やや暫く挨拶が終わると家康公は立ち上がり、千畳敷廊下の前を右に出て、大台所へと指示したので右衛門、大蔵が先に立って案内した。そこで酒井備後守を呼んで、この大台所にある二間四方の太行燈は外では見られないものだから、供の者達に見せようとの事で備後守は中の口へ出て御供衆を連れて来た。御供衆に見せた後は直に内玄関へ出て、御供衆を連れて旅宿へ帰った。

宿では伏見にいた家来衆が秀康公の指示で我も我もと馳下つて来たので、石田の大屋敷に入りきれず、石田木工頭(正澄Ⅱ三成兄)の屋敷の中迄入り込んでいた。これを見て大坂中の

人々は大いに肝を潰し、これは一体何事だろうと騒動になった。家康公は当初翌十日に伏見へ帰城の予定だったが十一日迄逗留し、十二日の朝大坂を出発する時、伏見より参じた家来衆も残らず御供したので四千人余で帰城した。

逗留中に家康公が増田右衛門、長東大蔵の兩人へ語ったのは、加賀の前田利長が浅野長政と相談し、土方と大野に指示して私を殺害させる陰謀は各位の通報で今回難を免れた。この上は厳しく吟味して、その目的、理由などを問うのが当然とは思いますが、それでは世間も騒がしくなり、公の為にもならぬと思うので今回の事はこの俣にして置く。しかし土方大野の兩人迄その俣では(p239)今後の為にもどうかと思ひ厳しい処罰を行いたい、各位も知つての通り、兩人の心より出た事でもなく、その上公に対する謀反でもない。随つて兩人共遠国大名へ御預けはどうかとの事である。両奉行は極めて寛大なお考えですと云い、その後土方は佐竹義宣へ、大野は結城晴朝の両家へ預となった。大野は十月二日、土方は同月三日に大坂を出発して夫々の配所へ向かった。

この時浅野長政は増田と長束に、私は各位もご存知の通り先公の代から俣の左京大夫に陣代を勤めさせよとの事で朝鮮国へも二度渡つてご奉公した。私としては早く隠居逼塞の身にもなり引籠もりたいが、その様な願いを申請する機会もなく日一日と延びてきた。ところが最近はかなり老衰して記憶力も薄れてきたので重い役職など勤まる状況で無くなった。内府卿への取成しを各位に宜しく御願ひし、俣の左京大夫(幸長)への家督相続と私の隠居をお許し願ひたいと云う。

兩人からその趣旨を報告すると家康公は、奉行職と言う重い役に先公が付けられた者を私の一存で止めさせる事は難しいが、老養のためと云う事なら当然甲州へ行くのは自由であるとの

事で長政も十月五日大坂を発足して甲府に逼塞の形で閑居した。

著者註

其頃浅野家に浅野出羽と云う者がいた。この出羽は武功もあり、其上才智も備わり浅野幸長のお気に入りでも伽にも加わっていた。長政の帰国の事が事前に大坂から聞こえた時、出羽(p240)は幸長に、今度長政公が御帰国されるのは内府公と折合いが悪くなったからだと言ふ専らのお噂です。どんな事があつたのか心配な事ですと云えば幸長は内府卿の事は勿論、私の親ではあるが長政公とても皆ムジナの都合だから、其方などの考えが及ぶ事ではない。余計な事に気を遣わずほつとけと云つたが、家中では一様に心配していた。しかし長政の帰国後五六日すると江戸中納言(徳川秀忠)より使者があると言ふ事で甲府の町中を急に掃除し松木と云う町人の家を宿と指定し、浅野父子共に使者の接待に取り掛かった。内府公と秀忠公父子から使者として大久保治部太輔が訪れ馬、鷹、其外綿小袖、ほそ頭巾、しかまき様の物に至る迄取り揃えて給つた。そこで内府卿との関係は別条無いと分かり家中皆喜んだ。その後長政より家老の浅野孫左衛門を派遣してお礼を申上げた。この件はその時代の記録などには見当たらないが、私が若い頃芸州広島に居た時、永原兵右衛門と云う老人が居り、彼の親十方院方へ浅野出羽が夜咄に来て雑談しているのを直接聞いたと兵右衛門が私に語つたので書記した。

八一三 家康伏見城より大坂城二の丸に移る

その頃家康公が増田、長束両奉行へ、今は大老の面々も在国しており、各位の同役の中で石田治部は佐和山へ逼塞しており、浅野弾正も老衰のため帰国したし、玄意法印は朝廷

関係の連絡のため上京がちである。そのため各位二人だけで仲間がいないので、長束大蔵も休暇を許可されているのに領地の水口にも帰城(p241)し難い様である。大坂に誰も居なくなる事もあるので、私が西の丸へ移つて政務を執行するのはどうだろうか。両人が賛成なら大老方へ通知するか、又は今春向島よりこの伏見城へ移る時、大坂西の丸でも私の心次第と大老達が各位に云つた経緯もあり、今更報告する必要も無いかも知れないと云つた。

両人の返答は、おっしゃる通り今春当御城に移られる時、秀家、景勝兩人共に大坂西の丸へ移るのもそれは内府卿の御心次第と云う事を私共に云われましたので、今度大老方への御相談は不要ですと事であり早速大坂西の丸へ移る事になった。その場合伏見の城には結城秀康公を置き、家中の者は三十日宛の交代と指示し、大坂では石田治部少輔と同主頭兩人の屋敷を下宿にした。又天満に石田が下屋敷としていた大屋敷があるので、その中に小屋掛けをして輕輩の家来達は天満から西の丸の番等を勤めた。

著者註 これは小木曾太兵衛が語つた事である。大坂西丸への移動は今世間で流布する記録では九月九日(重陽節句)に秀頼卿へ面会した後、直に西の丸へ移つたと書いており、その時、増田と長束が相談して、内府卿の御機嫌宜しき様にと西の丸に本丸の様な大広間を造作し、その上五重の天守を接待の為に新しく作つたとある。どちらが実説だろうか。

その頃京都において日蓮宗の僧徒仲間が不受不施の論争があつた。伏見城に双方共強訴して(p242)来たが、調度大坂奉行仲間が少なくなり、伏見へ呼ぶのを控えたので裁判が遅れていた。そこで今度は家康公が西の丸へ移つたので双方の訴訟人も大坂へ下つてきた。種々調査の後、双方を西の丸へ呼出て言渡した事は、大仏供養の時、一つの宗派の中で別れて出座しないし施物等を受納しないのが宗門の決まりであると云うのはそれは構わない。しかし

秀吉卿薨去の時に、本寺本山の住職として納経拜礼も勤めず、その上配分した施物を受取らぬと云うのは国恩を思わず公儀を軽んじる事であり罪科は軽くない。その様な者を日本の地に置く訳に行かぬと全員に遠島を申し付けた。

註 不受不施 日蓮衆の一派で1535年京都明覚寺日奥が始めた。法華経信者以外からは
施しを受けない又施しをしない。 裁判で受布施派と対決し敗れる。 日奥は対馬流罪

八―四 加賀前田家の苦難

其頃大坂は云うまでもなく、京伏見でも土方と大野の両人が御預けとなった経緯及び浅野長政が甲府に逼塞となった事が色々噂になった。しかし段々突き詰めると事件の元は加賀中納言利長が反逆を企て浅野長政へ内談し、大野土方へ指示して先ず内府卿を殺害致させようとした事が明らかとなり、細かい調査もすべきだが御幼君の時代に世間の騒動となる事は公儀の為に良く無いと云う内府卿の考えで、当然死罪となる筈の土方と大野さえも御預けとなった。浅野長政は重陽の儀式に病気で登城しなかつたが何の咎めもなく、内府卿の手前を憚つて自ら身を退き甲州へ蟄居した状態である。

残るは前田利長一人の身の上だが、追詰められて止む無く反逆を企て年内にその準備を調べ来春にもその態度を明白にする考えらしいと盛んに噂が(p243)流れた。遠国迄も噂が流れ、その頃大方の大名達は在国、在郡だったから、情報収集の飛脚が伏見や大坂の屋敷と頻繁に往来するので益々世の中は騒がしくなってきた。

その頃増田、長東が所用で西の丸へ参上した時、家康公は両人に向かって、各位は北国方面

の事に関して何か聞いているかと尋ねた。両人は、おっしゃる通り、加賀の利長について世間では何かと云って居りますが、例の根拠ない噂と思えますと答えた。家康公は曰く、各位の言う通り虚説と私も思っている。他の者ならとも角、利長など謀反を起こす理由もない。しかし是程世間の噂になっているのだから、虚実の事は調べて置くようにとあつた。

その後暫くして家康公は又両奉行を呼んで、先日も相談したが利長の謀反の企ての噂は未だに続いている。これだけ長期に噂があれば北国方面へも流れない筈はなく、利長へも聞こえない事はあるまい。その時は思いも掛けない無実の噂に困っていると各位に頼んで取消しをする筈だが今現在それもない。と言う事は世間の噂通り謀反の企てがあるのは疑いない事であるが、各位はどう思われるかと云われ、増田と長東は仰の通りですと答えた。

その時家康公は、利長に就いては各位もご存知の通り、先般私の考えで出来るだけ穏便に処理し土方と大野も死罪を許したのに、その事を考慮せず逆に謀反を企てるとは重ねがさね罪は重いで、厳しく軍勢を向けて誅伐が加えられる以外ない。その場合御名代として私が出馬する(p244)ので各位も軍勢催促を検討されたい。但し朝鮮に在陣した諸大名は今回出勢の必要ない旨を私の指示として通達されると良い。早速井伊直政と榊原康政へ北国発向を命じたので是以後加賀陣として世間に触れた。

その頃丹羽宰相長重は大坂に滞在していたが、西の丸を訪れ井伊と榊原両人を呼出して曰く、近々加州金沢へ軍勢を向けられ、内府卿が秀頼卿の御名代として出馬されると聞きました。それに就き皆さんもご存知の通り、私は小松に在城して利長と領分が接しています。私が先陣となるのは云うまでもありませんが、念のため皆さんにお願いしておきますとの事である。井伊榊原両人は、お話は分かりました、それでは今内府に伝えますので暫くお待ち下さいと云い、早速

その事を報告したところ、家康公はすぐ長重と面会した。そこで家康公は長重に、今程兩人へ云われた事は御忠義の至りで感じ入ります。今度金沢への先陣に就いては古今の戦の定法です。ですから異論はないと菓子、酒などで接待し、その上長先の脇差を与えたので長重は是を頂戴し喜んで帰宅した。

以後大坂中が参加しての加賀陣と云う事が言われるので、その頃大阪滞在の諸大名の中でも利長と親しい人々より加賀家へ内通もあった。細川忠興は利長と親戚で親しくしているので、使者を向けて、謀反の噂が事実なら仕方ないが、もし虚説であるなら申し開きをすべきで一刻も早くした方が良いと連絡した。利長は舎弟の能登守利政や家老達を呼集め（p.255）相談した結果、家老の横山山城守長知を使者として、今度御地（大阪）において私に関する種々の雑説が出ており驚いています。全て虚説でありますのでお疑いなされぬ様、詳細は使者口上で申上げますと自筆を認めて渡した。

山城守大坂へ持参し細川忠興方へ行き、井伊直政に窓口を頼みその旨申上げたところ、早速面会が許されて西の丸へ参上した。家康公は上段に座り、井伊榊原の両家老を始め、其外の人々が左右に着座した中へ呼出された。山城守は懐中より利長の書状を取り差出したので井伊直政が受取って御前へ持参したが、手に取らないので御前に置いた。直政が自席に戻ると家康公は山城守に向かって、其方は何故登城して来たのかと尋ねれば山城守は謹んで主人利長は太閤様の御好恩を忘却し、亡父大納言の遺言に背き、御幼君へ対して別心がある。有ると天下に悪名高く云われております。縦令利長が狂病に侵され謀反等の企てがあつても家老達が諫め押さえ留めるのは勿論です。恐れながらこの事をよくよく御高察下さり、お疑いを散じて下されば、利長は勿論私共も忝い事ですと申上げた。

家康公は怒った気色で、利長に陰謀の企ては、今春老母芳春院を父大納言の遺言と云つて金沢へ送り、その後輝元と秀家の両卿に朝鮮在陣の労に報いて御暇を下された時、利長はどうしても帰国をしたいと兄弟共に御暇を給わって帰国した。その上今般謀反の噂が出て以来随分日が立つのに今頃その言訳をするのも（p.246）理解できない事である。この事から世間の風説と一致し利長の謀反は疑いない事である。以上から他人を使者として送つても直ちに追返すところだが、其方が来たので面会を許した。早々帰る様にと云われたが山城守は、色々申上げても聞いて頂けないのは止むを得ません。せめて利長からの書状を御覧頂きたいと云うので直政が上封を取って差出すと一読して、是は書状だけではないか、誓紙はと尋ねると山城守は、去年大閤様御他界の時、末々迄謀反など起こさぬ為と各々が誓約した以上は今更誓いは致しません。もし元の誓約を御疑に成られるなら、その以後幾枚の誓紙を差上げてもそれは反古同前と思えます。恐れ多い事ですが、利長の平生の人となりから心中の実、不実を御判断頂きたく存じますと答えた。

家康公は何も言わなかったが幾らか機嫌を直した感じで、それでは母芳春院に家老職の者を添えて差出す様にと云えば山城守は、芳春院については利長、利政兄弟が決める事であり、私等が軽率にお請けする事ではありませんと答えた。其方が云うのも当然だ、それでは早々加賀へ帰り、利長にその件と伝える様にとの事で山城守は御前を退出し其日大坂を出発した。山城守の御前における態度や言上の次第などについて、大名の家で家老職を勤める人々の良い手本だと家中の人々が噂した。さて山城守は金沢へ帰り、家康公に云われた事（p.247）伝えたところ、利長は舎弟利政を始め家老の面々を呼集めて相談した。能登守利政は同意出来ない口振りだったが、家老の面々は全員が

内府卿の差図に違背すればどうなるか分からないと云うので、利長はその意見に随って母芳春院に家老を添へて直ちに差出す事になり加賀陣の咄は無くなった。

その後家康公は増田・長束両奉行へ、利長が今度母芳春院に家老の子供を添えて差上げると云う事は私との和睦のしるしである。それならば大坂に置く事も無いので江戸に置く様に各位はどう思うかと尋ねた。両人は、今度人質を何処に置くのも自由とは云っても、故太閤時代より公儀への人質は別として、私的な人質取交しは先例にありませんので輝元と秀家にも一応御相談されてはと思ひますと答えた。家康公は、それも一理はあるが今回の事は公儀に逆意があるからこそ、先ず内府を亡き者にしようとしたのではないか。それならば領地を減らすとか人質を取って世が乱れるのを防ぐ必要がある。そのため人質は大切なものであるから、この大坂の様な華やかな場所に置く事は適切ではないので、私の領地へ送り警護も厳しく付ける。今度利長から差出す人質を手始めと考えるからであると云う

増田長盛が再び、仰は良く分かりますが、利長と利政はどう思うでしょうか(228)、又長束も、長盛が申上げる通り、母親の江戸行には兄弟の納得がせず必ず中止のお願いが出るでしょう、たからと言って兄弟の言通りにすれば御威光がたちませんで強行する事になると又々天下の騒動となり、結局公儀の為にならないと迄は申上げませんが、更に御賢察願いたいと言う家康公は長束へ向かつて、そんな腫れ物に触るような考えでは天下の政治は行えるものだろうか、元來利長は各位も知っての通りの訳もあるのです、母芳春院を関東へ送る事に私に對して不満を持つなら、その時はその時の事だ。しかし各位が色々心配するので私から利長へ書状を送り、その返答の趣旨で私も考えると苦々しく云ったので、其後両人もそれ以上云わず退出した。

その後家康公は利長への書状を認めて加賀の留守居役を呼び、大切な用だから早々伝える様にと云い書状を渡した。

使者が書状を金沢に伝えると、利長は書状を見て舎弟利政とその外家老達迄集めて相談した。能登守利政は大いに不満を顕し、この様な事になるとは先日芳春院殿を大坂へ帰す様にとあつた時に考えが及ばなかつたのは残念な事で、芳春院殿を東行させる事は当家末代の恥です。とりわけ輝元、秀家、景勝等の考えを聞く事も心外ですから、十分考えて返答して下さい、この利政は全く同意できませんとの事である。その時利長は利政へ云つたのは、(229) 一般に細かい事は是非に拘るのは少身武士の事です。既に国郡の主としての立場なある者にとつては代々の盛衰や家の興亡を考慮する事が重要ですとの事である。その後家老達に向かつて、芳春院殿については、私の考えで内府卿に任せて東行させると返答するので各位その積もりでと言渡し、その後とも角お考え次第にと返答した。

加賀留守居役の者が西の丸へ参上して、芳春院の事は御差図通り江戸へ行かせますと中納言から私共へ伝えられました。いづごろ行かせましようかと伺つたところ家康公は、今の季節寒気も強いので来春の気候も暖かになつた以後がよい。今迄ゆつたりとした住居に住んだ人だと思ふので、不自由が無い様に家作等も指示しているので工事が終わつてからと言う事になり、翌慶長五年の五月九日に芳春院は伏見を出て、六月三日に江戸に到着した。

著者註 この件は世間で流布する旧記にも概要は載っているが、少し違ふところもある。

私が書留めたのは大野知石が語つた事で、これは土井大炊頭殿等からの雑談が語り
伝えられたと思われ実説と考える。この件で外にも知石は語つたが、長くなり又余り意味も無いの省略した。

慶長四年（1599）十二月初め頃、家康公は増田右衛門尉を呼んで、私は貴殿も聞いている通り若い頃から鷹狩りが趣味だが、近年は国元を離れているので今では鷹（p.250）扱いも忘れた感じがする。貴殿も承知の様にこの所世上は物静かであり近辺へ鷹狩りに出かけた自分が鷹の用意もできないので、良い様に貴殿が調整し呉れぬかとの事なので増田は承り結構な事です鷹狩りについてはご安心下さい、早速用意しましょう。できれば私も御供したいのですが長束が水口に帰城しており、玄意と私の二人しかおりませんので留守番をします。先公の時代には毎回鷹狩りに御供した面々が参加するようにしますと云い、鷹狩の支配人の佐々淡路守と堀田若狭守へその旨を指示した。

太閤在世の時に鷹狩りに出かけた様な準備を調べて、御伽衆の織田有楽、細川幽斎、有馬法印、金森法院、青木法院、山岡道阿弥、岡江雪、前波半入、この外家臣の井伊直政、榊原康政、酒井忠重、同忠利等が輿の後に続いて御供した。その日は摂津国茨木へ行き一泊し、その地を支配する川尻肥前守宗久が御膳を差上げた。翌六日西の丸へ帰城して、佐々と堀田兩人へ使者を遣わして時服と黄金、その他の鷹匠等には関東絹、銀子を与えた。犬曳。餌さしの下役に至る迄が白銀や鳥目等を潤沢に拝領した。この様な事から下々、軽輩の者に至る迄内府様と唱え深く尊敬し、大坂中が益々物静になり上下とも安楽に慶長四年の歳も暮れた。

明けて慶長五年（1600）正月元日の早朝、家康公は本丸へ出掛けて秀頼卿、母淀殿へ新年の祝賀を述べ西の丸へ戻った。その時大坂在住の大小名が本丸への挨拶の帰りに西の丸に寄り各々太刀折紙を持参してお礼に参上し、その外秀頼卿旗本の諸番頭、諸役人に至る迄残らず

（p.251） 参上するので、元旦より五日間西の丸玄関前はいへんな混雑となった。

正月中頃を過ぎて在大坂の諸大名、其外諸番頭、諸役人等に迄餐応が行われ、四座の猿楽を呼んで能興行も催されたので、西の丸は特に賑わい故太閤の威勢に劣る事はなかった。

註1 太刀折紙 太刀を贈る時の数量、品目を書いた目録
註2 四座の猿楽、歌舞伎の前身

八―六 宇喜田（浮田）家の内紛

その頃備前中納言秀家と家老の浮田左京、戸川肥後、岡越前、花房志摩四人の者達の主従の争いがあった。この理由はこの四家老に続いて、長船越中と云う家老が居たが病気のため、その子又左衛門が家督を継いでいた。その時岡越前の父に岡豊前と言う者がいたが朝鮮国在陣中に病気となった。秀家自身も見舞ったが既に重態なので、何か言残す事はないかと尋ねたところ豊前は、別に思い残す事ありませんが、長船越中の倅又左衛門は親越中には劣り、人となりはねじれており重い役職等に就く者では無いとお考え下さいと遺言して死去した。

しかし秀家は豊前の遺言を採用せず例の又左衛門を紀伊守として家老職に任命し、その上この紀伊守の推薦で中村次郎兵衛と云う歩行侍を取立近習に使った。それ以後次郎兵衛を段々出世させ二千石迄与え全ての事が紀伊守と次郎兵衛兩人の取計いで動く様になり、四人の家老達は不快を抱き紀伊守との関係は悪化した。そんな中紀伊守は急病を發し突然死去した。これは四人の家老が紀伊守の出世を妬み毒薬を盛って殺害したそうですと例の次郎兵衛が秀家に囁いた。秀家は四人の家老の行いは不届の（p.252）至りと思ったが、この四人は親父直家以来の家老であり、浮田家の四天王と世間で言われる程の武功の者である。その上宇喜田

左京等は近い親戚でもあるのでその俣にして置いた。

ところが次郎兵衛は自分と親しい仲間を集めて、長船紀伊守の様な人が不慮の死を遂げ、何の役にも立たない家老衆だけが集って国政を執行するので、邪で曲がった政治が多く嘆かわしい状態になった等と云いあった。四人の家老がこれを聞き、つい最近迄歩行侍だった中村の口からそんな事を言うとは不届き千万であり、上に報告する迄もなく誅戮を加えようと相談した。これが中村方へ聞こえたので次郎兵衛方が一致団結して、御主人が云うならともかく、家老衆等の判断で私的に誅戮など思いもよらぬとして、家老方と中村方に家中が二つに分れ大きな争いとなった。

大谷刑部少輔は日頃秀家と親しくしているので、この事を心配して榊原康政と参会した時に浮田家の争いを語り、内府卿は常々私等へも、今は御幼君の時代だから世の中は静謐である様にと考えていると言われますが、今度の浮田家騒動の様子等を聞かれたら必ず困られる事と思います。そこで貴殿と私で相談して彼家の争いを仲介して内々で解決したいものですよ。康政は、良い事に気づかれました。しかし貴殿から頼まれるのもどうかと思います。浮田殿からの御頼みなら特別です。今度の争いが内々で収まらず、万一公儀のお裁きとなつては蒲生家の先例 (SUGI) 等もありますから、浮田殿の身上に影響があると迄は行かずとも内々の解決に労を取られるのも良く分かりますと云った。

大谷が秀家へにその状況を報告すると秀家はたいへん当惑し、この上は何とか榊原と相談して内々で解決する様に頼むとの事である。そこで大谷と榊原は集って内談して色々仲介したが解決しない。その内に交替の時が来て、榊原の代りとして平岩主計頭が大坂に来たが、康政は

帰城せずに宇喜田の家の世話で逗留していた。或夜御前伺公の面々が皆集っている所で家康公は、榊原式部は帰城の休暇を与えたのに未だにこちらに逗留して、大谷と相談して浮田家の騒動に掛り合っているが解決していかない様だ。榊原は皆も知っている通り、私の家中では高禄を与えており、他の大名の家の世話を焼いて接待に預からなくても済む筈とあった。これを聞いた人々で康政と親しい者は翌朝当番帰りの際立寄り、昨夜斯く斯くと話した。二三の者に言われて康政は大いに困惑し、急に支度を調べその日の夕方大坂を立つ時大谷に断りの置手紙をした。

大谷は手を回して事の次第を調べたところ、上記の様な穏便でない言葉なので大谷も心外と思ひ増田右衛門尉を訪れて是までの事を雑談して、徳川家において榊原は重職の者なのに、内府卿が皆の前で悪し様に噂するのは、これは私に對してのものとも考えます。今日より以後宇喜田の争いに介入しない積もりですと云った。増田は (p254)、それは貴殿の言葉と思えない事です。榊原は内府卿の家臣だから内府卿の心次第です。貴殿は別ですから何とか内々に解決するのが良く、それは秀家卿のためと言うばかりでなく第一は公儀の為ですなどと宥めて大谷を帰した。

一方浮田家の四家老は榊原が急に下向したので、仲裁の手切れと考えて各々居宅に籠り、中村次郎兵衛を拝領したいと願った。秀家は中村に内意を伝え、其方が当家を立去れば取り合えず事が鎮まるのではないかと再三説得するが中村は応じず、ご意見に随い立去れば家老達の威勢を恐れて逃げたと言われては口惜しいので切腹しますと言う。そうなると後の収まりが付かなくなるのでそれは押さえた。秀家は明石掃部を招いて、其方が中村に意見して一旦立退く様には出来ないだろうかと相談した。掃部が云うには、私は四人の者達と同じ考えではありませんが岡越前守とは由緒もあり控えたいところですが、今回の争いを内々で解決しないとお家の為にどうか

おもいますので中村方へ行き私の考えを言い聞かせます。但し先に中村へ通知をお願いしませう。そこで秀家は側近の者を通じて次郎兵衛方へ内意を連絡した。

その夜更けに掃部は中村宅へ行き、色々意見したがどうしても切腹すると云って聞かない。そこで掃部は、貴殿は少身より段々の御取立に預った厚恩の人でもあり、忠義を第一と心掛ける以外はない人と思っていたが、それとは違い不忠不義の人だと云う。掃部に云われて中村は非常に不機嫌となり、貴殿は私を (p.256) 不忠不義の者と云うには必ず理由があるでしょうから、それを聞かぬ訳には行かぬと言う。その時掃部は、今度の争いが内々で解決せず公儀の裁きとなれば、秀家卿の御立場はどうなるかと言う事に気付かないのですかと云えば次郎兵衛は、だからこそです。今度家老四人が一致して私一人を狙つてとやかく言うのなら、私が切腹して死ねばそれ以上云う事もないでしょう。それで事が鎮まり秀家卿の御為にもなるのでは考えて切腹するのです。これを不忠不義の者と云う貴殿の論は全く理解できませんと言う。

そこで掃部は、今度の争いは家老四人と貴殿一人との対決ではなく、御家中の近習や外様の諸士数十人が集り貴殿と一致同意している事でこの様な騒動となっているのです。そこで貴殿一人に腹を切らせれば貴殿に肩入れした者達はその俣にせず、貴殿切腹の後に四人を殺害しようとか、又皆で相談して御家を立退いて家老四人の非を公儀へ訴えろとか、この何れかに決まっています。夫ゆえ貴殿の切腹は御主人の為に差障り、知人仲間の苦労ともなりません。是を不忠不義と私が云うのです。それでも猶理屈があるなら云いなさいと顔色を変えて明石は語った。次郎兵衛は一言の返答もできず、これ以上はとも角も貴殿の御計らいに任せますと云う事で落着した。

その後風雨の烈しい中夜陰に紛れて蓑笠を着た人足十人程が次郎兵衛を取囲み屋敷を出た。

その後秀家から前田玄以法印 (p.256)、増田長盛両奉行の方への申入れがあり、当家家老達に不届の事がありました。四人共公儀で存知の者です。自分仕置を行うのも憚りがありますので何分にも処理願いますとの事である。奉行より家康公へその旨報告したところ、西の丸へ四人共に差出す様にと秀家に伝えた。当日に至り四人が参上したが何の吟味もなく、浮田左京と戸川肥後は前田徳善院へ御預け、岡越前、花房志摩両人は増田右衛門尉へ御預けとなり、その日西の丸より直接郡山と亀山へ夫々向かった。

著者註

宇喜田家の騒動は色々な本に記してあるが、本説は大坂冬の陣の時、大野修理方に

明石掃部が夜振舞いに来た時、大野に語ったのを直接聞いた米村権右衛門が浅野因幡守殿へ語った事を因幡守殿が覚書に留めたものである。

榊原康政はこの時の様子からすると下向の後は江戸屋敷か又は領地館林に蟄居している。と皆が思っていたが、江戸へ帰着すると直に登城して秀忠公に面会し、大阪城や上方筋について尋ねられ、御相伴で料理なども出された。その後も続いて方々で接待を受け、自分でも客に振舞い以前と何も替わらなかつた。この様子が大阪にも聞こえて皆不思議に思ったという。

次に大谷吉隆は以前奉行職の時以来家康公とは親しかったが、病気のため職を免除となつた後は暇になり出入りも頻繁となつた。去春家康公と大坂四大老五奉行衆の争いの時も大谷は昼夜を分けず家康公の伏見屋敷に詰めて味方した。この争い (p.257) が収まつた後は以前にも増して親しくなり、台所へも出入りして良く御相伴にも付合つた。

しかし石田治部少輔と親しい事が先日浅野弾正から報告があり、その上病気も次第に重くなり顔形も日々醜くなり、家康公も内心疎ましく思っている様子が側衆の人々には感じられた。そこへ浮田家の争いの事があったので大谷の方から身を引いて、偶に参上しても以前とは違って段々疎遠になった。

次に御預けになった宇喜田家の四人の家老の内、浮田左京と戸川肥後は家康公の会津発向の時、前田徳善院と内談して備前より家来を呼寄せて、後を追って江戸へ下った。それを聞いて岡と花房も共に参加したかったが、その時は既に内府方と石田方に分れて騒然としていたので、増田へ相談する事も出来ず密かに郡山を立退いて関東へ下った。その後濃州での戦いで徳川方先手に加わり関ヶ原で奉公したので四人共に徳川家の旗本に採用された。その時浮田秀家は敵方の主将でもあるので、左京は姓名を変えて板崎出羽と改めた。

落穂集第八巻終

落穂集第九巻 (p258)

九一 上杉景勝の反逆容疑と会津進発

慶長五年(1600)春頃、会津中納言景勝が謀反を企んでいると云う噂が出たが、懸け離れた地であり又虚説だろうとの話もあった。しかし江戸からも噂の報告があり、更に会津近辺の国主や郡主からも夫々の屋敷に報告があったので、これは実説ではないか思われた。そこへ越後の守護である堀久太郎の家老の堀監物が参上して詳しい報告があったので、内府卿(家康)は増田右衛門尉、大谷刑部兩人の兩人を呼んで、各位も聞いていると思うが、上杉景勝が陰謀を企てていると専ら噂が飛び交っている。真実かどうか不明だが世間の噂も不穏なので放置する訳にも行かぬ。そこで各位より上方筋の噂を知らせる為に人を派遣して状況を調べて報告する様にとの事だった。そこで増田長盛(p259)が家来の河村長門と云う者を使者として増田、大谷両奉行連署の書状を持たせて派遣した。

これに対して景勝の答は、当春早々上洛予定でしたが病気の為不本意ながら延びております。当地は未だ寒気厳しく気分も勝れないので、いまま少し保養して快気次第登城しますとさりげない返事である。しかし色々の噂が続くので内府卿は伊那図書を派遣して真意を聞いたところ、景勝から伊那図書への返答には少し反逆の様子も感じられた。其頃京都の相国寺に豊光寺充長老と云う僧が景勝の家老直江山城守兼統と親しい事から、内府公の内意をこの僧が兼統へ書状で伝えた。

その文言は

わざわざ使者便でお知らせします。景勝卿の上洛が遅れており内府卿は疑念をお持ちです。上方での噂は穏便でなく、此件で伊那図書や河村長門が派遣されたので使者から伝えられたと思います。貴殿と長年の付き合いですが愚僧が心配しているのは次の事です。それは香指原に新たに築城している事及び越後の津川口に道路を作っている事です。これは絶対に良く無い事で中納言殿（景勝）の考えが違っていたら貴殿が止めなければなりません。内府卿が疑念を持たれる理由です。

- 一景勝に謀反の気持が無いなら、靈社の起請文で申開きすべきと内府卿は思っている。
- 一景勝の律義な性格は太閤様以来内府卿も知っているので、遅延理由が立てば異存はない。
- 一隣国の堀監物から細かい報告があるので、堅く陳謝をしないと申開きが立たない事を十分認識されたい。

一去る冬加賀の前田利長の問題が起きた時、内府卿の公正な考えで処理され、特に何もなく（p260）収まりました。これは参考になりますのでその事を覚悟されるのが良いでしょう。一京都で増田右衛門尉、大谷刑部少輔は全て内府卿へ相談しているので、この兩人に連絡して下さい。又榊原式部太輔にも連絡して下さい。

一全ては中納言殿の上洛が遅れているため、この様になっているのですから一刻も早く上洛される様貴殿より計らって下さい。

一上方で専ら噂されている事は会津では武器を集め道路や橋を造っている由です。内府卿が強く中納言殿の上洛をお待ちの理由は、又朝鮮へ使者を送り、若し彼らが降参しなければ来年かその次の年に軍勢を向ける予定です。その打合せのためにも上洛は早くと云う事です。疑念を解く為にも早く上洛されるのが良いでしょう。

一愚僧は貴殿と数年絶える事なく交際しており、たいへん心配しています。会津の存亡及び上杉家の興廢の境目ですから十分考慮して事に専念して下さい。全て使者口上を含めます。

（慶長五）四月朔日

豊光寺 義充

直江山城守殿

この書状が会津へ到着すると、直江兼統より豊光寺へ返礼があり、文言は関ヶ原記等にも記してあるので略す。豊光寺が直江の返書を差上げたのを内府卿は披見して非常に機嫌を損なった。其後景勝の家来である藤田能登と云う者が上杉家を立去り江戸へ出て、景勝の所行について細かく秀忠公に報告した。更に大坂に上り報告したので、上杉の反逆は確かな物と認識され会津の討伐方針が出された。其頃前田玄意法印は京都に滞在していたが大坂へ来り（p261）増田右衛門尉と相談して会津への進発は留まる様に進言したが内府公は聞き入れない。そこで在国の長東大蔵を始め中村式部、生駒雅楽と相談して、各々の考えを整理して五ヶ条に認めて連判して関東下向は延期すべきとした。これを五月七日に家康公に提出したが全く聞入れず、先公（秀吉）の代にも島津や北条等召令に応じず上洛しなかつた為に征伐された例もあるので彼是云わず出軍すると決まった。

会津討伐の作戦が決定し、先仙道口からは佐竹義宣、信夫口から伊達政宗、米沢口からは最上出羽守義光、越後津川口からは加賀中納言利長、越後の堀久太郎秀治、同国村上周防守頼明、溝口伯耆守秀勝等が加賀勢に先行して進発する事になった。そこで白川口からは内府公と秀忠公父子が受持ち、那須七人衆、相馬、蒲生藤三郎以下の人々が先手として此口へ向かった。各軍が命令を守り一斉に攻込む事となった。大坂西の丸の留守居として佐野肥後守を配置した。家康公は六月十五日、本丸にて秀頼卿と母淀殿へ挨拶をして、翌十六日大坂を進発した。その時増田長盛、玄意法印を始め其外

秀頼卿の近臣達が見送りとして大手門迄出た。

其夕方(十六日)伏見へ到着し、本丸の留守居に鳥居彦右衛門元忠、松の丸に内藤弥次右衛門家長、三の丸に松平主殿頭家忠と松平五左衛門近正を配し夫々守る様に指示した。中一日逗留して十八日に伏見を出発した。

著者註 この後道中及び下野国小山に在陣中の事、其後上方の凶徒追討の手筈、又美濃国

岐阜城攻撃の様子及び九月十五日(p262)の関ヶ原一戦の次第等は関ヶ原記又は松平隼人正殿が書記した家忠記等に載っているので略す。これらの書に載っていない事とか日記とは違っている事を書記す。

会津進発が決まった時、石田三成は末木権太夫と云う者を使者として、今度上杉景勝退治の為進発される事を承りましたので私も是非人並に参加したいと云う願いがあつた。家康公は、気持は分かるが、其方は現在逼塞の立場であるので参加は控え、子息隼人正に人数を少々添えて参加するのが良いとの返答だつた。そこで石田家中の者は会津討伐参加と云い出陣準備を進めた。以前加賀の前田利長反逆の噂があつた時は、内府公から三成方へ柴田左近を派遣し用事の内容は不明だが、三成は大へん喜び使の柴田を接待して貴重な道具等も与えたと云う。今度は何故か内府公からは連絡なかつたところ、三成の方から使いを出した。これは会津参加の名目で軍備(謀反の)を遠慮なく行ふ為の謀計ではないかとその後噂された。

伏見城へ入つた十六日の夜、鳥居彦右衛門は本丸で勤番する供の人々に接待としてぼた餅と煎茶を用意した。夜に入り歩行困難のため座敷でも杖を付いて台所の方へ行くので、お供の人が、これは御城代とも思えぬ振舞いだと云うのを彦右衛門聞いて、ぼた餅嫌いの人は来るなど

答えた。余ほど沢山作つたと見え、翌朝大半切内に残っているぼた餅を夫々手に取り、(p263)懐中にしまい馬上で食べたと、その時お供した年若の坊主衆で生存している人が語つた。

今時では御供する人々にはもつと御馳走がある筈だが、時代柄と云い万事手軽だつた様だと桜井宗伝が浅野因幡守殿へ語つた。

この十七日の夜に入り鳥居元忠は用があり御前へ出た。用が終わつてから家康公は、今度当城の留守居人数が少なく苦勞をかけると云つた。元忠は、恐れながら私は思いません。今度の会津進発は大切な事ですから一騎一人でも人数多くお連れになるべきと考えます。随ひ弥次右衛門及び主殿もお供に加えられ、当城は私が本丸の留守を勤め、五左衛門が外曲輪の警固をすれば解決しますと申上げた。家康公は重ねて、今度四人の面々を留守居とする事さへ人が少ないと思うのに其方は人が多いと言ふのはどの様な理由かと尋ねた。元忠は、今度会津へ進発される留守居としては、世の中何もなければ私と五左衛門だけで用が足りません。もしご出発の後で異変があり当城が敵方に囲まれた場合は、近国に加勢を頼める味方は無く、今の人数の五倍や七倍の人数を残されても城を堅固に守る事は出来ない事です。それ故必要な人数を当城に残されるのは無益と私なぞは思いますと申上げた。

その後は特に議論もなく、昔家康公が駿府の宮ヶ崎に今川家への証人として奇遇しており、家康公が十一歳で始めて岡崎を訪問した時、元忠は十五歳だつた時の話(p264)などで夜も更けた。元忠は、明日は朝早くご出発です。夜も短いので御休み下さい、と立上る前に先程も申上げた様に、会津へご出発後の御留守中に上方筋に別条なければ又お目に懸かる事でしよう、万一の事があればこれが今生のお別れですと立上ろうとするが、長く座つていた為立てないので、児小姓を呼び手を引かせた。その時納戸役の者が御前へ出ようとしたが、

家康公は袖で泪を拭っていたので暫く出るのを控えた。

著者註 この事は土井大炊頭殿が常々雑談していた由で、大野知石が私（作者）に話した事を書留めた。この事から考えると、現在世の中に流布する記録では、伏見城で留守居四人の面々を呼んで、今度関東下向の後に石田とその仲間が反逆し、この城を攻めると思うので其方達を留守居として配置すると記しているのには同意できない。理由は上方逆徒蜂起の情報は、会津進発として江戸を出発した日の夜の越谷か次の夜の岩槻で、御供中誰一人知らない時に家康公は知ったが、小山の本陣到着後伏見の御留守居衆四人は皆若輩の頃注進を受ける迄は聞かなかつた立場だった。其上伏見御留守居衆四人は皆若輩の頃から所々の合戦場へお供して身命をかけて忠義を尽し戦功のある人々だから、留守を頼むとさへあれば外に彼是指示する必要もない。依てこれは知石の物語に随う。

伏見を出発したその日の昼時頃大津へ到着した。京極宰相（p265）高次の城に入り昼食を取りその後奥向で高次の内室と対面した。この人は秀忠公正室の姉であり家康公は前にも逢った。高次の妹松の丸殿（秀吉側室）には伏見城中では終に逢う事もなかつたが、今回当城で始めて面会した。表では高次の家臣黒田伊予、佐々加賀、多賀越中、瀧野図書、山田三右衛門、同大炊、赤尾伊豆、安養寺聞齋、今井掃部、岡村新兵衛等日頃から知己の人々を呼んで懇談した。其外にも頭役の人々に逢いたいと家康公の希望で、高次が指名して聞齋が連れてきた。その姓名が紹介される中に浅見藤兵衛と云う名を家康公は聞いて、賤ヶ岳の時の者かと問えば高次は、おっしゃる通り、前は柴田勝家方に居た者ですと答えた。彼の事は私も聞いている、全般に貴殿は人好きで良い家来を多くお持ちだ、これなら当家は特に頼もしいと云う言葉が京極家中の大小侍に伝えられ、後の籠城の時も勇気を励ましたそうだと中西伊賀守が常に

語っていたと中西与助が私（作者）に語った。

註 京極高次（1563 - 1609）近江源氏の名門、正室は浅井長政娘で淀、江（秀忠正室）と姉妹高次の妹松の丸は秀吉側室

其日大津で時間と掛けたので日暮になってから石部へ到着した。そこへ長東大蔵父子が参上して、明朝は水口の城で朝食を上がって下さいとの事で、そうしようと言う事になったが何故かその夜中に石部を出発し、水口の城へは大塚平右衛門を使いに出して、夜前の約束した明朝の立寄りには道中を急ぐので出来なくなつたと断つた。（p266）長東はその日の旅館土山迄後を追いかけて、お名残惜しいと挨拶に参上したので家康公は、遠い所来られ満足であると云い、来国光の刀を与えて帰した。

九―二 上方反徒蜂起と小山会議の開催

江戸城へ到着すると、その後から味方の諸大名方が続々参陣してきたので、二之丸で盛大な接待が行われた。その上で会津進発に関する軍律十五ヶ条が各々に言渡された。内府公は白川口より会津へ攻入る事になっており、秀忠公は先に出発して下野国宇都宮城に在陣しており、旗本の先陣としては結城三河守秀康公に先例が良いと言う事で榊原式部太輔康政を添えられた。康政は味方の諸勢に先んじて下野国那須へ部隊を率い、那須七人衆と相談して、上杉家の老臣安田上総介が立て籠もる白川城を最初に攻落す事になった。秀康公は水谷左京、山川民部、多賀谷左近等を始め、全部隊を榊原と同じく那須へ配置し、手廻り計にて結城に待機し、内府公が小山へ着陣され次第に出馬するとの事である。

佐竹修理大夫義宣は仙道口より会津へ進発する様に指令されていたが、上方逆徒蜂起の事件以後は、今度当家は出陣は取り止めたので戦の準備は不要と家中に触れて静かにしている由が江戸に聞こえてきたので、島田治兵衛を使者として出陣の催促をした。義宣の返答は、今迄は会津進発の積もりで準備をして内府公の南向を待つて (p267) いましたが上方筋騒動の事を聞き、御存知の通り大坂に妻子等を置いて居るので、今少し事の推移を見極めます。勿論貴殿へ敵対する事は、縦令輝元や秀家が何を云って来ても同調しませんので、その点はご心配いりません。との事である。確かにその言に違わず、家中の侍が持つ良馬等も売り払っている情報を治兵衛は確認して帰った。しかし秀忠公の下へ派遣された結城軍の中で水谷左京と上州衆の皆川山城守両人は水戸口の押へを指令されているので鍋掛に在陣していた。

其頃佐竹義宣と結城晴朝から申上げ、昨年御預けになった土方勘兵衛と大野修理をお許しになり今度の会津出陣に加えて頂く様にと願いが出たので両人共則許された。土方は分からぬが、大野は侍分の者八十人計もあるが小者中間が居なくて困っていた。そこで浅野弾正に大野修理が頼んだところ、武蔵府中村の者十人計りが早速派遣された。結城晴朝よりは鞍置馬一疋、馬具各種を添えて送ってくれ、三河守秀康公からは結構な具足一領と其外武器等も送られたので、配流前の身分と夫ほど替わらない様になったと米村権右衛門が語った。

七月廿一日、内府公は江戸城を出発し其日越谷に宿泊、廿二日岩槻、廿三日古河到着の夜になると誰もが上方方面の異変の噂を聞いたが、正式には何の発表もなかった。廿四日家康公が小山に着陣すると、秀忠公からの待請として宇都宮から本多佐渡守が派遣されており、秀康公は結城より (p268) 小山へ出て本陣で待機した。其日は池鯉鮒の宿場で堀尾帯刀、水野和泉、加賀野井弥八郎の三人が喧嘩をした様子も広く流布していた。

其日の暮方に至り伏見の城代鳥居彦右衛門からの飛脚が到着した。その風体は小者か中間の様子で書状箱も持たず本陣へ来て、本多上野介殿へ御目に掛りたいと云う。歩行目付衆が対応して、其方は鳥居殿方でどんな奉公をしている者か、書状も持たず上野介殿へ直接口上するとは理解しがたい。大体どんな用事で来たのかと尋ねれば飛脚は考えて、拙者姓名は上野介殿は御存知だが、お尋ねの上は名乗りましょう。私は浜嶋無手右衛門と云う者で鳥居彦右衛門方で一騎役を勤める者ですが少し事情があつてこの様な格好をしています。彦右衛門から云われた事は皆さん等と言う事が出来ませんと言う。その事を上野介殿へ報告したところ、無手右衛門を閑所へ呼寄せ暫く対面し、其後家康公の前で本多佐渡守・上野介父子のみ立会い無手右衛門の口上を直に聞いた。色々尋ねられ、用が済むと無手右衛門は彦右衛門の居城である下総国矢作へ向かった。その夜十時頃内藤弥次衛門からの飛脚使者も到着し、これも又上野介が面会して御前で披露した。用が済んだ後は弥次右衛門居城の上総国佐貫へ向かった。

伏見留守居兩人からの注進で上方の逆徒蜂起が明確になり、其夜中本多上野介を宇都宮へ夜通しの使に送った。用件はこの時は分からなかったが後日に明らかになった (p269) 事は、上方騒動が起こったので秀忠公は勿論先手を担う面々を急用で召集するが、御機嫌伺い等で小山へ参陣は堅く禁じる事だった。結城秀康公は昼間は小山の本陣に詰めていたが翌廿五日那須へ出発するので、その夜は結城へ帰っていた。しかし本多佐渡守に指示して急遽呼戻し夜中に小山へ戻ったところ、伏見からの注進の内容を家康公が説明した。そこで家康公は会津進発を中止して先ず上方へ軍勢を向けるか、又はやりかけでもあるので上杉を片付けて後上方へ軍を向けるべきか、二つのどちらが良いと貴殿は思ふかと尋ねた。秀康公はお考えの程は分かりませんが、私は一時も早く上方へ軍勢を向けるのが良いと思います。但し上杉は

単独とは云いながら手強い敵ですから、確実な押さえの部隊を残して置くのが良いと思いますとあり、これは家康公の考えとも一致した。早々結城へ戻り休息し明朝参陣する様にとの事で秀康公は結城に帰り、翌朝那須への出発は延期となった。

本多上野介は宇都宮へ使者として行く時、供廻り二十人程連れていたが、往復とも馬の側を離れずに職務を全うしたのは歩行士一人、鎧持一人、馬の口取一人の三人だけだった。

廿四日の夜に小山を出て宇都宮で暫く打合せ、直ぐに取って返し廿五日の早朝に小山に帰り秀忠公からの返答の趣旨を報告したところ、道中を急いだと見え早く帰ったと感賞された。又元氣な三人の供廻りの中で歩行士は知行百石の侍に取立てられ、鎧持と口取は従士に (p270) に昇格した。その時上野介が乗った馬は芦野鹿毛と云ったが、秀忠公が聞き是非と所望あったので献上した。これは五十幡谷泉の話である。

註 小山と宇都宮間約二五km程を五―六時間で往復した事になるので時速八―十kmか。
結城と小山間は約十km程度

廿五日には今度の会津進発の為に内府公に随って関東へ下った諸大名方を小山の本陣に呼集めた。井伊兵部少輔直政と本多中務忠勝の両人が家康公に代わり、昨晩到着した伏見城に残した留守居兩人からの注進を細かく発表した。そして皆さんは大坂に妻子を置かれてある方もあり、たいへん御心配と思います。この戦線を引払って帰られる事は自由です。又当家領分を通過の際は、旅宿、人馬等は少しも問題ない様に指示しますで、その点は心配御無用です。又今後上方衆と歩調を揃えるとしても、毛頭遺恨は残しませんのでその旨御承知下さいと内府が申しておりますと兩人が述べた。

その時参加列座の中から福島左衛門太夫政則が進み出て、内府公が云われる通り私達は妻子を大坂に残しているが、この様な時に妻子等の事を気にしても仕方がない。他人はとも角この政則は身を擲って内府卿に味方しますと発言あった。それに続き黒田長政、浅野幸長、細川忠興、加藤嘉明、池田輝政の五人は勿論、其外一座の人々は皆一同に味方すると述べた。そこで井伊、本多の兩人は皆に向かって、皆様の言われる通りを聞けば内府は大慶に思う事でしょう、私共も憚りながら皆様の頼もしいお言葉を聞き忝き次第です、と座を立って家康公に報告した。程なく家康公は表へ出て、皆に向かい礼を述べてから岡江雪を呼び、もう時間だから皆さんに料理をと指示して、座を立ち (p271) 有馬法印、徳永法印、山岡道阿弥此三人を座前へ呼び使を頼んだ。

それは列座の大名衆は大坂に残している妻子方の事に関わらず、一筋に当家へ味方されるとの事で厚く恩義を感じます。それについて会津の処置を終わってから上方へ進発するのが良いか、又は景勝の退治は暫く中止し、先ず上方の凶徒の追討を急ぐのが良いのか、今日参会の各位に評議してもらい、皆の相談の結果に随うと云う事にする。そこで三法印が座中へ出る時井伊兵部と本多中務も添える様にとの事である。

三法印と兵部、中務が座中に出て内府公の考えを述べると、福島政則を始め六人の大名衆は勿論、其外の人々も一同に会津の事は中止し一刻も早く上方へ出陣するのが良いとの意見で上方出陣が決定した。

岡江雪の座敷手配で料理、酒が出てきた時福島政則は、今日は特別な日だから皆さんも精を出して飲みましょう私も先ず一杯と大盃で吞始めたから、たいへんな量の酒である。中でも政則は数盃飲んで上機嫌で黒田長政の膝を叩き、いつも言っている通り石田と小西兩人の首

を切つて又一盃と大口を叩いて酒が終わらない。内府は膳が終わってから表座敷に出る予定だが中々膳が終わらない。漸く有馬法印と徳永寿昌が相談して膳を皆に取らせた。間もなく内府公が出座し、上方に近い領分の面々は何時でも当所を引払い一刻も早く帰城される(p272)されるのが良い。私父子も早々後から出陣しますが、井伊兵部と本多中務が皆さんと一緒に先に出発します。清須と吉田の両城は敵地に近いので、福島左衛門太夫殿と池田三左衛門殿が先陣を取られる様にと事だった。

著者註 この事は関ヶ原記等にも記されているが少々相違がある。私はここに書留めたのは小山で徳永法印が当日座に参加して、本陣より帰り徳永掃部、稲葉外記と云う両家老を呼出し語った事を河村所右衛門と云う者が聞いて覚書にしたものである。

註1 福島政則(左衛門太夫 1561 - 1624) この時は尾張国清須城主二四万石

註2 池田輝政(三左衛門 1564 - 1613) この時は三河吉田城主十五万石

小山で在陣の諸大名との会合が終わった後家康公は結城秀康公を呼び、本多佐渡守一人を側に置いて曰く、会津進発は暫く中止となり近い内に上方へ進発する事になった。そこで上杉の押さえとして残すのは貴殿より外にはないので、その様に心得られよとの事である。秀康公は佐渡守の方に向かって、これは思いも掛けない事を言われ困りました。今度上方での一戦は重要ですから、味方の諸大名衆と相談して先手で軍忠を励む覚悟でいたのですが上杉家の押へとして留守をせよとの仰は、縦令御機嫌を損なつても御断りしたいと告げた。内府公は、一般に今度の様な重要な合戦を計画して他国に進発する場合、留守居の将を選び残すのは昔からの軍事の常識である。其上今度私に味方する諸大名方から今後証人等も出す事になれば、その人質を請取って江戸又は小田原の両城の中に置く事になる(p273)その場合皆が安心する為には信頼できる留守居でなければならぬので貴殿に頼むぞと言う

秀康公は再度申上げたのは、諸人安心の為の信頼できる留守居を置かれると云うお考えなら幸いに松平下野守(忠吉)が居りますの彼をその役に任じられ、私は上方へお供させて下さいと云えば、内府公はかなり機嫌を損じ、皆が安心と言うだけなら其方が云う様に下野守でも用は足りるが、私が出陣した後で何か異変がないとも限らず、又上杉景勝が私の留守を見て大軍を率いて攻めて来るかも知れぬ時若輩の下野守で大丈夫と思ふか。昨夜其方は佐渡守も聞いていたが、今度上方へ進発する時、会津の上杉は手強い相手だから強固な押さえを置くのが良いと云ったではないか、その手強い景勝を押さえるのを嫌われるかと。

これには秀康公も困って、今度上方の一戦の計画に参加出来ないのは残念ですが、今のお言葉に対し、これ以上申上げる事ありませんのでご指示に随います。私が斯く云う以上は後は御安心下さい。白川の関より此方へ景勝等を進出させる事はありませんと言切つたこれを聞いて佐渡守は秀康公の側へ這いよつて膝を叩いて、よくも殿は言われたと涙を流して泣いた。内府公も涙ぐみ納戸係を呼んで具足一領を持参させ、この具足は私が若い頃から度々戦場へ着て行ったが、一度も敵に不覚を取った事が無い秘蔵の具足である。今度大切の留守を頼むので其方へ譲ると云い秀康公へ与えた。(p274)

著者註 この事は旧記等にも概略は記してあるが詳しくない。私がここに書記したのは本多

佐渡守が土井大炊頭殿へ語った由を、度々大炊頭殿が守田与左衛門や大野仁兵衛等へ雑談したとの事で大知石が語るのを書留めた。

註 結城秀康(1574 - 1607) 家康次男、秀吉養子を経て結城家を継ぐ。松平下野守(忠吉 1580 - 1607) 家康四男、松平家養子でこの時忍城主、二十歳。何れも1607年病死

小山在陣の時、加賀中納言利長は使者を派遣して、私は会津へ出陣する覚悟でしたが安芸中納言(毛利輝元)や備前中納言(浮田秀家)、その外大坂の奉行の面々から色々云って来ました。しかし同意はしませんでした。益々強硬になり反逆の企てを起こし上方は騒動となっておりしますので会津出陣は暫く見合わせます。小松の丹羽大聖寺の山口は逆徒一味の由なので確認し、幸い近所ですから弟の能登守と共に両城を攻めて早速落とす、それから越前に攻入る予定です。貴方でもその心積もりで近々上方へ出陣されるのが良いでしょうと報告があった。家康公からも、此方も上方の逆徒の事は聞いていますので、景勝退治は暫く中止して今度関東へ参陣あつた面々と相談して近々上方へ進発する予定です。その時は何分にも宜しく頼みます。幸い土方勘兵衛と当地で会い、彼に委細頼みましたので御相談下さいとの事で使者に勘兵衛を加賀に同道させました。

著者註 土方は前田利長、利政の従兄弟であり、利長の家老太田但馬と云う者の兄と言う事を家康公が聞き、委細を含めて加賀へ行かせた。

其頃伊達政宗、最上義光、越後衆では堀久太郎、村上周防、溝口伯耆等へ向けて、今度上方の逆徒退治のため軍勢を向けるので(FCG) 会津進発は暫く延期する。各位もその心得で今後も景勝の行動は監視する事が肝要と伝えた。

小山に上方騒動の知らせがあつた頃、山内対馬守は本陣へ参上して本多上野介を通して、今度大坂に置いた妻が配下の侍を下人に仕立て私に使いとして送り、書状を切裂いてその断片を笠の緒にひねりこみ道中の関所改めで書状が露見しない様にしていましたが、案の定関所で

細かく調べられました。菅笠には番人も気付かず無事に到着しました、とこの笠の緒を持参したので、上野介がその笠の緒を持出してその事を申上げると、すぐ対馬守を召して笠の緒を取り、其方の内室は女性ながら近來稀に立派な志であると、又書中を見ずに其の俣で差上げた事も満足であると披見した。内容は是までの情報と同じであり、則対馬守に返した。

これより少し前、本陣で上方進発の評議の時対馬守は申上げた事は、今度上方での一戦は間違いなく大合戦になると考えられますので、侍や足軽の一騎一人も多く連れて行きたいので私の掛川の居城は差上げます。御家中から城番を出して頂ければ、城番に残す予定の家来迄残らず連れて出陣できますからお願いますとの事である。それは良い提案だと云う事で対馬守の願いを認めた。其外の道筋の城は掛川同様となり、徳川家譜代大名の少身に居城を明渡したので、当家在番の城の様になり、駿河、遠江、三河、美濃、尾張迄手に入(FCG) ったも同じとなった。

この二つの功績で天下統一後、対馬守は遠州掛川六万石の領知だったが土佐一国の守護に任命された。

著者註 この対馬守が土佐国を拝領した後入国して、暫く在国後参上し二条城で月見の時

内府公が土佐国の年貢の状況を尋ね、それに答えようとした時本多佐渡守が並んでいたが対馬守の尻を突いたので気が付き、廿万石内外かと思えますと申上げた。

すると、多分その程度はある筈である、以前に長曾我部が太閤を招待した時、家の作り、その外全てが十万石取りの振舞いとは思えず、廿万石以上の身上で無ければできないと思いが噂していた。そこで今度美作の国も明けてあつたが、土佐の方が美作より多いと思ひ其方に与えたとの事なので、若しも十万石内外などと云つたらたいへんな事になると思つた

と、本多佐渡守が子息上野介へ内々に雑談したという五十幡谷泉物語を書留めた。

信州上田の城主真田安房守は内府公の傘下に加わり、会津に進発する予定で子息伊豆守と共に下野国佐野に着陣し、安房守は天明に伊豆守は犬伏に陣を構えたところ、石田治部少輔からの飛脚書状が来て、今度秀頼公の味方となれば信州一国の守護職間違いなしと告げた。そこで息男伊豆守を呼寄せて相談(p271)したが、伊豆守は全く同意せず逆に父を諫めた。安房守は非常に不興を催し、私は年寄だから立身栄達の望は毛頭ないが、第一は海野の家の再興のためを思い、次に其方並びに左衛門佐等を世に出したい為だけである。其方は内府家来の本多中務と縁戚だからと言って、当家を興すのも親の命をも省みず内府のためを第一とするとは不屈この上ない事である。と立腹甚だしいので伊豆守は、仰の通り私はこのところ内府と懇意にしておるため一旦は思いを申述べましたが、是非上方に味方するとお考えならばそのお心に随う外はありませんと答えた。安房守はたいへん喜び、其方が同意すれば相談して秀頼卿に忠節を尽す様な行動を考えるのがよいと言った。伊豆守は成るほど分かりましたと座を立ち勝手へ出て直に馬に乗って犬伏の陣所へ帰った。その後で安房守が家来を呼んで、伊豆守はと尋ねれば、先ほど勝手へ出てその俣犬伏へ帰られましたと云う。

97

安房守大へん驚いて、次男左衛門佐並びに家老達を呼集め暫く相談していたが急に支度をして夜中に佐野を引払い上田の城へ引返した。その時伊豆守は犬伏の陣所へ帰ると家人を召寄せ私は房州公(安房守昌幸)の顔を潰す事をした、万一討手などが差向けられ事もあるので天明に人を張付け、軍勢が押してきたら早々当陣を引払って逃げるつもりで居る様にと言渡した。しかし安房守も左衛門佐と共に急に陣を引払ったと注進があったので、伊豆守は其俣犬伏に留まり、小山の本多中務方へ使者に書状を持たせ、親安房守に石田方より書状の送付があり、

上方の逆徒蜂起は事実である旨注進した。内府公たいへん喜び則伊豆守へ書状を送った。

著者註 この件は旧記等にも概要は書記してあるが細かくない。其上安房守、伊豆守父子共に

宇都宮辺に陣取した所へ石田より飛脚が到来したとあるが、そうでは無いとの事である
私が書留めたのは稲垣与左衛門と云う老人が真田左衛門佐方に居り、大坂城にも籠って
夏陣の時少し負傷したが存命であり、その者の語った事である。

註 真田信之(伊豆守 1566 - 1658) 本多中務忠勝の娘婿で沼田城主、後初代上田藩主

内府公が江戸へ帰城しようとする時、秀忠公は榊原式部太輔を連れて宇都宮から小山を訪れ結構長く打合せを行い、その夜は結城に宿泊して翌朝宇都宮へ帰った。宇都宮で城の外回りの工事を指示すると共に蒲生家の家老を呼んで、今度父子共に上方へ進発するので留守中は全般を結城秀康公へ任せるので、何時でも秀康公がこの辺の村を廻る時は当城本丸に逗留して戴く様にとの事である。その時の秀康公の威勢は秀忠公と同じ位であったという。この事は旧記には見えないが、その時蒲生家に仕えていた結解勘介が浅野因幡守殿へ語った事を書留めた。

98

秀忠公が宇都宮を出発した後、結城より秀康公が宇都宮へ逗留し、芦野、太田原辺を巡回した。その時上杉景勝も領分順見のため会津を出て、白川の城に逗留している事が宇都宮へ聞こえた。秀康公より白(p279)川へ使者を送り口上は、この間は会津へ出陣の事は御聞きでしょう、内府父子は上方の逆徒等誅伐のため出陣したので、私は留守を預り残っているのが当然ながら退屈しています。そこで貴殿が白川辺迄来られたと聞いたので、幸いに此方に出陣されませんか、その場合当方もこの城から出陣し下野の野間で一戦を遂げましょうと伝えた。景勝の返答は、今度内府御父子が上方へ出陣され、貴殿が留守居で残られ退屈にお過ごしこの事承知しました。私も諸方の寄手が引揚てしまったので相手が無くなり手も透いています。縦令貴殿から申込

まれずとも出陣したいところですが、亡父謙信より人の留守を狙って攻める様な事は決してやつてはならぬと家法にも定められており、私の思う様に行かず残念な事ですと口上が有った。

著者註

この事は旧記等の中にも見られず、越前家の言伝えにもないが、敵方の上杉家では良く知られていたと、景勝方に居た石坂与五郎と云う者が浪人して散々に零落れ、石坂与斎と名乗り紙子一重の貧乏をしたが、畠山下総守殿の世話で浅野因幡守殿に三百石取りの浪人として抱えられた。以後暇を取り阿部豊後守殿に六百石で召し出された。この与斎が因幡守殿へ語った事を書留めた覚書の中に秀康公の口上、景勝の返答の様子が書かれているので載せた。

内府公は八月五日小山の陣所引払いを通告したが(p280)、その時洪水で栗橋の船橋が切れて流れた。掛直しをすべきか代官衆から伺ったところ、栗橋の船橋は会津進発の為の後方部隊が往来するために掛けさせた物だから、上方へ進発する以上は不要故、掛直す必要ないと云う事で乙女川岸より船で西葛西へ着岸して江戸城へ入った。秀忠公の御供で中山道を上る部隊は宇都宮近辺に其俣在陣した。

上記の様に江戸へ帰城後、近日中に上方へ進発があるので御供の面々は支度をする様にと有り、皆用意して待ったが九月朔日迄出発は延びた。

著者註

この事に付いて私が若い頃、米村権右衛門が江戸詰の当番で詰めて居た時、養父の所へ夜話に来て小木曾太兵衛を呼出し尋ねた事は、以前の関ヶ原戦の時、私は主人修理の共をして小山から上り、尾張国清須城下の寺を借宿としていた。関東から先発で上った諸大名衆及び其外の諸軍勢共に内府様の着陣を今か今かと待ったが、江戸出発の日時

も分からない。内府様は毎度鷹狩に出かけられたとか、又城内で能等ゆつくり見物とか皆退屈して色々噂していた。その時の江戸の様子など話して欲しいとの事だった。

小木曾が米村へ話した事は、小山より江戸へ入られると其俣出発されるものと、皆が思っていました但实际上には廿日余りも出陣は延びました。しかしその間に鷹狩りなどには一度もお出かけで(p281)は無かったので、全て清須辺での雑説と云うものでしょう。私共は頭から云われて何時でも急に出陣となるかも知れないので、お城番に当たった時は番所から直に御供できる支度として、草鞋や路銭など迄腰に付けて勤務しておりました。其上二日か三日毎に頭の宅へ呼付けられ、御供の心掛けなど手落ちが無い様聞かされ、これは頭同志が皆相談して行ったと聞いております。御城でも玄関前扉の門の内に鑓立のため柵木が出来て虎の皮の長柄鑓を飾り並べ、書院の床上には御馬印も並べてありました。今直ぐに出陣かと思われる様子でしたが、九月朔日の出発と触れられたのは八月廿七八日頃だったと思います。日時が発表された時侍衆は勿論、私共の様な軽輩の者迄たいへん喜び勇んで御供したものですと、小木曾が米村に語るのを側で私は聞いた。

註

作者の大道寺友山は1633年生れて三歳の頃父を失い、養父は浅野因幡守の江戸屋敷家来の様である。関ヶ原戦時(1600年)に小木曾は廿歳と仮定すると友山が十五歳の頃は小木曾は六八歳の老人。友山の他書でも小木曾太兵衛による江戸初期の話は所々に引用される。

家康公の出陣前、増上寺の方丈である存応和尚が登城して話の中で申上げた事は、今度上方における一戦はたいへん重要なものと云われております。勿論ご勝利されると思いますが、大事に臨み仏神の加護を祈る事は古今より日本の習慣でもあります。御領分の中の有力な神社仏閣で御祈祷等を執り行われるのが良いと思いますとあれば内府公は、それは良い事です、私の領内

の寺社の中では何処の寺社が良いだろうかと尋ねた。存応は、先ず鎌倉の若宮八幡等が (p282) 良いのではないでしようかと答えると内府公は、八幡宮には私は若い頃から朝夕念願しているので今度に限って祈禱を行う必要はない。幸い武社では神なら鹿島神宮、仏なら私の祈禱所でもある浅草の観音で祈禱しようと言う事になった。そこで鹿島大宮司、浅草寺別当観音院の兩人へ祈禱を頼み、右大将源頼朝が平家を追討する時両所で祈禱した旧例に倣い祈禱を執行した。

著者註 この鹿島、浅草寺両所での祈禱は九月朔日出陣の後十七日に満すとの事で、大宮司と

浅草寺は打合せて名代の使僧を立て、十七日の祈禱に添える御札守などを差上る

ため、両所の使者が道中を急ぎ同十四日の晩方に岡山の陣所近く迄来た。本陣へ持参

しようと支度をしたが、大垣の城へ軍勢を出して中村、有馬の両部隊が一戦すると云うので

明朝参上しようと相談したが、明十五日は早朝よりの合戦があり控えていた。其日の夜

藤川の陣所へ参上して御札守を差上げたところ家康公はたいへん喜んだ。兩人は早々帰り

合戦勝利の事を伝えた。もう恐敵退散の祈禱は止めて、天下安全の祈禱を行った。

九一四 大谷吉継の義理と友情

越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉継は会津進発のため軍勢を揃えて敦賀を出発し、木の本に着陣して石田光成方へ飛脚便を送り、前から度々云った様に今度の会津進発に子息の隼人正を名代として行かせる様にと内府卿から云われているが、父子同道で行かれたら良い。私が同道する以上内府卿への取り成しは何とか (p283) すると伝えた。

三成は事前に家来の柏原彦右衛門と云う者を使いに出していたが、大谷の宿陣木の本へ来て、今度会津進発として出陣される時は佐和山の城へ立寄って頂きたい、面談したい事がある

との事である。大谷は病身なので紙帳を釣らせてその中に柏原を呼寄せ、私に佐和山の城へ寄れ云われる事は理解しがたい。今は会津進発の外に用事も無い筈である、其方は外の者とは違い大体の事は知っていると思うので話して欲しい。それは貴殿主人三成のためでもあると云ったが柏原は、それが私共も聞かされていないので知りようもありませんが、何か会津進発以外で御相談したい事が有るので是非御立寄戴く様にと私を使いに出したのですと云う。

それ程迄云われるならと大谷は佐和山の城へ立寄ったが、石田は大へん喜び大谷を閑所へ誘って今度の構想を一つ一つ説明した。大谷はそれを聞いて、それはとんでもない考え違いです、江戸の内府等を常人と思われるか。この事は私が云うまでもなく貴殿も良く御存知の筈です。それは故太閤が常々我々に言われた事です、家康は智勇共に備わった人であり、私のよき相談相手と思ひ接待するのであり、誰もが分かるものでもないと毎度言われた事である。それなのにその内府を相手に戦を仕掛けるとは無謀である。無益な事は止めて私と一緒に会津進発する以外無いと制止したが三成は、貴殿の意見通り思い留まりたいが、もう戻れない。その訳は上杉景勝家老の直江山城守と堅く約束し、この春より主人景勝に進め旗を揚させた。その (p284) 結果、内府父子を始め諸軍勢が景勝退治で会津進発する中で、夫までの約束を違えて景勝一人を謀反人として見殺しては武士の面目が成り立たない。合戦の勝負はどうであれ今に至り思い留まる事は決して出来ないのです、貴殿が同意されぬ事は止むを得ない事ですから関東に参加されて良いと云う。

その時大谷は、貴殿自身に一大事を語らせて夫を聞捨にして私だけ関東へ行く訳に行かない。その上是まで約束した事もあり、私の身命は貴方に預けるしか無い。それに上杉家老の直江等にさえ相談した事を私の方に今日まで相談なかった事は不満に思うが其事は今更云い

ますまい。この様な大きな事を実行する以上、貴殿に申入れたい事が二つありますと云う。三成はそれこそ知りたい事です、どんな事でも聞かせて欲しいと云うので大谷が語るには全体に貴殿は人々に対して時と場合、作法全てに傲慢であると云う事で諸大名を始め末々の者から悪い評判を得ています。江戸の内府などは家柄、官位、其上国内最大の本身ですが、諸大名は勿論、少身や軽輩に逢つても丁寧に対応し、夫々言葉を掛け親しみがあるので人々の尊敬も特別に見えます。人々の上に立つて事を行うには下の協力が無くしては成功は難しいでしょう。貴殿も以前は一介の少身者でしたが、故太閤の御取立により大身になった事は皆知っている事です。公儀の御威光があるから尊敬されている様に見えるが人々の本心はそうでは無い事をよくよく知って置く事です。今度の事も毛利輝元と浮田秀家兩人を上を立て、貴殿はその下で (p285) 事を進める心得が必要と納得される事です。

外一つ云いたい事がありますが、これはいかに親しい間柄でも云い難い事で遠慮しますと大谷は言う。光成は、中々人が云い難い事を言い聞かしてこそ親友ではないか、少しも遠慮せずに聞かせて欲しいと云うので大谷は続け、先程も云った通り武家に大切な事は智勇の二ツです。貴殿の智恵才覚に付いては並ぶ人も無い位ですが、勇気は不足しているかと思いません。最近の例で云えば、今度の大事に関して輝元、秀家を始め其外一味の諸大名と云つても皆便乗組であり、根源は貴殿一人の構想から起こった事です。人より先に身命を擲つ覚悟が無ければなりません。幸いに貴殿は他人の力を借りなくとも一万の軍勢を持つのですから水口の長束等と打合せ、内府が関東へ向かう途中石部に旅宿している時、夜中に押掛けて焼討をすれば間違いなく勝利を得た筈です。そんな大切な機会を見送り内府を容易に関東へ行かせた事は、虎を千里の野原に放したも同じで大失敗と云うものです。今後も四本柱の礎石を埋める様な安定ばかり考え、確実な勝ちだけを好む様では宜しくないと、

大谷に意見され三成は大いに赤面しながら、良く言つて呉れたと述べた。以後大谷は関東へ行くのを止め大坂へ上った。以後大谷は関東へ

著者註 この事は旧記等には見えないが、大谷の親類である早水拙斎が語るのを載せた。

九一五 上方反徒大坂に集結 (p286)

内府公は大坂を出発して関東へ向かい、味方の諸大名衆も後から追々出発した。その頃三成は長束大蔵と打合せて共に大坂へ向かい、前から連絡を取っていた反徒の面々、毛利輝元、浮田秀家、筑前中納言 (小早川秀秋)、島津兵庫 (義弘)、同中務 (豊久)、小西撰津守 (行長)、立花飛騨、長曾我部宮内少輔、鍋島信濃、毛利豊前、安国寺等を始めとして、其外少身の面々が夫々の国元では会津進発の名目で軍勢を調べて、様子を見ながら大坂に寄集り反逆の色を明確にした。其頃反徒の諸将は輝元宅で会合すべきところ、皆浮田秀家の屋形に寄合い全てを相談したので、今度の総大将は秀家一人の様に言われていた。

或日の会合の席で西の丸を取返そうと決まった。西の丸の留守居佐野肥後方へ使者を立て、その御殿は公儀で使う事になったので早々明渡す様にと急に催促をした。肥後守も口惜しいと思つたが、自身は西の丸だけに居たので反逆等の世間の様子も知らず、仕方なく預かつていた女中達を連れて城を出た。その後今回の陰謀が分かり、こんな事なら奉行からの使者を切つて御殿に火を掛け自身は切腹するのだったと後悔したが手遅れである。止むを得ず女中達の身の振方を見極め、その後伏見の城を攻めると聞いたのでせめて申訳の為にもと伏見へ向かった。

其頃反徒側の諸将が毛利輝元の宅で協議していた時三成が云つたのは、数万の諸軍勢がこの様

に大坂に集り空しく日を送るのは無駄です。当地（大坂）には輝元に増田右衛門尉を添えて残る事で十分です。輝元の御息男宰相殿を主将として吉川以下の家来を伊勢に向けて内府側の城を攻め抜き、それ（p287）から直接美濃と尾張の間へ出陣されるのが良いでしょう。私は浮田中納言殿と打合せて直接に美濃と尾張の国中へ出て、内府側の面々の居城を攻め取って自軍を籠らせ、内府が上方へ出て来れば宜しき場所待構えて一戦を遂げます。もし攻めて来ぬなら江戸への道筋にある内府側の城を片端から攻め取り、次第に江戸迄攻め入りますと、手に取る様に講じれば輝元、秀家を始め誰もがそれが良いと同意した。三成は重ねて、今回出陣の諸軍勢の通り道でもあるので、山城の伏見城を攻めて内府が留守居として置いた鳥居以下の者を全て攻殺して御城を取返す事にしたい。その時の寄手軍勢に加わりたいが、私の居城である佐和山は敵地の境にもあるので、色々準備をする為に帰城します。私の代理として高野越中と大山伯耆兩人に二千余の部隊を添えて残しますので、どのようにも使って下さいと云残して自身は佐和山に向かった。

註 毛利秀元（1579-1630）輝元の従兄弟で養子となる、安芸宰相

三成は佐和山へ帰る途中、大津の城主京極宰相高次方へ面会を申し込み立寄った。この時小雨が降っていたので三成は羅紗の合羽を着て蓑笠を被り、大手の門外に家来達を暫く残し上田源藏と云う剛力の侍只一人を連れて城内へ入った。高次は三の丸の客屋へ出向き、本丸へ案内するべきですが、この節道中お急ぎと思いましたが是へ出て来ましたと挨拶した。三成は何時もと違つて慇懃な様子で高次に向かい、秀頼様御治世の時節が到来して貴殿は喜んで居られると察します。先日は関東の一味の様な噂が出て、家来筋の私としてはお気の毒な事と思つていましたが早速証人等も出され全て収まり（p288）、私事の様に喜んでいきます。今後も益々忠節を尽される事が肝要です。公辺の事は私にお任せ置き下さい等と云う。

高次が先頃大坂方の呼びかけに不参の時三成一人が不満を云い、他の人の見せしめの為にも早速軍勢を向けて高次に腹を切らせよう云つたが、大谷刑部少輔がそれを制止した事など前に聞いていた。さても不屈きな奴と高次は思つたが何気ない様子で相手した。この時京極家譜代の侍安養寺三郎右衛門入道聞齋と云う者が家老の黒田伊予を閑所へ誘つて云つた事は、今度の逆徒頭目の石田が今日当城に来たのは天の与えたものです。三成を生捕つて城門を塞ぎ閑東側である事を明確にされるのは今ですと言葉を尽して説得した。しかし黒田は同意せず門齋は其外の家老山田三左衛門、多賀越中、赤尾伊豆等と呼んで相談している内に、三成は高次との対談を終り帰つてしまい安養寺の計略は空振りに終わった。黒田伊予は京極家の長臣だったが、後に高次が若狭の国を拝領した時京極家を去り筑紫へ行きそこで病死したと言う。

註 石田三成の家は近江の土豪で、京極家が近江の守護だった頃代々京極家に仕えた。

九一六 敵地に孤立した伏見城

其頃大坂城西の丸に反徒の諸将が集り伏見の城を攻抜こうと相談した。その時増田長盛は、伏見の城は故太閤の御隠居所として日本国中から人夫を寄せ集めて堅固に作つたものであり兵糧、矢玉、武器等に至る迄十分備わっており、其上留守居の四人は城代の鳥居を始め皆内府の若い頃から仕えている武勇に勝れた者達です。第一は近くに内府側の城も無いので侍は言うまでもなく下々雑人に（p289）至る迄逃げることが出来ず、各々が必死の覚悟を決めて防ぐでしょうから簡単には落城しないと思います。そこで私に案があります、幸い城代の鳥居とは長年の付き合いもありますから使者を送り意見をして城を明渡しを交渉して見ますと言う。

一座の面々もそれが良いと云う事になった。

長盛は家来の山川半平と云う者に詳細を言含めて伏見へ行かせたところ、鳥居彦右衛門は山川を本丸へ呼入れて面会した。この時山川は主人の右衛門尉（長盛）から密かに云われた事として今度毛利輝元、浮田秀家、上杉景勝の三大老と内府卿の争いに付いて、筑前中納言秀秋を始め島津、鍋島、小西等の大名衆や其外九州、中国の諸大名は全て三大老と打合せ、大軍を動かし近く関東へ進発する際に最初に此方へ押寄せて御城を受取ると云う評議になっています。右衛門尉は以前より内府卿と懇意にしており、其上秀頼公御幼年の時節この様な騒動はあつてはならないと思つていますが、長盛の考えだけではどうにもならず心外に思つています。

この件で私から申上げます、元来伏見の御城は故太閤御隠居所として築かれたものですが、秀頼公が大坂城に移られた為内府卿御預かりの様になりました。今度会津御進発に付いて皆さんを当分の御留守居とされました。元来内府卿御持の城ではありませぬので公儀へ明渡されたとしても御留守居衆の落度には成らない筈のものです。其上世の中がこの様な状況ですから皆さんが内府卿へ御忠節を尽される場面は今後幾らでもあると思ひますので、ご考慮戴き無事明渡しをお願いします。御同意戴けるなら私を始め家老達の子供数人を証人として伊勢国の渡海される地点迄（p290）見送らせて戴く旨よくよくお伝えする様にと長盛から云われております。

その時彦右衛門は半平に向かつて直ぐに返答しますと云つた事は、先ずご口上の趣旨は承知しました。色々御氣遣い忝い次第です。云われる通り当城は公儀の城である事が私の様な者でも承知しております。しかし内府が関東へ下る時、留守の間当城を堅く守る様にと預けられたものです。今でも内府方より明渡す様にとあれば別ですが、大坂方から内意で明渡す

様にとあつても決して渡せませんから御自由に軍勢を向けて戴き結構です。城中は小勢ですが厳しく防いでみせます。又右衛門尉殿からの御口上では内府を今でも粗略にせず、私も昔から良く知つているから内意を伝えるのだと云う事は全く理解できません。理由は本当に内府のためとお考えなら、万一私が当城を明けて退く事を申入れたら、城を枕にするのが良いと云う内意等を云われるべき所を、早々明渡して立退く様にとの内意は、内府の為と云う口上とは相違があり、右衛門尉殿らしくないとの彦右衛門は思ひます。よくよくお伝えする様にとの返答だった。

半平が帰つて鳥居の返答を右衛門尉へ報告した時、中村家の渡辺勘兵衛が居合せていた。勘兵衛はその時は印齋と名乗っており、右衛門尉方より一万俵宛の援助を受けて浪人分を抱えられ、大和国郡山の城を預かつていたが用事で大坂に来ていた。長盛は印齋に向かつて、今半平が報告した鳥居彦右衛門の口上を聞かれたかと問えば印齋は、先程から聞いていましたが余りにも感心していましたと答えた。長盛は、その通りです、鳥居（p291）の様な侍を失うのはたいへん惜しい事ですと頻りに落涙した。この事は関ヶ原戦の後、郡山の城を明渡す時印齋の対応が良かったと藤堂高虎が聞いて、知行一万石で召抱えへて家老並の待遇をした。大坂冬の戦い二度合戦の時も先手役を与えられたが、何故か藤堂家を去り椎庵と名を改めて大津に居住した。その後江戸へ出たが堀丹後守殿が内証で過分の援助をして家来同様に出入した。その時鳥居の口上等を丹後守殿に椎庵が語るのを直接聞いたと云う中西与助の話をここに書留めた。著者註 この事は旧記の中にも記してあるが、石田治部方よりの使者と云つても使者の名は見えず

其上この使者を留めて外の留守居衆を呼んで協議し、四人が相談して返答した事になつて
いる。しかしこの様な時の為の城代であるから、自身の一存で断りの返答をするのも当然
と思うので椎庵が語つた事を採用した。

其頃伏見城への寄手は備前中納言（浮田）秀家、筑前中納言（小早川）秀秋、五奉行の中では長束大蔵等を主将として、近日大坂を出発する事が聞こえてきた。そこで四人の留守居衆は相談して西の丸に住住する若狭の少将（木下）勝俊の方へ使を立て、今度当城への寄手として御舎弟秀秋が向かつているので、貴殿が当城中に居られるのは城兵達が皆納得しないので、早々西の丸を明渡す様にとの口上である。そこで勝俊は西の丸を退去して京都へ登り、北の政所の屋敷の守護をした。

註 木下勝俊（1579-1650） 若狭城主八万石、弟小早川秀秋、叔母北の政所（秀吉正室）

鳥居彦右衛門方より増田右衛門尉方へ断りの返答をした後、今生の別れと云う事で留守居四人互いに接待をして、其座で（p292）籠城の相談等もした。或日内藤弥次身衛門宅に集った時大坂城西の丸の留守居役だった佐野肥後守が来て、皆さんが籠城を決め大坂から軍勢が来ると聞きました。私も籠城に加えて頂きたいと云う。留守居四人の中で弥次右衛門が云うには、貴殿は大坂西の丸の御留守居として残された以上、ともかく大坂で何かやり方もあるでしょうが当城へ来られ、私達と一所に籠城すると云われても全く受け入れられません。ここで仮令どんな武功を尽されても持ち場が違いう働きとなり、上の評価は得られないと断った。

その時肥後は、大坂奉行から西の丸を明渡す様に云ってきた時、その使者の首を刎ね、御殿に火をかけて切腹をしようかとも考えました。しかし大勢の女中も居たため西の丸を明渡し、全ての女中をそのまま残し、御側近くで仕えた女中方を夫々に片付けました。せめて当城に籠り皆さんと一所に成りたいと思つて来ました。大坂西の丸を彼地の奉行に追出され、当城で皆さんに追出されたのでは御咎に逢つて苦勞するのは存命した時の事です。預けられた

西の丸を追出され何の面目があつて再び内府公にお目に掛かれましようか、敵が寄せて来たら則討死と覚悟を決めて来たものですと述べた。留守居衆四人共に感心して、それでは幸いな名護屋丸が無人でもあるので、総責任者として貴殿が籠られよと決まった。

著者註

佐野肥後守と云う人は元来徳川家の家人ではなかった。以前（p293）京都聚楽の中に内府公が秀吉卿より屋敷を進上され、その後度々上洛の際に表立った用は藤堂与右衛門（高虎）が承る様にと秀吉卿が指示し、細々した用事承りとして平勘定役人の中から佐野肥後と岩間兵庫の兩人が任命され、内府公が上洛在京の時は日々の経費管理をした。その後家康公が在国（当時は駿府）の時も上方筋の用事はこの兩人が担当した。更に近江の国内で馬の飼料のためと秀吉卿から家康公に知行が進上された時、関東から代官を送らずこの兩人が知行所を預かり知行200石が与えられた。それ以後自然に御家人の様になり肥後守は認められ立身した。上記近江内の代官を勤めている時、近くに国友村がありそこで大砲の打ち方を習った。伏見籠城の時も大砲を指揮し、自身でも打つと云い火薬を詰めた。しかし既に火薬が詰めてあるのに気付かず二重込めとなり、点火したところ砲筒が裂けて肥後守は大怪我をして死去した。この話は国友八左衛門と云う者が若い頃肥後守に目をかけられ、大坂西の丸、伏見籠城にも付添ったので良く覚えており、私の兄半午へ常に話していたのを聞いたと寺沢角右衛門が語つたのを書留めた。

十一 伏見城の戦い (p297)

その頃反徒側の諸将がいよいよ伏見城を攻める為に大軍を擁して大坂を出発したと云う情報が伏見にも届いた。留守居四人は相談して持場を決め、本丸は鳥居彦右衛門、西の丸は内藤弥治右衛門、大手口は松平主殿頭、名護屋丸は松平五左衛門、松の丸は佐野肥後守及び近江の代官岩間兵庫と深尾清十郎の二人が甲賀の侍達を指揮して堀の裏で守る。御茶師の上林竹庵も此丸に籠った。伏見城の上下の総人数が二千人に少し足りない程度である。留守居達は相談して、今度の戦いは決して運を開くための籠城ではないのでお互いに急場を見ても応援はせずに夫々の持場で討死をしようとなった。

反徒側の主将は浮田秀家と長東大蔵として七月十五日大坂を出発した。(p298) 総人数は三万九千余の陣構えで伏見へ着陣して各攻撃口を決めた。東の方は浮田秀家、長東大蔵及び秀頼卿の旗本の部隊十組、西の方は島津兵庫頭義弘、同中務、鍋嶋信濃守、北は野村肥後、松浦伊予守、北西は小早川秀秋、垣見和泉、熊谷内蔵その外少身の九州侍が参加する。石田三成の手勢は高野越中と大山伯耆の両人が引率し、毛利輝元の軍勢と一緒に大坂を出発した。城攻めに際しては何処でも城兵が突出した所へ駆けつけて最初の合戦に間に合う様にと三成は二人に指示していた。ある日鍋嶋信濃守の持場の番人交代時間に合わせ松平主殿頭が城門を開いて手勢を率いて自身が指揮して戦った時、三成が残して置いた二千の部隊が高野越中と大山伯耆の指揮の下で横から突いて掛ったので、主殿頭は前と脇からの敵を受けて小勢ではこの一戦は無理と見切り、人数を纏めて城中に引揚げた。その時石田と鍋島部隊が

主殿の部隊を追い城中に入ろうとしたが、堀の裏に配置してある鉄炮隊により烈しく打掛けられ石田鍋島の部隊も追詰める事が出来ず引揚げた。この時石田方で渥美孫左衛門、大石将監、松田六左衛門と云う三人が特に働き、三人共に首を取ったと云う事で三成が佐和山で褒美を与えたと云う。

著者註

この競り合いの咄はその時代の事を記した旧記等にも載っており人々の申伝にもあるが万治年中(1658-1660)に松平隼人正殿が著した家忠日記と云う書にはこの事が載って居らず人々は不思議に思っている。(p299)

猶この高野越中は関ヶ原の戦では討死しなかった事を内府公が聞き、高野越中は何としても召捕えたいと思つた。これは自分主人であつた関白秀次の事を秀吉へ逆らわせ腹を切らせ、其上に石田等に仕えるとは不届千万と云う事である。その時公義の手配者三人の中の一人が高野越中との事を聞いて、恐れ入り近江国伊庭村と云う所に住む地侍の徳永茂左衛門と云う娘婿の方に暫く隠れていた。その後浅野左京大夫幸長が紀伊国を拝領して大身に成つた時召抱えられ三千石を与えられた。この越中も若い頃から色々戦場があつたが、中でも伏見城攻の時の自身の働きは最上のもとして報告した。一度公義の御尋者になつたので其後は高野越中と名乗らず、平岡刑部と改名した。その子孫は高野の名字で安芸国広島に居ると言う。

伏見城は通り掛けの一勝負位に反徒側は考えていたが、予想とは大違いで今の俣では何時落せるかも分からなく寄手の大軍も攻め倦んでいた。そこで長東大蔵は計略を考えて自分の部下の浮見藤助と云う甲賀侍を呼出し、内意を言合せて城側松の丸を守っている甲賀侍の山口宗助と水原十内と云う二人に矢文を送らせた。内容は、お前達の仲間相談して

反逆を行い、城中の家屋に火を付けて内応すれば秀頼公より重い褒美が与えられる。さも無ければお前たちの村に残している親類は全て磔罪になるとした。山口、水原は城内の甲賀の者四十人余りと相談して、明日夜中二時に城中(5300)で火の手を揚げる旨返答した。これを長束は浮田秀家に伝え、全軍に通達して総攻撃の準備をして待った。

約束の日時になると松の丸の御殿を始め、その外所々の役所から出火したので城内では皆が慌てふためいた。寄手の方は全軍一気に進み同時に攻め込んだので、松の丸に籠っていた城兵は内外の敵の為に全滅となり、岩間兵庫、上林竹庵は討死し深尾清十郎は生捕と成り後日大坂で処刑された。

名護屋丸へは小早川秀秋の軍勢が攻入ったのを、松平五左衛門が中門へ出張って自身鎧を持って働いたが、秀秋の家人である比奈津角助、田島勘右衛門兩人に討たれて比奈津が終に五左衛門の首を取った。

三の丸へは島津義弘の部隊が攻め入ったが、松平主殿頭家忠が手勢を左右に従えて自身鎧を取って島津の大人数を三度迄押返し粉骨を尽したが、島津勢も怯まず攻込み家人も残り少くなり、自身も数ヶ所の疵を負い終に島津の家人に討たれた。

内藤弥次右衛門は若い頃から著名な弓の名手だったが、今回も自身が弓を使い敵を若干名射倒した後配下の安藤治右衛門に向って、私は自害するので俸の与一郎を頼むと言い捨て、事前に乾燥草を積んだ鐘撞堂の中へ入り火を付け自殺した。次男与一郎はこの時十六歳だったが目覚しく働き数ヶ所の疵を負い、父弥次右衛門と一所に自害しようと走り帰ったが鐘撞堂も燃上っているので、その近くで自殺をした。其後安藤治右衛門も討死を遂げ、この様に外郭は全て落城し残るは本丸だけになった。

各方面からの寄手は一所に集り本丸へ向かった。中でも小早川秀秋の軍勢は(5300)名護屋丸から直接本丸の大手口へ攻寄せた。しかし鳥居は堅く守り、城門を閉じて横郭の堀裏より烈しく鉄砲を打掛けたので秀秋の家の中では負傷者死人が多数出た。秀秋の先手組の侍大将に松野主馬と云う者がいたが、兎に角焼討ちにしようと思つて指揮して火矢を放させたところ、太鼓櫓へ燃えついて焼け始めた。鳥居彦右衛門はこれに気付き、加藤九郎右衛門と云う侍を呼んで、あの火を消して来いと云い、加藤は梯子を掛けて櫓の上へ走り上り火を消し止めた。しかし次々火矢を打ち掛けるので、矢が中り九郎右衛門は屋根より空堀へ転げ落ちて絶命した。是までの事は竹弥と云う茶坊主が只一人其場を逃れ出て後に人々へ語った。

其後本丸の建物が燃えている時、彦右衛門の命令か城門が開かれたので押掛けていた寄手が早速入ると、門から六七間の所に侍は勿論、中間や小者と見へる雑兵に至る迄皆鎧や長刀を取構へて二三百人も立ち並んでいる。そのため寄手の者も押入る事が出来ず暫くの間敵味方で睨み合いとなった。その内に城内の者が二三十人程一度に突いて出て戦いが始まった。押入ったり押出されたり二三度繰り返す内に城兵は全て討死した。建物も益々燃上がるので本丸へ詰掛けた寄手も皆引取った。

前出松野主馬は何かの理由で小早川家を去り京都の黒谷川門前に住居したが、京極高次が若狭の国を拝領した後浪人分として呼寄せたいと思ひ、松山右馬介と云う松野を知る者に内々の接触させた時、右馬介に主馬が語った事である。この時主馬が云うには京都の町人で鳥居彦右衛門方へ親しく出入りした佐野屋と云う者の咄では、籠城前伏見を訪問した時城中に居る鳥居家の者は漸く二百人余だった様だと(P302)人々に語っていた。この事から落城の時本丸

で取ったと云う首数は小早川家の合計は覚えてはいるが、外の夫々の家中での首数を其の俣計算すると全く合わない。その為伏見城本丸攻の時は寄手側討死の者の首迄も鳥居側の首としたのではないかと、その頃噂されたとの事である。

その時長柄、鎧、長刀等の柄を黒くし菊桐の蒔絵紋が付いた物を素肌者（甲冑のない雑人）の首に添えて持って来た者が家中に多く居た。私の家来の中にも長刀を持った中間と思われる者の首を取って来た者が一人いた。この様な事は後々の記録にもなる事だが、きつと彦右衛門が命令したと考えるのが妥当である。と是も主馬が右馬介に語ったと中西与助から聞いたので書留めた。註 桐同の蒔絵 豊臣家の家紋のひとつ

伏見落城の時、外郭で討死を遂げた内藤弥次右衛門、松平主殿、松平五左衛門等の最期や戦の次第及び家来達の戦死の様子は、中で生き延びた人や雑兵に紛れて逃げ延びた人から様子が伝えられて世間に知れたものである。しかし本丸は三ヶ所に門があつたが、彦右衛門の命で二ヶ所の門は通行不可能とし、大手口の門一ヶ所だけ残した。鳥居自身の命令故一人も逃出す事も出来ず、待ハ勿論下々雑人に至る迄残らず討死した。

彦右衛門の最期の様子は家中諸士の討死の様子共に分らなかったが、西賀孫一云う者が彦右衛門の首を捕つたと云う記録があり、孫市は後に桑原忠兵衛と名乗り黒田甲斐守長政方に居たが、其後彼家を去り浪人となり本名に戻って西賀孫市と名乗っていたという。

彦右衛門嫡子の鳥居左京亮殿がこの事を聞き彼孫市を招いて、亡父彦右衛門は其方が手に掛けたそうだが、最期の様子を委しく聞きたいと告げた。孫市は、お尋ねの上は申上げます。伏見落城の時私も（p.303）本丸へ駆付ました。門の内外にある彦右衛門様の御家来衆と見える多数の死骸を乗越えて行きましたが、彦右衛門様は唯御一人で玄關の箱櫃に腰掛けて居られ

私の名前をお尋ねになりました。西賀孫市と名乗り鎧を取直すと、我は鳥居彦右衛門なるぞ、私の首を取って高名にせよと云われました。私は、兼ねて御名前は伺っておりますが私などが御手向いする方ではありません。御自害なされば介錯をして差上げ、お印（首）を頂戴しますと申上げました。するとその俣大広間の上へ上られ具足を脱がれるので御手伝しましたが、肌着の上より脇差を突立てられたので則介錯申上げました。私が御首を取上げて出るところへ私の家来が来ました。そこで何でも持って帰る様に云ったところ、下々の者なので何の弁えもなく御肌着迄も取って帰り、今も私の手元にありますと云った。

親の形見でもあるので、いつか見たいものだと言京殿が言うので其後孫市が持参した。左京殿は一覧してたいへん落涙した。孫市は、此品々は元来御家の物ですから差上げます。御家に保管されるのが良いでしょうと申上げたが、左京殿は、ありがたい事ですが私の手元にあつても納戸に仕舞い込んで置くだけです。其方の手元であれば人も見る事で亡父の為にもなりますので戴かない事にします、そうは云つても肌着はその時の垢も付いて汚れた物ですから私の方へ戴きますと云う事で今でもこの肌着は鳥居丹波守殿方に有り、亀甲の付いた浅黄小紋の木綿の肌着との事である。

註1 鳥居左京亮（忠政 1566 - 1628） 鳥居丹波守（忠瞭 1681 - 1735） 卜野千生藩主

註2 西賀孫一 雑（さこ）賀孫一 雑賀衆

註3 伏見城の戦いは慶長五（1600）年七月十八日―八月一日の約二週間

十一二 織田秀信の不了簡

其頃 内府公は濃州（岐阜、清須辺）に在陣している諸大将へ毎度使番衆を遣わして口上で、

その地に在陣ご苦勞様です、私達父子も間もなく出發しますと伝えた。しかし出發が延びて諸將達が待ち兼ねていたところへ、再度使番の (p.304) 村越茂助が到着した。井伊直政と本多忠勝が対面し、いつも使者が来ると我々が一緒に立会うので今日も兩人が立合います。ところで両殿様 (家康、秀忠) の出發日時を皆が尋ねるだろうから、私の出發した後必ず出馬されますと答えるのが良い。皆さんが出發を待ち兼ねており、この頃は我々からも出發を催促しているの、今江戸を出發すると思えますと色々言含めて同道した。

茂助が諸將達に口上の趣旨を述べると、案の定内府公出發の事が尋ねられた。茂助は答えてその事ですが、内府の供をする家中の者達は小山から帰城して皆用意をしており、内府の出發日時の發表を待っています、私が江戸を出發する時に日時は云われませんでしたと云うので井伊本多兩人は手に汗を握っていた。諸將達も皆呆れ果てた様子であり、福島政則は扇子を使っていたがその扇子で畳をハッシと打って立上り、茂助の前に来て扇子をひらいて茂助を扇ぎながら、さてさて貴殿も良く云ったものだ、我々も当地に来て内府卿の御出發を待つて居るばかりで、鼻先にある岐阜の城一ツを落す方策も無く数日を過ごしているとは手ぬるい事と内府卿に思われ面目ない事です。御父子共に出發を延ばされている理由が思い当りました。そこで貴殿は二三日当地に逗留し、岐阜の城を攻落す様子を見届けて帰られるのが良いと云う。茂助は、私は皆様方へ在陣の御苦勞のお見舞いだけの使者であり、岐阜城攻 (p.305) の検使に來たではありません、皆様よりお答えを戴けは早速帰って報告しますと答えた。政則は井伊本多兩人に向かい、茂助を一兩日も逗留させる様頼みますと云うので兩人は、承知しました、それは私共にお任せ下さいと云う事で其日直ぐに岐阜城攻撃の相談が決まった。

著者註 この事は旧記にもあり、違いは無い様である。徳永寿昌法印は其日夜になる迄

政則方に居たが政則が云うには、今度一戦前に色々手立てを廻らして敵方の大名を味方へ引入れる事に努める様に内府卿から云われたので、細川越中守と相談して浮田秀家を味方へ引入れる事ばかり考え、岐阜の城を攻める事に気付かず無駄に数日を送った事は大きな油断でした、と政則が残念がっていたと法印は語った。下野の小山で内府卿が私に云った事は、今度の事は偏に石田、小西等が悪意により秀頼への忠節と称して諸大名を引き込んだ事であり、一旦は反徒側になっても一戦前に降参すれば和談を行い、諸大名の家々も従来通りとする事が肝要と心得る様にとの事だった。そこで其方達へも相談して南宮の神主右衛門太夫に、何とかして毛利家の面々を味方に引入れる様に知恵を絞った訳である。今になって見れば、大垣・岐阜・犬山の三城は近くにあるのに放置し、手始めの一戦をしなかった事は内府卿の味方として有るまじき事である。内府卿が出發を引延ばした事もそれが理由に違いないと徳永掃部と稲葉外記の兩人を呼出して法印は語ったと言う。(p.306)

岐阜中納言織田秀信は、会津へ出陣される様にと内府公から通達を受けたが、支度するにも家中の侍達は武備の嗜みを忘れ乱舞や茶湯の会など遊興に打ち込んでおり出陣の用意が中々調わず出發が延びていた。その折に石田三成方から川瀬左馬と云う者が来て、上方へ味方する様にと伝えてきた。そこで家老達を呼集めて相談したが、木造左衛門、百々越前の兩人が云うには、返答は十分考えられる方が良い、あなた様は信長公の御嫡孫であり、秀吉は信長公の御取立により卑賤の身から成り上がったのに、その厚恩を忘れて貴方様を外様大名と同じ程度の小身にしました。其上自分の一字を与えて秀信公と名乗らせるなどは、当家の恥辱であり、残念な事だと私共は日頃思っておりました。一方内府卿は信長公の御取立と言う事でもなく、懇意にしていたと云うだけで叔父様信雄卿の

為に長久手の一戦を遂られた事は天下の武士の誉れと云われました。その内府卿へ敵対なさる事は道義が立たない事です。しかし今上方へ断りの返答をする必要はありません。是から十分検討して連絡しますと云う事にして、川瀬を厚くもてなして良い道具などを与えて帰されるが良いでしょうと申上げた。

秀信公が納得したので両家老は安心して帰宅したが、その後で中納言秀信は入江右近、伊達半左衛門、高橋一徳斎と云う重臣を呼出してこの件を相談した。三人が揃って云うには、一旦秀吉公の御厚恩を受けながら秀頼公の御為とある事を粗略にしてはなりません。其上今度の一戦 (p307) は、日本国中が東西二ツに分かれて天下分めの戦いと思われませんが、上方勢はたいへんな大軍です。内府卿は領分である関八州の手勢だけで徳川家だけです。会津討伐のため関東に下向した諸大名は内府卿へ味方すると云う噂もありますが、彼らの大部分は故太閤秀吉卿の御取立に預かった者達です。又その妻子方を夫々大坂に置いてあるので、一旦は内府方に尽すように振舞っても真意は上方の味方と言う事に疑いありません。随って流石の内府も家運が傾いて来たので、その事を考えずに自分の領知を離れて上方へ出陣するなどは、徳川家の滅亡の時が来たと世間では言っておりますと三人が云うので秀信も全く三人と同じ考えに至った。

翌朝になると川瀬を呼出し上方に味方する事を三成方へ返答した。その上で家老達始め、外主立った者と全て呼んで、今度考える事あり秀頼卿の味方となる旨返答したので、これ以上異見を述べる事は堅く禁じ織田大明神の照覧をかけて変更ない旨言渡した。木造、百々の家老二人は云うまでもなく、外にも心有る人々は無念に思った。両家老は余りにも情けなく思い、前田徳善院の異見を求めた。徳善院玄意は秀信が若年の頃から後見の様に太閤から指示されて

いたので何事でも玄意法印の差図に任せていた。両家老は早駕籠に乗って京都に上ると折から在京の徳善院に面会した。玄意は兩人を数奇屋へ招き事の次第を聞くと、兩人に向かい、中納言が上方に味方するとはとんでも無い事です。其方達兩人の中一人は急いで関東へ下り、大坂奉行より今回この様に云われたが同意せず内府卿に味方する覚悟を決めましたのでご出発を待ちます、又御参陣の節は居城岐阜を明渡しますので安心して (p308) 着陣下さる様に、と申入れよと内意があった。両家老は夜通しに岐阜へ帰り秀信に、この間は御誓言により私共は異見を申上げる事が出来ませんでした、玄意法院の内意はこの様ですと報告した。秀信はたいへん不機嫌となり、私に許可も求めず上京したのは不屈であると結局無視して徳川家への敵対を明確にした。

註 織田秀信 (1580 - 1605) 家老 木造長政、百々綱家

十一三 岐阜城の戦い

岐阜城攻めの時、福島政則と池田輝政が大手か搦手で論争したところ、井伊直政と本多忠勝が輝政を説得して収まったと記等には書かれているが、そんな事はなかった。理由は身身だろうが小身だろうが敵地に近い所の領主が先手となるのが日本では昔からの武家の決まりだった。随って尾張清須の城主である政則が一の先手、続いて三河吉田の城主輝政が二の先手となる。特にこの二人は別格で、小山の陣所で内府公が直接指示した事でもあり兩人の間では論争はなかったが、其外の大身小身達が大手の七曲り口へ向う事を好み、搦手からの寄手を嫌った。そこで大手、搦手及び犬山城の押へ軍勢が必要と云うのは皆理解したものの其人数割の所でなかなか結論がでない。そこで井伊本多兩人が皆に提案して、人数を勘案し大手、搦手、犬山の押さえと籤引きで決める事になり問題は解決した。

この説は旧記とは異なるが、三代將軍家光の代に旗本へ採用された大道寺内蔵助は若い時遠山長右衛門と名乗ったが、岐阜城攻めの時は福島政則に属しており、大手口で働いたが老後に (p309) この籤の事を語ったので書留めた。

この時犬山城に籠城していた稲葉右京亮も岐阜城に加勢に行っているとの情報があったので政則諸將と打ち合わせ、使番の侍に、明朝全軍を挙げて犬山城を攻めると触れさせた。敵方から間者が入っており、是を事実を思い帰って報告した。犬山に残って居た石川貞正方から岐阜へ連絡したので、加勢に行った者達は夜中に岐阜城を引払って犬山へ帰った。これは政則の計略が図に当たったとその時云われた。

岐阜城攻の日に当り大手の主将左衛門大夫政則を初め、細川越中守忠興、加藤左馬助嘉明、生駒讚岐守一正、寺沢志摩守広高、蜂須賀長門守至鎮、京極侍従高知、井伊兵部直政達は萩原の渡りを越して敵地の民屋に放火して太郎堤に布陣した。

搦手は主将池田輝政に浅野幸長、山内対馬守一豊、有馬豊氏、一柳監物直盛、等は河田川岸を臨む所に布陣した。岐阜の城兵百々越前守は三千計の人数で新加納に出張し、川端へ備えを出して守る体制である。一柳直盛は黒田の城主であり、川口の渡り瀬を熟知しているので川へ乗り入れた。彼の部下達が浅瀬を渡るのを見て、輝政の先手である伊木清兵衛を初め、家中一同が瀬を渡る。続いて浅野、堀尾を始め其外の軍勢も夫々渡河して向う岸へ馳上った。城方の兵達も弓や鉄炮で防ぐが、大軍一度に押懸ければ総崩れとなり引退く。この時□□勘平を池田備中守吉長自身が討取った。城方の主力は新加納に控へて防戦したが、叶わずに城中へ逃込んだ。搦手へ向う諸部隊は新加納のせり合で敵の首七百余を挙げて、これを輝政から江戸へ報告した。(p310)

太郎堤へも其知らせがあり政則は大手担当の諸將達へ向かつて、各位は如何思われる、搦手へ向った組は新加納で一戦の機会を得たが、こちらには敵が出て来なかつた。明朝の城攻めでは絶対搦手組に先を越されない為に、今夜中に岐阜の城下迄部隊を進めようとなつた。皆これに同意して急いで準備をして夜七時から八時頃迄に総勢が岐阜の町はずれ近く布陣した夜が明けるの待ち次第に攻上ると、搦手側も主将輝政を始め各着陣して一同に攻上る。

その時政則は大橋茂右衛門、吉村又右衛門兩人に命じて大手方の諸部隊が進む時左右にある家々を焼き払った。その煙が山の下の方に吹き流れ、池田を始め搦手の諸軍勢は此口から攻入る事が出来ない。輝政は大へん怒り軍勢を引き返して長良川の方に廻り水の手より攻上る。

大手口は城兵木造、百々、津田の部隊が突いて出て坂の途中で防戦をするので、寄手の大軍も簡単に攻める事ができない。搦手口へは城兵は出て来なかつたので、城中に入り瑞龍寺の辺り迄進んだ。この瑞龍寺の砦には石田方からの加勢として榎原彦右衛門、川瀬左馬助兩人を首將として二千人余りで守っていた。そこへ浅野左京太夫幸長の家中の者達が一番に攻め掛けると搦手担当の諸部隊が一斉に攻寄せ烈しく攻め込んだ。城兵は防戦したが大手口より攻上つた諸部隊が次第に攻め入り、間もなく出丸が落ち、榎原彦右衛門は浅野幸長の家人岸九兵衛尉に討取られた。川瀬左馬助はこの時二の丸に居たがその後本丸へ籠つた。

爰で花やかな格好の若武者が甲付の首を討取ったが息切れしたと見えて休んでいた。そこへ (p311) 鎧を持った侍が駆け寄り、その首を奪って走り去つたのを一柳監物が見ていた。監物はその若者の側へ寄り、其方は誰の由来にて名は何と言うと尋ねると、私は浅野左京太夫家来の浅野左門と名乗った。監物重て、其方は未だ若いようだが年は幾つかと尋ねれば、左門は当年

十六歳になりましたと答えた。監物はそれを聞いて、其方の手柄になる首を奪われた事は私がしっかりと見ていた。幸長へ伝えるので私に付いてきなさいと云い坂を少し上ると幸長にあった。左門の事を幸長に伝えると、確かに私の家来で貴殿が見届けられた事は左門にとつて名誉な事と喜んだという。私（作者）が若い頃安芸国で一柳助之進から直接聞いたので書留めた。

さて大手、搦手の軍勢全てが攻め上がり城兵多数が討取られた。敵は二三の曲輪を捨て本丸に籠ったが、池田家の旗奉行は歴戦の者だが城内へ手早く旗を入させたので、岐阜の城は輝政が一番乗りの様に見えた。

この時城主秀信の家老木造左衛門が政則の方へ降参して、主人秀信を助命して戴けるなら本丸を明渡す旨告げた。政則は問題なしと返答して家人の可児才藏に使番の侍を副えて味方の諸部隊へ戦闘停止を触れさせた。其後寄手の諸将が集った所で、秀信を助命するのは疑問もあつたので政則は、秀信は自身の浅はかな考えで一端は内府へ敵対したが、正当な信長公の嫡孫である事は事実であり、我々の味方諸公の中には信長の厚恩に預かった家々もあるのでこの政則の処理を悪くは思わないでしょう。私は織田家(p312)に鼻肩すべき家筋では無いが、助命を申入れられた以上、了解する旨返答しました。秀信を助命した事が内府卿の意と異なる場合は、私の今度の働きに対する報いが無くなるだけの事ですと言うので、その後は誰も反対はしなかつた。秀信は政則の世話で芋洗と云う村に暫く逗留した後、関ヶ原合戦後紀州高野山に登り程なく病死した(35歳)という。

註 岐阜城は慶長五年(1600)八月廿三日の一日の戦いで落城

秀信が出城した後、城の受取について政則と輝政の論争があつた。政則は城主秀信の助命あれば城を明渡すとの事であり、願の通り助命したのだから城は私が受取る事になると云う。

一方輝政の考えは、確かにその通りだが、私の旗を一番に城内に入れた事も事実だから軍事の慣習に随い私が城を受取るべきだと云う。大手搦手の諸将は皆立会っているが、自分達とは関係ない事で難しい論争に巻き込まれたくないので皆口をつぐんでいた。井伊直政と本多忠勝が政則と輝政二人の間へ入り政則に向つて、先程から伺っています、双方共に理屈もある事ですから御両人の家来衆立会いで城を受取ってはどうかと提案した。政則は、夫は通常に預かっている城を受取る場合の事で、攻め取った城はそれとは違いますと結論がでない。

その時本多中務忠勝が一柳監物の側で何か小声で云っているのを輝政が聞いて、中務は貴殿に何を云ったのかと尋ねた。監物は、中務は今度反徒の追討で皆命を掛けて内府へ協力なさと云つた。輝政はそれ聞いて、確かに中務の云う通りです、内府の為に足りないと思いません。輝政はそれ聞いて、確かに中務の云う通りです、内府の為に足りないと思いません。私の事です、政則が城を受取るのが良いと収まった。その時政則は最初井伊本多両人が云つた様に両家立合で受取るので輝政の家人も出す様に云う。しかし輝政は、私の家来は出る必要ありません、時間も立っているので早々城を受取って下さいとなつた。

岐阜城攻の時政則と輝政の論争があつたと世間で言われたのはこの事の様だと一柳助之進が語つたので書留めた。きつと親父監物殿が雑談した事と思われる。

岐阜城攻の時、黒田長政、藤堂高虎、田中兵部、桑山伊賀、戸川肥後の五人は犬山押さえの籤に当つたが、犬山の城兵はその夜中に城を明けて撤退したので岐阜城の攻撃部隊に参加しようと部隊を移動したが、岐阜城もその前に落城したとの事である。五人の諸侯はがっかりしていたところ、岐阜城の応援として大垣の城から二万計の敵軍勢が向かっているのを見かけ、これ幸い

と爰で一戦を遂げようと川辺に諸部隊を配置し、鵠ヶ嶋の札の辻に五人一所に寄り集り、川を越して戦うべきか、又は敵に川を渡させて後戦うか相談した。その時高虎は長政に向かつて、あそこに居る銀の天衡の指物で黒母衣を羽織っているのは貴殿の家臣の後藤ではないですかと尋ねた。黒田甲斐は、確かに私の家来の又兵衛ですと答える。高虎は、それでは又兵衛の考えも聞こうと云う。長政は皆さんで相談していると云う。後藤などの考え(231)の及ぶところではありませんと言うが、高虎は、あの後藤は気が利いた事を言う者ですと自身扇を揚げて招き使いに呼びに行かせた。

後藤が来て五人が並ぶ床机の前に膝まづく。高虎は、あの敵とも川向こうに近づいてくるでしょうその時、此方から川を渡って一戦を仕掛けるのべきか、又は敵に川を越させ待合せて戦うのが良いのか、其方の考えはどうかと問う。その時又兵衛はにっこりと笑って、ここで皆さんが相談されているのを向こうで聞いていました。相談は時により事によるものです。皆さんが受持った犬山の城は城兵が夜中に撤退してしまい、岐阜の城攻めに間に合わず何を内府卿へ報告されますか。ここでの一戦を逃しては皆さんの立場はありません。仮令敵が川辺迄来たとしても、必ず川を渡るとは限りません。この川が死場と思われるのが良いでしょうと目を三角にして捲し立てるので、高虎始め皆其通りだた感心した。

125

程なく敵は川向へ到着したが、長良川は満水で渡り場所が分からずにいる。味方田中兵部の家来でここで生れた者がおり浅瀬の案内をしたので、兵部の部隊が一番に川を渡るのを見て全軍が一度に川を渡り向こう岸へ駆け上がった。大垣勢の方でも足軽が弓鉄炮を放し掛けたきたが、関東勢の大軍は川を渡った勢いで遮二無二突掛け、即時に敵を追崩して二三町の間追討し、味方が討取った首数百余に及んだ。黒田長政自身も鎧を取って石田方の軍士渡辺

新介を討取ったのもこの時の事である。石田の家中で頭分の侍侍杉江勘兵衛が敗軍の諸勢の殿で退いたが、田中の徒士が辻勘兵衛と名乗って杉江を馬上より(p315)突落したところへ仲間の松原善左衛門が駆けつけて杉江の首を取った。大垣城が近くなったので、長政と高虎両人の指示で敵を追留め早々兵を引揚げた。

著者註 この長良川の一戦の事は世間に流布する旧記等には見えないので、ここに書きとめた。

辻勘兵衛は後に浅野家へ仕え、松原善左衛門は越前家(結城秀康)へ呼出された。

註 田中兵部(吉正 1548 - 1609) この時岡崎城主五万石

慶長五年九月朔日内府公は江戸城を出発し外桜田門を出る頃岐阜からの首桶が届いた。事前に品川より報告があったので増上寺表門前に置く様に指示してあった。芝神明の社はその頃小さな祠の宮があり、その前の萱ぶきの拝殿があった。その上に上り首桶を見てから歩行で増上寺へ入ると存応和尚が大門迄迎えに出た。和尚同道で本堂へ上り、間もなく乗物で出発した。

今時流布する記録等には本堂で僧達が仏法の間答をするのを聞き、方丈とも色々雑談したと書いてあるが、本堂では礼拝する程度の時間しかなかったと小木曾太兵衛は語っている。

十一 四 上田城攻め

内府公が江戸を出発する前宇都宮より本多佐渡守を呼び、近日中に出発するので秀忠公は支度次第に宇都宮城を出発し中仙道を登り、信州上田の真田安房守へ使いを立て降参するならば許して先手の中に加える様にとの指示をした。そこで秀忠公は八月廿四日宇都宮を出発し、同廿八日上州松枝へ着陣(p316)した時に、内府公は九月朔日に出発する事が

発表されたとの報告を受けた。松枝を出発して信州小諸へ着陣して、そこで真田安房守方へ内意を伝えた。勿論安房守嫡子の伊豆守方からは舍弟左衛門佐及び家老たちへも色々説得したが同意なかった。それどころか意外な返答の口上もあり、終に上田城攻めの方針が決まった。

秀忠公自身出馬し染屋の台と云う所より上田城の様子を見て攻め口を定めた。その時榊原康政は、味方の諸部隊は大軍だからと油断すると真田は軍事に長けた者ですから、夜襲などを必ず仕掛けて来ると思われます。諸部隊とも夜の守りに油断しない様に指令されると良いでしょうと申上げた。秀忠公も同意し、これを厳しく通達せよと云う事になり、康政は使番衆を動員して諸部隊に通達した事は、夫々の陣の一町程先に捨て篝火を焼いて、侍と足軽を組になって夜番を勤させよとした。

城主安房守は左衛門佐を招いて、寄手諸部隊の中で油断している陣を探し、そこへ夜討を掛よと指示した。左衛門佐は日暮前より夜討の支度をしていたが、寄手側は前述の指示が出ており、六時から全部隊が捨て篝火を焚くので白昼の様になり、其上夫々番人が配置され中々夜討など掛られる様子ではない。これを父安房守に左衛門佐が報告すると、成るほど、そうか、徳川家には甲信の侍が多く居るから夜守の作法等は心得ている筈だと云った。

上田城外の加賀川辺に尼ヶ淵と云う竹木の生茂った古い要(p317)害がある。そこは城方より必ず斥候を忍ばせているかに見えるので、その敵を探し出して討取ろうと牧野右馬亮が手勢を率いて加賀川を乗越して尼ヶ淵を搜索した。案の定伏兵が立ち上がり足軽は鉄炮を打懸け侍は鎗を取って向ってきた。牧野の配下が勇んで進むのを見て旗本の兵士戸田半午、御子神典膳、朝倉藤十郎、中山助六、鎮目市左衛門、太田甚三郎、辻太郎助が馬で馳付て

戦功があり、この七人をその時上田の七人衆と云った。その時大久保相模守、酒井宮内少輔本多美濃守など先手の者が牧野の部隊が掛るを見て、同時に川を乗渡り総勢が一丸となり城兵達が引下るのを食止めた。城門近く迄追討したところ、思いがけず虚空蔵山の林の中から大人数が鬨の声を揚げて鉄炮を打掛け、その後より鎗さきを揃へて突て出てきた。

寄手がかなり苦勞している頃を見計らい、真田左衛門佐幸村は大手の門を開き一斉に突いて出たので味方の諸部隊は一気に敗走した。真田父子は間もなく追留めの鬨の声を揚げて城内へ引取った。この事が秀忠公に聞こえ、上からの命令もなく、主人の指示も聞かず勝手に少人数で戦端を開き、其上少身の真田の部下に追立られ、負けをとるとは不屈この上ないといたいへんな立腹であり、上司の指示もなく抜け駆けをした先手の者は処罰すると云い渡した。

其夜中に上田城攻についての会議の席上、榊原康政が戸田左門を紹介した。左門父子は(p318)出発前江戸で内府公に呼出され、其方は明日当地を出発して信州へ行き、秀忠公のお供をして登る事、何でも尋ねられたら遠慮なく申上げる事、倅の新次郎は旗本に残すので少しも心配しなくて良いと親切な言葉で此方へ派遣された者であるから、左門の考えも聞くのが良いでしょうとなった。秀忠公もそれではと左門を呼び、この城攻めについて意見を述べよと云う事になった。

左門は、懼りながら私が思うには、城主安房守は軍事に長けていますが、何と云っても少身者ですから、夫ほど大きな事は出来ない筈です。随って押さえの部隊を少々残して、御前様は一時も早く上方へ出陣されるのが良いと思います。しかしそうも出来ないと思われるなら、味方の人数は少々損耗しますが、諸部隊で急襲して真田父子の城兵を成敗して明日中にもここを

引払われ、上方の一戦に間に合う様に成されたいと申上げた。秀忠公も左門の意見に同意し、家中の誰もが左門の両様の考えは良いと思つた。そこへ本多佐渡守が進み出て、内府様がお出発前に私を江戸へ呼ばれ色々云われた時、御前様(秀忠)はお若いので強過た働きもあるかも知れぬ、これだけが心配と云われていましたと述べた。随つて急襲すると云う議論は止めになったが、最初から押さえの部隊を置いてその俣ならともかく、一度も二度も反抗する真田を其俣にして置く訳にも(2010)行かなかつたのか部隊を引揚げる事が遅れてしまった。

十一 大垣杭瀬川の戦い

慶長五年(1600)九月十三日内府公は岐阜へ着陣したが、その時厚見郡西居村亀甲山立政寺の住僧が大きな柿を差上げた。公はたいへん御機嫌で近習衆へ、皆これを見よ早くも大柿(大垣)が私の手に入ったぞ、皆で奪い取れと座敷にばら撒いたので御前に伺候していた人々はこれを奪い取つた。これによりその頃は、大垣を大柿と書き換えたと云う。旧記の中では安八郡瑞雲寺住僧が柿を差上げたとあるが、これは違う由である。

翌十四日彼地在陣の諸大将は何れも手廻りだけ連れて呂久(揖斐川)の川辺迄迎えに出た。その時水野六左衛門勝成も居り、其方は今何処に居るのかと尋ねられたので、私義は井伊本多両人の指示で敵方押へのため、曾根村に在陣しておりますと答えた。曾根は大切の場所だから当然の事である。各部隊の人夫を集めて古城を修復するのは二三日内に出来ると思ふかと質問があつたので、縦令大勢の人夫で取り掛かつて六七日では中々城と云う程に

ならないと思ひますと答えると、それではそれは止めて其方は曾根村に在陣する様にとの事である。六左衛門は、前に井伊本多両人から曾根在陣に付いて云われた時も御前様御在陣迄勤めますと断つたのですが、私は今から御旗本へ属して御一戦の時は戦陣の中で御奉公の覚悟ですと申上げた。家康公は、其方等は外の者と違ふので、兎にも角にも私の為を第一と思ひ、自分の功を立てたい思ふのは其方らしくない事であると厳しく云つた。勝成はそれ以上は一言も云わず曾(p320)根村へ歸つて行つた。

註 水野勝成(1564-1651) この時は刈谷城主、家康側近

九月十四日の昼時前内府公は赤坂に着陣した。夫より前に井伊直政と本多忠勝両人に指示してあつたので諸將の陣場等も出来ており、それを巡見した後岡山の本陣へ入つた。夫までは先手の諸大名方が岡山近所に陣取っていたが、十三日になると岡山御本陣より四五町(四―五百米)程前の方に陣を移して、岡山の左右及び後の方に旗本衆が陣を構えた。

註 赤坂 現大垣市赤坂町 岡山 現赤坂町字勝山 関ヶ原戦いの家康本陣があつた。

大垣の城中から石田の家老嶋左近、蒲生備中及び浮田家からは明石掃部、本多但馬を首将として部隊が杭瀬川を渡り、雑人達に刈田をさせた。味方中村一学の陣の近くであるため、武田五郎兵衛と云う者が一間余り有る鳥毛の棒の指物を立て一番に駆け出し、石田の兵と戦い二三人を鏑で突いたが鉄炮に当り即死した。これを見て中村の侍が我も我もと駆けつけるので家老の野一色頼母や藪内匠等も続いて押出した。その時石田三成の配下は水野彦次郎、林半助、伊前頼母等を始めとして五百人程で、浮田秀家の家来は明石掃部、本多但馬、稲葉助之進、不破内匠等を始め八百余の者が布陣していた。

石田の隊長嶋左近と蒲生備中が相談して木戸一色村の藪陰に伏兵を置いたが、中村の部隊は予想していなかった。刈田の警固と見へた大垣勢が逃げるのを追い掛けると一色村の伏兵が一斉に起上つて鉄炮を打懸け、その後ろから百人余りが手に鎧を持って突掛つた。中村の部隊は苦戦となり奮闘したが成合平左衛門を始め数人が討死して、中村部隊が終に追われて引下る。その時野一色頼母は金の三つ幣の差物で鳥毛の団子の馬印を川べりに (p.321) 押立て、敗軍の味方を制して、頼母が是に控えているぞ、皆の様子は見苦しいぞと大声を上げる。同役の藪内匠が引下がって来るのを見て頼母は、其方は何故引くのかと詞を掛ければ内匠は振り返り、私は手傷を負ったので退くと云って川を西に渡つた。頼母はそれでも踏留り自身も鎧を取って働いたが、石田の家来梅北市右衛門と云う者が打ち掛けた鉄炮に中り落馬した。配下の侍杉村信助が立寄り頼母の死骸を運ぼうとしたが、石田の兵達が来るので、頼母の具足の上帯を切つて刀脇指だけを取つて退いた。その後で石田の兵が野一色の首を取つた。

中村の家臣中村進助、河毛新八等と言う者を始めとして廿八人が討死し、中村の部隊は既に壊滅かと思えたが、陣場が並んでいる有馬玄蕃部隊の数十人が駆け出した。中でも稲次右近は鳥毛の半月の指物で真先に進み川を乗り渡り向こうの堤へ駆け上がった。そこへ金の制札の頭立つた様子の横山監物と名乗る武士が稲次に掛り互に馬上で戦つたが、双方馬より下りて組打となつた。横山は稲次を組伏せて上へ乗懸つたところへ右近の若党が駆けつけ横山の具足の綿嚙を取つて引き返すと、右近は下から跳ね返して乗り掛かり首を取ろうとする。そこへ横山の家人が駆け寄つて右近の甲のしころを取ると又右近の若党が駆けつけ一刀切付けると、しころを放し刀を抜き切合う内に右近は横山の首を取り立ち上がり、監物の若党も切殺して其首を馬の鞍に結付、横山の首は馬上に引下げて自身で旗本へ持参した。

此時有馬家の部隊も追々駆けつけたので、中村の部隊も陣隣りからの応援で味方の勢いもつき、大垣勢と競り合った。内府公は (p.322) 岡山の陣所から見て渡辺忠左衛門に行かせ部隊を引上させ連れ帰る様に指示した。渡辺は金の手桶の指物で川を乗り渡り、中村と有馬の配下の中に馬を乗入れ、色々指示するが中々收拾できない様子である。そこで今度は井伊兵部少直政に本多内記忠朝を添えて早々引取せよとの指示があり、両人が行き敵味方引き分けて引き連れて帰つた。

著者註 この一戦の次第は世間に流布する旧記にも大筋は載っているが、これに関する諸説をこの後に書付ける。

九月十四日昼時前内府公が着陣した事は大垣城中でも知られて居らず、關東方先手の部隊が四五町宛前へ陣を移したので、大垣城中で反徒方の諸将が集つて評議する中で、内府が着陣したに違いないと云う者あり、近い内に着陣するので諸軍の陣替をしているのではと云う者もあつた。浮田秀家は、評議する迄もない、我々の配下に刈田をさせ、その警固として部隊を付けて様子を見ましようとおつた。三成は、それでは我々の配下も行かせようと言う事になり、浮田家からは明石掃部と本多但馬、石田方よりは嶋左近と蒲生備中の二人宛の頭分が出陣した。

中村の部隊が大垣勢の引取るのを追掛けて杭瀬川を渡るのを内府公は見て、川限りで追留めをしなければ、と云っていると程なく追返されてきたので、私の云つた通りだ、あれを見よと側衆へ語つた。

稲次右近が横山監物に組伏られた時、横山を引倒して主人 (p.323) に名を挙げさせた右近の

若党が味方に討たれ、首を持ち去ったものあった。右近が驚いてどんな者だったかと尋ねると馬の口取りの中間が云うには、何者でしょうか、母衣を掛た侍ですと云う。右近は大変腹を立て旗本へ行つた時、自身討捕つた首二ツ提出して感謝され首帳に付る時、拙者より先に首を持参した人がありますかと尋ねたところ、堀尾信濃守殿の母衣の衆が首一ツ持参しただけですとの事である。右近は、其首は私の若党の首です、味方討に間違い無いので帳面から取消下さいと云った。首帳付の役人は、貴殿の申入れて帳面を反古にする事はできませんと互いに問答していた。内府公がそれを聞き、何を云っているのかと尋ねたので首帳役人が事の次第を申し上げたところ、この様な取り込んだ戦いではその様な事もあるものだ、そのままに捨て置けとの事だった。

しかし関ヶ原一戦後、この事が話題となり、堀尾信濃守の家中で母衣の衆は仲ケ間十人いた。残る九人の同役は相談して、敵味方の見境も付かぬ者をその俸にして置かれるのでは我々は母衣を返上しますと申し出た。信濃守も扱いに困って親父帯刀に相談し、其者の母衣を取上げ加増を与え、弓組の足軽三十人預けて先頭に任命した。

稲次右近はその時の誉れにより、有馬玄蕃頭は過分の加増を与えて家老職に任じた。

長命で寛永年中に肥前国の有馬城に籠り、切支丹成敗の時八十五歳で討死したと云う。

右近が討取つた横山監物とは蒲生備中の家老との事である。

註1 有馬玄蕃頭豊氏 遠江横須賀三万石

註2 母衣(ほろ)衆 戦国時代の武将の親衛隊で連絡等に当つたエリート侍が着用したマントの様なもの。 派手な色で信長の黒及び赤母衣衆、秀吉の黄母衣衆等有名

井伊直政は味方の軍勢を引揚げさせよと内府公に命ぜられた時(p324)、その服装は猩々緋の

羽織を着用し、金の蠅取の小馬印を馬の傍に付けて采幣を打振って敵味方が入乱れた中へ乗入れ中村、有馬、田中三家の部隊を纏めて引き取つた指揮は見事な様子だった。

本多忠朝は中村の部隊に乗付け、何故ぐずぐずしているのか、早く引揚げられよと大声で指示すると、中村家中の兵野助之進と林文太夫と云う者が、指示は了解しました、ここは我々兩人に任せられ、有馬殿の部隊を指揮されよと云い捨て大垣勢を追立てた。直政はこれを見て、最初の合戦で中村部隊は多くが討たれ、既に川を渡って退却した者もある中で、部隊が未だに持ちこたえているのは、この兩人の働きかと深く感心した。

関ヶ原一戦の後、この兩人を徳川家に招いたが兩人の返答は、忝い事ですすが幼少の主人一学を見放し家を出る様な事は出来ませんと断り、その時代の人々に高く評価され武名も上つた。

註1 中村一学、中村一氏嫡子十歳 一氏は駿河領主だったがこの一月程前病死した。

註2 本多忠朝 この時十八歳 本多中務忠勝次男

この戦いの時、大垣勢の中に白しなへの指物を持つ者がしつかり踏留まって殿(しんがり)を勤めながら退いて行く。その振舞いが勝れているのを内府公が岡山の陣より見て、あの白しなへの振舞いを見よと側衆に度々云った。外に一人白い大立物を持った武者も白しなへと同様に見事に働いた。

後日に兩人の名前が判明したが、白しなへは林半助と云う石田家の使番の侍で、残る一人は浅香庄次郎と云う。浅香は木村伊勢守方で児小姓を勤め十八歳の時五千石の知行を(p325)取り、奥州で伊勢守が一揆に囲まれ苦勞した時に忠義の働きをした者である。木村の身上が果て後石田方へ呼ばれ客人分の待遇で仕えた。この戦いの時は石田の勘気を蒙っていたがてんの皮の羽織を着、銀の大釘の前立物を担いで働いた。中村家の梅田大蔵と云う者が負傷して引下がれないのを突き伏せて首を取って帰り、大垣城の角矢倉の上に秀家と三成が居る

前で、水野庄次郎です、この首を取ったので御勘気をお許し下さいと云った。矢倉の上から三成は、手柄を認めたので勘気も許す、ご苦労だが先手に行つて部隊を引揚げられよとの事で、庄次郎は梅田の首を若党に持せて城内へ行かせ、自身は合戦場へ戻り、林半助と共に殿を勤めて部隊を引取った。関ヶ原一戦後は浅香左馬助と改名し、加賀の前田利長から声が掛つたと云う。石田方に属した時は水野庄次郎と名乗つた由である。

十一六 関ヶ原へ

杭瀬川の一戦が物別れとなつた後、嶋左近と明石掃部は同道で秀家、三成等が上つて居る矢倉へ来て戦いの次第を報告した。その時浮田秀家は、内府は着陣した様子ですか、今度の一戦(関ヶ原)は何時ごろとなりそうかと尋ねた。嶋、明石と一緒に答えたのは、忍の者を送り敵陣の様子を伺わせましたが、内府は昨日昼時頃着陣されたに違いありません。又先手の陣替をした事は勿論、内府の旗本の諸陣共に陣張を一枚も張らず、全て一夜陣の様子と報告がありました。この事から私共が考えるには今度の一戦は明日にもあるかと思ひます。

そこで南宮山に布陣しておられる毛利宰相殿、松尾山に入られた筑前中納言殿(小早川秀秋)も共にお若いので(p326)、皆様(秀家、三成)がこの大垣城に居られては関ヶ原の一戦が心配です。当城は内府側が押への部隊を配置するので関ヶ原へ急に出陣する事は難しくなりますので、この事を今御思慮されるのが良いでしょうと申上げた。

秀家三成共に二人の意見に一理あると云う事で、矢倉を下り直ぐに本丸へ行き急ぎ諸将を召集して相談した結果、関ヶ原へ移動する事に一決した。各部隊とも提灯や松明等を燈す事はせず、栗原山の篝火を目当にする様にと触れた。

註 毛利秀元(1579 - 1650)、小早川秀秋(1582 - 1602) この時二一歳と十八歳

三成も支度のため小屋へ帰つたところへ島津中務豊久が来て、島津兵庫頭義弘からの急用と云う口上があり三成は面会した。兵庫頭は今宵当城から関ヶ原へ移動するとの事だが、良く考えるとそれは良くない事です。兵庫の意見は当城に居る軍勢で今夜半頃に内府の旗本へ夜襲を掛けられるのが良い。御同意戴けるなら兵庫頭義弘が先手を受け持ちます。秀家が貴殿の御両人の内一人が関ヶ原へ行かれ、彼地の諸軍勢を指揮して内府の先手を滅茶苦茶に切崩す事を相談下さい。そのため私が連絡に来ましたとの事だった。

三成がかなり返答に困つていると嶋左近が出て来て、兵庫頭殿の頼もしいお考えではありますが昔から夜討夜軍等と言うものは小勢の方より大軍の方へ仕掛けて勝利を得ると云う例は聞いていますが、大軍が小勢の方へ仕掛けた例は聞いた事がありません。明日は平地での一戦で味方の大勝利は疑いありません。この点ご安心下さる様に兵庫頭殿へお伝え下さい。久しぶりに内府の敗退を見る事ができますと言う。三成も、只今左近が言う通り味方の勝利は明白ですが(p327) 兵庫頭殿はより慎重な考慮の上ご意見戴いた事はありますがたく思いますとの事だった。

その時豊久は左近の過言は不届千万と思つたが顔には顕さず、貴殿は内府の敗走を見られたのは何時の事ですかと尋ねた。左近は、私は以前故あつて武田信玄の家来山県の下に居た時山県の部隊が内府を掛川の城近くの袋井縄手迄追つた事があり、その時内府の敗走を見たと言ふ。豊久は左近に向かつて、それは俗に言う杓子定規と言うものです。その時の内府と今の内府を同じと思つては大きな間違いです。明日の一戦で内府の敗走が貴殿が見られた様なら喜ばしい事ですが全くそうは思いませんと云い捨て苦笑いして帰つた。

著者註 この一説は関ヶ原記、家忠日記等の書には見えないが、浅香左馬助が語るのを直接に

聞いたと三輪大学が浅野因幡守殿へ雑談した。其上以前私が島津帯刀と会った時に尋ねたところ、委しい事は分からぬが関ヶ原一戦の前の夜、兵庫頭や中務の考えは家康公本陣へ夜討を掛けようと考えていた事は伝え聞いているとの事で爰に書留めた。

十四日夜に入り十時頃から雨が降出したので、月夜に拘らず足元が見え難かった。特に牧田通りを通ったので大垣から移動する軍勢は皆難儀した。夜半過ぎから雨も小降りになり、暁に至る頃には空は晴れてきたが朝靄が深く、物の見分けが出来ない程だった。朝九時頃から靄も薄くなり、一戦が始まる時は敵味方の旗のぼり(238)も見え渡った。筑前中納言秀秋の家中は一同に金のばれんの指物で朝日に輝き、松尾山を金色に染めた様に見えたと小木曾太兵衛は語った。

慶長五(1600)年九月十五日関ヶ原一戦の次第については是まで関ヶ原記と名付けた書物は幾種類もある。その外家忠日記、村越道休の覚書、石谷去入斎の聞書などと言う物もある。其時代の事を書いた旧記などを読み合せて見ても、大体は同じだが少しづつの違いも散見される。その是非虚実は明らかではないが、今時是非は誰の家に伝わった正しい記録とか又は比類なき秘書と称するものも多々あるが、それも皆近頃の作書でその時代の正しい記録などは無いに決まっている。一般に小場所や小競合の事を書留めた覚書など委しい書留もあるが関ヶ原の一戦は天下分目の合戦で、日本では古今例のない大合戦である。その上僅か一二時間の間に爰かしこで同時に戦ひが始り、程なく反徒方が負けて関東方の勝利と成った事であるから、諸部隊諸方面の合戦次第を誰が細かく見届け、聞届て書留める事ができようか。どの書も全て後の人の作書であるから、その積もりで広く其時代の書を取集めて、この事は是が正しいと思う方を選択して納得する他はない。それでも疑わしい事はその場に立合った人に

尋ねるのだが、私が若い時でも二度の大坂の陣に参加して走り回った人は多いが、関ヶ原陣に参加した人は三人以外(239)出合っていない。まして今から百三十年前の事であり、誰に頼り聞き糺す事もできない。随って関ヶ原一戦の次第は概要を記すのみである。

九月十五日反徒方は毛利宰相秀元を首将として吉川以下の毛利家の軍勢が南宮山へ登って陣を構えていた。しかし既に関東方へ味方する事になっていたので合戦が始まったも甲を着た武者は一人もなく、足軽は鉄炮を自分の前に置いて麓の様子を見物していた。これは裏切りに間違いないと近くに布陣した長束、長宗我部、安国寺等は気付き、毛利家の裏切を心配している内に関ヶ原の一戦は上方勢の負となり、旗を乱して伊吹山の方へなだれ込む事になった。特に安国寺の部隊が一番騒ぎ立て麓へ逃下るのを見て四国勢(長宗我部部隊)、水口勢(長束部隊)も同じく敗走した。此三手の者達を追討して首の五百か千も討捕って忠節を示せば、先祖元就以來の領知はその俣だつたらうに残念な事と、今でも毛利家譜代の家臣は悔しがっていると兼重勘九郎が語った。

十四日の夜半過頃福島左衛門大夫政則は祖父江法斎と言う者も使者として派遣し、反徒方は今夜中大垣の城中を引払い、牧田海道を経て関ヶ原へ出陣します。明日早朝より一戦を始め切崩すために早々出陣されるのが良い伝えた。法斎は以前より内府公も知っている者なので則御前へ呼び直ちに出陣されるのか直接返答があった。内府公は湯漬を食べ、支度する間天正年間に長久手に(230)において羽柴秀次との一戦の事を小納戸衆や小姓衆へ雑談した。秀次方の大軍をどつと追崩してと言いながら直ぐに馬の乗るので納戸衆が、御甲はと言えば、いやいやとだけ言い茶縮緬のほうろく頭巾をかぶるだけで出馬した。

南宮山に布陣した反徒側の首将である毛利秀元は既に味方となり、当座の人質迄も出したが、内府公は猶も油断せず、其上長宗我部、長束、安国寺等は絶対の石田方であるから、押へとして浅野左京大夫幸長に山内対馬守、有馬法印、徳永法印、同左馬助、金森法印、一柳監物、市橋下総守、松下右兵衛、横井伊織等を差向けた。

ところで大垣城の本丸には福原右馬助、備中丸に熊谷内蔵丞、垣見和泉守、木村宗右左衛門父子、三の丸には相良左兵衛、高橋右近、秋月長門守等総人数七千余を配備していた。しかし合戦が始る頃は城中には福原だけが残り、其外全ては関ヶ原の合戦場へ移動する事が分かったので、大垣城の押へとして西尾豊後守、水野六左衛門、松平丹波守を配置した。奥州の津軽方より派遣された家来達もその人数に参加して水野六左衛門の指揮下に入った。奥州岡山の陣所の留守居には堀尾信濃守が配置されたと言う。

落穂集第十巻終